個性『Lobotomy Corporation』

Lobo

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ーーーもう、一人なんかじゃナイ。

ーーダッテ、ワタシタチガイルカラ。

目次

その日、彼は。 1
現時点での公開情報 5
教育。 8
入学試験。 13
個性把握テスト。 23
雄英での授業。そして戦闘訓練。 31
嵐の前の日常。 43
Ｒａｂｂｉｔ Ｐｒｏｔｏｃｏｌ（ウサギチーム） 48
乱戦。そして弱点。 53
『最強』対『最悪』 62
事後処理。 71
ＩＦ．最悪の結末。 75
次のステップへ。 80
有精卵（ヒーロー） 85
制限、そして会議。 96
特訓、そして決断。 101
宣戦布告。 106
第一種目。 111
第二種目、結託。 122
第二種目、決戦。 126
束の間の馬鹿騒ぎ。 134
決勝戦、その１。 139
決勝戦、その２。 149
一握りの天才と人造りの天災。 158

再戦（リベンジマッチ）――――167
最後は本気で。――――176
ＩＦ２．絶望へのカウントダウン。――――184
勃発、女体化騒動!?――――189
名付けそして、懇願。――――196
再誕。――――201
再確認。――――206
謀略。――――213

その日、彼は。

・・いつからだろう？僕はいつものように夢を見るんだ。
夢ではいっつも水色の髪の女の人が挨拶をしてくれるんだ。
『こんにちは、管理。今日も逢いに来てくれたのね。嬉しいわ。』
って言ってくれるんだ。僕はそれがとっても嬉しいんだ。
・・だって、起きたら僕はひとりぼっちだから。
他にも、緑の人、青の人、赤の人、茶色の人、紫の人におじいちゃんにテファによくわからない言葉を使う人！
皆、僕を見てくれるんだ。
後は真正面には扉が沢山あって、そこには『みんな』が待っているんだ！
『女王様』に『王様』や『射手』さんや　あ！レティも！
皆が友達さ！
でも、夢から覚めればまた怖い人達が待っているんだ。

・・怖いよ。ねえ。皆。

・・僕を一人にしないで。

◊♦？

・・また彼が来てくれた。
そう、また！毎度の事だけれどもこの瞬間が一番好きな時間。
私が彼に挨拶すれば、彼はいつも笑ってくれる。
・・アァ、堪らない。
彼らや、『アブノーマリティ』達も。
・・当然だ。私を含めた全員が彼を取り巻く環境を知っている。
・・憎たらしい。今すぐにでも『外』に出て彼を護ってあげたい。
だが、そんな理由で私たちが彼に友好的になっているわけでは無いのだ。

理由？『私達』全員が彼を愛しているからに決まってるじゃない。
あの子以外に私たちが欲しいものなんてない。あの子傷つける全てを引きずり、引き裂き、細胞一つ残さず消してしまいたい。
けど、私たちが出るにはまだ『鍵』が無い。

・・・あぁ、早く『私』を呼んで？スグニダッテヤツラヲコロスカラ。

◊♦？

「・・・おい、起きろ。実験の時間だ。」
「・・・・」
「・・狸寝入りなのは分かっている！」
「ひぅ・・やめて！」
「いい加減しないか！俺はな！『無個性』のお前に『個性』をくれてやるんだ！有り難く思って受けるのが当然ってもんだろうが!!あぁ!?」
「たすけて！誰か！助けて！」
「はぁ・・ったく・・前までは大人しいガキだったってのに・・」
「助けて！たすけてよぉ!!」
「うるせぇ！」
「たすけてぇ!!」
Ａｎｇｅｌａ（アンジェラ）！

◊♦？
・・彼が『鍵』を手にした！漸く！
さぁいきましょう！彼を救いに！

◊♦？

・・彼の後ろから突然扉が現れた。
現れた『彼女達』は瞬く間に研究所の職員全員を一人を除いて皆殺しにし、その場所を完膚なきまでに破壊した。
・・これが生き残っていた職員から聞けた唯一の情報だ。
彼はその後狂ったように頭をコンクリートに打ち付けて自殺した。
・・聞けば聞くほど訳の分からない話だ。
話に聞く彼は今現在保護されているし、その周辺に彼女なんていなかった。
だが、あんな小さな子どもを実験動物にしていたなんて・・とても許されない事だ。
・・いや、Ｎｏ．１ヒーローといわれているのにも関わらず少年に襲った不幸、そして『オール・フォー・ワン』が作ったこの研究所に気付く事ができなかった私にも責任がある。
倉持少年・・だったか。彼が立派に成長するまで私が後見人となって彼を護ってみせよう！

「へぇ・・貴方は彼等とは違うようですね。」

っ!?
なんだ・・今の声は後ろから聞こえた気がしたが・・いや、気のせいだろう。

◇◆？
・・あぁ、忌々しい。
けど、今はアイツに彼を護ってもらうのが最善手ね。
でも・・もう『鍵』は開かれた。
いつだって彼に会える！
・・さてと、私は彼に会えるって分かった『アブノーマリティ』達を宥めなきゃだわ・・はぁ。

彼はその日、『鍵』を開き、『個性』とかけがえの無い人達を手に入れた。

彼女達が住むその個性の名は・・・

『Ｌｏｂｏｔｏｍｙ　Ｃｏｒｐｏｒａｔｉｏｎ』

これが後に大きな事件の中心となる彼の『オリジン』である。

現時点での公開情報

名前『倉持管理』
好きなもの：僕を愛してくれる人達
嫌いなもの：実験
天敵：『オールマイト』『オール・フォー・ワン』『デク』『イレイザーヘッド』

個性：『Ｌｏｂｏｔｏｍｙ　Ｃｏｒｐｏｒａｔｉｏｎ』
ゲーム：ｌｏｂｏｔｏｍｙ　ｃｏｒｐｏｒａｔｉｏｎ（以下ロボトミ）の大体の要素が使える個性。
現在利用可能なもの
・『アブノーマリティ』
ロボトミの観察対象である、彼らを召喚できる。
但し、収監難易度に合わせて召喚できる数は減っていく。
最も難易度が低いＺＡＹＩＮは五体呼び出せるのに対して
最も難易度の高いＡＬＥＰＨは自分が危険水域に達しない限りかつ一体しか召喚は不可能となっている。
（但し、危険水域というのはアブノーマリティの基準とする。）

『魔法少女』
魔法少女がワルモノ倒しにやってくる！
・『セフィラ』
ロボトミにおける上級ＡＩであるセフィラを呼び出す。
こちらは二人が限定。
尚、自発的に来る模様。
（だが主に来るのは『赤い霧』ことゲブラーと『調律者』ことビナー。）

・『ＥＧＯ』
アブノーマリティから抽出されるエネルギーを利用して作られる
装備および武器を装備出来る。

主に装備するのは『白夜』から入手出来る『ｐａｒａｄｉｓｅ　ｌｏｓｔ』。

・『ウサギチーム』
ある範囲限定で無差別射撃（管理は除く）するウサギチームを招集する。
「管理の要望なら即参上だよ！いつでもどうぞー！」
「まぁ、アタシもキレたら『サイ』や『トナカイ』も突っ込ませるケド。」
以上、ウサギチーム統括マオからでした。

・『アンジェラ』
特に言うことは無し、彼女はいつも彼の側に。

・『祝福の朝』
現在この情報を閲覧する事は出来ません。

『黒い森』
悪い子誰だ？僕たちの友達を怖がらせる悪いやつ何処だ！

オ　マ　エ　ダ
ナ　？

・・・黄昏の夜はすぐそこに。

『』

「公開すべきものでもありません。」

分かりやすく言うならＸＫ　―クラスの発生。

性格：大人しく控えめ、かつ幼い頃のトラウマから余り意見をハキハキと言えない。但しその影響で物事を客観的に捉えられる。

備考：彼の個性はあくまでも『宝箱』である。故に『イレイザーヘッド』の消去は『箱』に作用する。勿論、箱を無くした彼の体内は容量不足で爆発し死に至る。そういった意味では彼はこの上ない『ジョーカー』である。

また、『オールマイト』『デク』が持つド級の高火力は容易く彼の『EGO』を破壊し『オール・フォー・ワン』の個性複製による連射には彼の装甲は耐え切る事が出来ない。

逆に言えばそれ以外の個性は殆どが対処不可能である。

しかし、忘れてはいけない。

彼は『箱』であるならば彼女達はなんなのかわからない人はいないだろう。

ならば、彼女達がそこまでして彼に縛られるのを良しとしているか。

そこが分からなければ

世界は確実に終焉を迎えるだろう。

教育。

彼がオールマイトに保護されてから早1ヶ月。
・・そんな彼が今何をしているのかと言うと・・
「其処は違いますよ管理。ここはこの公式を使うんです。」
「あ！そっかありがとう！マルクトお姉ちゃん！」
「いいえ！これぐらい君なら出来ますよ！さぁ！次はこれです！」
「うん！」
（あああ!!彼におね・・お姉ちゃんって！やったぁ!!!）
「むぅー。」
（マルクトばかり・・ずるいです！）

「そら！もう終わりか!?そんなものでは武器が泣くぞ！」
「はぁ・・はぁ・・もう一本お願いします！ゲブラー師匠!!」
「その勢いや良し！ではいくぞ！」
「はい！」
「ふぅ・・さて、これが終わったら次は私か。・・備えを整えておくか。」
（師匠・・いい。）
（さて・・彼の周りは掃しておかねばな。）

「ほら！置いていくわよ！管理！」
「ごめんねティファレトが・・ほら一緒に行こうか管理。」
「うん、ありがとうティファ。」
「あー！ズルいわティファレト！私も彼と手を繋ぎたいわ！」
「うん、じゃあ皆で繋いで行こう！」
「じゃあ買い物にしゅぱーつ!!」
「「「おー！」」」
（計画通りね、ティファレト。）
（そうだね、ティファレト。）

「今日もお疲れさんだな。ほらコーヒー飲むか？」
「ええ・・僕もう寝るんだけど・・」
「ハハ！冗談さ。これは只のココアだよ。」
「おいケセド。そういったものはよせ。管理が傷つく。」
「そう言うなってネツァク！・・おいイェソド？何でそう睨む？」
「・・・よく見ろ。」
「ほっほっほ。イェソドの言う通りよく見てみなさい。」
「何を見ろってホクマー・・あ。」

すぅ・・すぅ・・

「・・寝てるよ管理のやつ。」

（おやすみ、我らの『宝物』）

・・とまぁ、オールマイトがヒーロー活動に勤しむ間彼は彼なりに社会進出の為努力していた。
オールマイトが彼に対する気遣いから中学校には通わせず通信教育にしていた為彼はセフィラ達の力を借りて日々精進を続けていたのである。
彼がそれ程に努力する理由それは・・

◊♦？

「ヒーローになりたい・・ですか。」
「うん、僕もアンジェラやオールマイトみたいなカッコいい人になりたいんだ。」
「・・私はあまりオススメしません。今の情勢において私が調べた所確かに今の職業で人気かつ最も収入が安定するのが『ヒーロー』です。ですがそれは時として命の危険を産む・・私はあなたが傷つく姿を見たくはありません。」

「あのね、アンジェラ。僕は・・ずうっとひとりぼっちだった。」
「・・はい。」
「でも、あの日あの時にアンジェラに出会って、お姉ちゃん達に出会えて、アブノーマリティの皆に出会えて、オールマイトに拾われて。」
「その時、僕はとっても救われたんだ。」
「・・管理。」
「だからね、僕は・・アンジェラが僕にしてくれた事をしてあげたい。」
「何処かの誰かがひとりぼっちな時」
　大丈夫・・僕がいるよ。
「って、安心させてあげたいんだ・・なんか恥ずかしいね。」
「っ！・・分かりました。貴方のその尊い想いに私達一同全霊を賭して従いましょう。」
「できれば従うんじゃなくて・・隣にいてほしいなぁって・・・だめ？」
「っっっっ!!失礼します。少し目を背けて貰って構いませんか？」
「う、うん。良いけど？」
(何なのかなこの子！私を尊死させる気なのかしら!!??!?ああ!!可愛いいい!!)
「失礼しました。・・分かりました。貴方がそう言うなら私はずっと隣にいましょう。約束です。」
「うん！」

◇◆？
・・とまぁこんな一件がありオールマイトに許可を得て。兼ねてより希望していた『雄英高校』でも最難関の倍率３００倍に値すると言われる『ヒーロー科』
への入学を目指す為彼は日々その実力をメキメキと向上させていくのであった。
　因みに完全な余談だが彼とアンジェラの一幕を彼の『個性』の中で見ていた
　皆さんはというと・・・

（アンジェラ・・許すまじ！）
と怒りを燃やし、戻ってきた彼女に完璧かつ完全勝利を浮かべたドヤ顔を披露された後。
第何回にもなるかわからない。
『独占禁止法違反裁判』が行われた事は誰も知る由はないのであった。

◇♦？

眠りについた彼に『ソレ』はそぉっと近く。・・愛しい人間[彼]を起こさぬように。
『ソレ』は子どもが描いた絵画のような姿で彼に近づき・・

『交信』を開始する。

受け渡すのは何処か平行世界において『真理』或いは『根源』とも呼ばれるもの。
常人なら廃人と化すその行為を彼は躊躇いも無しに実行する。
何故なら彼は実験においてある種の倫理観を破壊され、脳の異常な拡張が行われているから。故に『ソレ』は確信を持って事に及ぶ。
・・一つ訂正を加えると『ソレ』が行なっているのは唯の当たり前の友情関係の営みのそれであり、悪意なんてものは存在しない。
だが、それはあくまで主観上の話。彼の脳が果たして壊れるかなど彼自身にもわからぬものだ。
・・でも、それでも。彼は
すごいね！欠片さん宇宙ってこうなんだね！教えてくれてありがとう！
なんて、言葉をかけるのだろう。
だから他の奴なんて知った事では無い。
愛するものに贈り物をして何が悪い。

『宇宙の欠片』は思う。

管理。笑顔。僕。笑顔。皆。笑顔。僕ら。一緒。

入学試験。

さて、時は流れついに雄英高校の入学試験が訪れる日になった。
この日オールマイトが
「ＨＡＨＡＨＡ！大丈夫！倉持少年ならきっと合格できるさ！・・・え？私かい？・・・少し野暮用があるので失礼するよ！」
なんて言っていたことを彼は正に雄英高校の試験会場で思い出していた。
時間は筆記試験開始の３０分前。まだまだ時間に余裕はあるが復習の時間に回したいという彼の強い要望により現在絶賛確認作業中なのである。
「んー。これぐらいならまぁいけるか。」
実際、彼はティファレトと買い物に行った際雄英高校の過去問を買っていたりするのだが、そこはマルクトを始めとする頭脳派の教育、不本意ながらある事情により与えられた脳の異常な発達。
そして『宇宙の欠片』が与えた『知識』。
これらの要素が揃った彼にとって過去問も小学生の試験と同等。
意外と余裕を持って優雅にその時を待っていた。
・・因みに万が一分からないものがあってもアンジェラを始めとする頭脳派達は一切の助言は無しという約束をしている。
あくまでも筆記は自分の実力で勝ち取りたいのだ。

そうこうしているうちに試験１５分前のチャイムが鳴り、会場の空気が変わる。
彼もまた集中力を高めていた。
（目標は満点！僕は色々な所で遅れているから頑張らないと！）

そして・・・

「では試験を始めてください。」

開始の号令がなった。

◊♦？

『ハロー！エブリワァン!!俺のライブにようこそー!!』

うって変わって実技試験、なんともテンションがお高い先生がこの試験について説明をしている。

（えっと・・確かあれはプレゼント・マイク？だっけ？ヒーローはオールマイトしかわからないからなぁ・・）

そんな事を考えている間にも説明は続き先生のテンションが上がる。

しかし、その勢いについていく人は勿論居ない。緊張などでそれどころでは無いからだ。

それでもテンションを維持し続けている先生は最早一種のエンターテイナーでは無いのだろうか？

『俺からは以上だ！最後にリスナーへ我が校『校訓』をプレゼントしよう。かの英雄ナポレオン・ボナパルトは言った！「真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者」と！〝Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａ〟！それでは皆、良い受難を！』

そんなこんなで先生の説明は終わったようだ。

早速彼は『彼女達』を呼び出す。

しんと静まり返っているビル群が佇む試験会場に

・・狼の吠える音が響いた。

◊♦？

「・・おい、管理。私をよりにもよってこいつと一緒に呼び出すとかどう言う神経してんだ？」

「・・でも、この会場と試験の内容から推測して一番頼りになるのが『赤ずきんの傭兵』さんと『大きくて悪いオオカミ』さんだと思ったんだもん。」

「・・・はぁ。ほんとお前はこういうところがあるというかなんという

か。」
『ゲラゲラ！ん？オレが嫌ならさっさと帰ってまた眺めてればイインジャネェカ!?赤ずきんさんよぉ？』
「殺すぞ、クソオオカミが。」
『やってみろや、小娘が。』
「あー！今ここで争わないでよ！闘うなら帰ってからにして！」
「・・・わかったよ。で？今日の依頼はなんでしょうか？管理サマ？」
「ん！」
『はいはい・・オレ様はどうすればいいんですかね？主人サマ？』
「オオカミさんは僕と一緒ね。赤ずきんさんは別行動。それと・・赤ずきんさんちょっと耳貸して？」
「ん？」
（赤ずきんさんは怪我人の救助をお願い。僕も出来るだけするけど・・僕も得点を取りに行かなきゃだから。）
（・・了解。報酬は？）
（パンケーキ・・とか駄目かな？）
（オーケー。じゃ、今回の契約はそれで。）
（うん！）
「おい。」
『んあ？』
「・・・ふっ。」
『は？テメェ後で戻ったら殺し合いな。今日こそテメェに引導渡してやる。』
「・・はいはい、負け犬乙。」
『まぁ、オレはこれからコイツと一緒に行動するんだがな！この大きくて悪くてカッコイイオオカミ様がな！ザマァ！』
「死ね。」
「はいはいそこまでね！」

◇◆？

『・・・ヘーイ、そこのボーイ。話は終わったかい？』

「・・・あ、すみません。大丈夫です。はい。」
そう、まだは試験が始まっていないのに彼は悠々と作戦会議をしていた。
当然、会場内の生徒とプレゼントマイクは唖然とする。
だって何も無い所からいきなりこの1人と1頭が現れたのだから。
彼女達が彼の個性である事はわかるし、それが召喚系統である事もわかる。
しかし、発動したタイミングが分からない。
通常、召喚系や転移系は何かしらの合図があるもの。
だが、彼にはその前例が一切通じない。
生徒はその不気味さと『赤ずきん』と『オオカミ』の凄惨な見た目から恐怖を覚え。
プレゼントマイクは
（コイツはシビィー奴がはいってくるかもしれねぇなぁ。）
と1人考えていたのだった。

◇◆？
『じゃ、ボーイの話も終わった事だし！はい、スタート！』
（じゃあ、作戦開始！行くよ2人とも！）
（了解！）
（じゃあ、管理はオレの背中に乗りなぁ！いくゼェ！）
合図がなった瞬間、彼らは即座に行動を開始。
先程の事もあり、まだ気が抜けていた他の生徒達は再び呆気に取られる。
『どうしたぁ!?実戦じゃカウントなんざねえんだよ！走れ走れぇ！賽は投げられているぞ！』
という一言により生徒一同は再起動し、我先と走り出す。
残ったのはモジャモジャとした緑髪の少年1人だけだった。

◇◆？
『オラァ！』

『コロっ!?』
「ふっ！」
『ケペッ!?』
『ゲラゲラ！やるじゃねぇか狩人サンよ！』
「ありがとう。ほら次に行くよ。」
『おうともさ！』
オレ様が爪や牙でガラクタをすぐさま破壊すれば上の主人サマが『射手』から貰った銃で運良くオレ様の攻撃から逃れたのをブッ殺していく。
アァ・・楽しい。
さてと・・今で大体５０はいったかぁ？うちの主人もおんなじぐらいだから
・・ワカンネ。
まぁオレ様は主人サマとこうやって何かしてるだけで嬉しくて仕方ねぇんだが。
クッククク・・赤ずきんはザマァねぇなぁ？
今はオレ様だけが主人サマを見ている。映像ごしじゃなくてな。
それがたまらなくオレ様を満たしていく。
・・さぁ、残り５分だ。次は何処に仕留めに行く？オレは何処にでも付いて行こう。
『俺』が唯一食べたく無いと思わせたお方よ。

◊♦？
・・・ふぅ、これで６０体目かしら。
『ギギ・・ギ』
全く、雑魚のくせにうっとおしいのよ。
・・あぁ。早く彼のパンケーキが食べたい。私だけの報酬。誰にだって渡すつもりはない。
別にパンケーキじゃなくても彼が与えてくれるものは何一つとして手放すつもりはないのだけど。
彼は私にとって『日常』だ。あのクソ狼から全てを奪われて斧を磨

き続けて傭兵になってからもう得ることも無いと思っていたものだ。
『唯の赤ずきん』だった頃の私を・・この『醜い顔』をあの子の前だけでは晒す事が出来る。
だからあの子の命令は絶対だ。
私にとっての全ては今はあの子だけの物だ。
あの子が殺せと言えば殺す。殺すなと言われれば殺さない。
今の『私』はきっとそれが正解だ。
「誰か！誰かいませんか！助けて下さい！」
はぁ・・これも確か依頼だったわね。
「退きなさい。」
「え・・？」
銃で彼女が埋められていた瓦礫を吹っ飛ばす。後は安全な場所とやらに運べばいいのね。
・・あぁ、成る程この試験はその『意図』もあるわけ。
流石、管理だわ。
「あ、ありがとう・・赤ずきんさん？」
「気にしなくていいわ。彼の依頼が無ければ貴女も無視していたから。」
「そ、そうですか・・」
「そうよ」
「じゃあ・・彼には感謝しないとですね。」
「そうよ、しておきなさい死ぬ程ね。」
「ふふ・・はーい。」

「ほら、ここで休んでおきなさい。私は他の怪我人も探すわ。」
「はーい。」
「じゃあね、もう会う事もないでしょうが。」

・・面倒ね。まぁもうあと5分ぐらいだし私は自分の依頼をこなすだけよ。

そういえば、あのでっかいのは誰が壊すのかしら。

◇◆？

『終了～!!』

その言葉に全ロボットが停止する。

生徒の中には安堵する者、絶望する者、極一部キレている者と・・・

反応は多種多様だった。

「ふぅ、終わったね。」

『だなぁ、おい赤ずきん。テメェ何匹壊したよ？』

「６５」

『チッ・・オレ様もだよ。』

「僕もだね。」

「まぁ？私は？他の人間も救助してそれだから？」

『ウゼェ・・』

「じゃあまたね、２人とも。」

「ええ、いつでも呼びなさい。但し次はコイツとペアはゴメンよ。」

『違いネェ。じゃあな！オレ様の背中に乗りたい時はいつでも呼びな！』

（報酬は・・夜お願いするわ。）

（うん。じゃあまた後で。）

（ええ、また後で。）

「よし！帰ろっと！」

◇◆？

「これが今回の入学試験の映像だが・・・」

「・・凄まじいな、オールマイトの養子は。」

「個性の名前は・・・『Ｌｏｂｏｔｏｍｙ　Ｃｏｒｐｏｒａｔｉｏｎ』？また変わった名前だな。」

「ええ。ですが倉持少年に個性について聞いた際にこの名前を。」

「・・・倉持管理。小学生の時にヴィランに誘拐され、その時に両親を亡くし、彼自身は脳の実験によって親の記憶を無くしていると・・」
「彼の事情はそこまでにして、これはＡクラス首席は決まりですな。」
「個性もさる事ながら筆記も全て満点・・更にこの試験のもう一つの『意図』に気付いていた。うむ。ヒーローとしての将来が楽しみですな！」
「・・確かに、彼は呼び出した個性に合った仕事をふり、最小限の行動で合理的に試験を行っていますが・・彼の個性の底が見えません。テストの後彼にはその事を詳しく聞く必要がありますね。」
「うむ！では次のこの子だが・・・」

「ふぅん、管理の事はそんなに知らない・・と。好都合ね。私としても行動がしやすいわ。・・彼が安心して学校に通えるように裏からサポートしないと・・」

◊♦？

さて、自宅に戻った件（くだん）の彼は今・・・
「ふぅ・・美味しいわ。報酬としては充分ね。」
「そっか！良かったよ！」
「おかわりー！ちびにも下さいな！」
「・・僕も。」
「うん！分かったよー！」
（せっかくの２人っきりだったのに・・！）
（ふふ・・赤ずきんばかりに独り占めにはさせないわ！）
（彼は・・皆の。）

宅配でーす！

「あ、はーい！」
「もしかして学校？ってとこかしら！」
「・・まぁそうでしょうね。合格は確実でしょうけど。」
「・・当然。」

「さて、届いたのはこの封筒なんだけど・・」
「開いて見ましょ！あ、ちびが開いてもいいかしら？」
「うん。どうぞ？」
「やった！ほら、『銀河の子』も一緒に開きましょう？」
「・・うん！」
　せーの！

『私が投影された！』

「きゃあ!?おっきい人がいきなり出てきたわ!?」
「落ち着きなさい『レティシア』。ほら、オールマイトとかいう管理の養子縁組の父よ。」
「・・ビックリした。」
「うん？なんで養父（とう）さんが？」
『ＨＡＨＡＨＡ！驚いている事だろう倉持少年！実を言うと朝はちょっとばかし焦ってたのはこれが理由さ！』
「あ、そう言う事。養父（とう）さん雄英の教師になるのか。」
『そう！私は今年から雄英高校の教師となるのだ！にしても君の個性には驚いたよ！私にもそんなに教えてくれないもんなー！君は！クール！』
「あはは・・ごめんなさい。」
『んん！では倉持少年君は・・・』
「ごくり・・」
「ねぇ、この謎のドラムロールどうにかならないかしら？」
「・・赤ずきん。しー。」

『文句無しの合格だ！しかも一位！おめでとう！』
『筆記は首席だし！敵ポイントは彼女達の分も合わせて１９５点！そして・・君はもう一つの『ポイント』も分かっていたようだね！』
『救急ポイントは５５点！合計２５０点！もう一度、今度は君を預かる養父として言わせてもらおう！』
『おめでとう！息子よ！来いよ！雄英に！』

「・・首席ですって。ま、管理なら当然よ。」
「ふふん！さっすがちびの管理ね！」
「・・おめでとう。」
「うん、ありがとう皆。じゃあ明日から準備しなくちゃだね。」
「そうね、おやすみなさい管理！」
「・・おやすみ。」

「そういえば。」
「何？」
「管理、あんたどうしてあれが分かったの？」
「？ヒーローって仲間も助けるでしょ？」
「・・・ふふ。そうね。あんたはそう言う人だったわ。」

おやすみ、私達の主人。良い夢を。

個性把握テスト。

入学式当日。
３０分前行動を毎日毎日心掛けている彼はその言葉の通りに誰よりも早く教室に着いた。
しかし・・・・
（なんだろ・・あれ。）
彼の眼前にあるのは大きな寝袋。その中にで寝ているだろうおっさん。
この少ない情報の中で彼の頭脳は高速に回転。正解を導き出す。
（え・・もしかして、あれが僕達の担任？）
「ま、いいか。さてと本読も。」
倉持これをスルー。というか基本的に大人しくあまり他人と関わるのが得意では無い彼にとって寝ているだろう担任を起こす気には到底なれないのである。
そういう訳で彼はアンジェラに入学祝いに買ってもらった小説を読み始めたのであった。
（そういえば・・最近アンジェラ見ないなぁ・・なんだか忙しそうだし僕が何か手伝えればいいんだけど。）

◊♦？
数分後。
「おはよう!!」
「・・おはようございます。」
「む、声が小さいぞ。それでは元気が出るものも出ない。まぁ今日が初顔合わせだ。仕方ないかもしれない。む、自己紹介を忘れていた。僕は飯田天哉だ。これから1年間宜しく頼む！差し支えなければ君の名前を教えて貰っても？」
「・・倉持管理。」
「そうか、倉持か！改めて宜しく頼むぞ！」

「・・うん。宜しく。」
「うむ！」
それまた数分後。

「おい。」
「何？」
「テメェが首席か？」
「・・・そうだけど。」
「・・チッ。覚えておけ、１番はこのオレだ。」
「・・そう。」
「ふん・・・」

入学式開始５分前。
このぐらいの時間にもなると生徒の殆どがこのＡ組に集まってくる。
だが、倉持は個性まで使用して自分の存在感を限りなく薄くしていた！
・・嘘である。彼にはそんな個性は存在していない。
唯、入学試験で彼が見せたアレの影響で誰も声を掛けて来ないだけである。
その事を彼は容易く予想できたが・・
（それでね！ここのクレープが美味しそうなのよ！今度私と騎士ちゃんと王様と一緒に行ってみましょ！）
（うん！行こう！女王ちゃん！）
と、『憎しみの女王』と共にスイーツトーク（脳内）で盛り上がっていたので
そんな事は頭から吹き飛んでいった。

◇◆？
「はい、お前達が黙るまで８秒かかりました。合理性に欠くねお前ら。」

その一言に生徒は黙り込む。いや、どちらかというと
『いつの間に!?』『え、誰!?』
が原因だろうか。
「という訳で担任の相澤消太だ。よろしくね。」
(ん・・今、先生こっち向いた?)
「・取り敢えずお前達、今すぐに体操服に着替えてグラウンドに出ろ。以上。」
そう言って、先生はそれ以上何かを発する事無く、教室を出て行き扉を閉めた。
それと同時に生徒達もまた急いで着替えるべく更衣室に向かう。
だが・・
(体操服?・・あ、職員室行かないと。)

それすら持っていない人が1人ポツンと立っていたそうな。

◇◆?

「・・・21。揃ったな。これから個性把握テストを行う。」
「え!?入学式は!?ガイダンスは!?」
なんだかフワフワしていそうな少女がそこにいる人達(1名は除く)の気持ちを代弁した。しかし、相澤は視線を向けずそんな時間を消費する暇は無いと一蹴した。
「ソフトボール投げ、立ち幅跳び、50m走、持久走、握力、反復横跳び、上体起こし、長座体前屈。個性を抜きにした体力テスト・・中学にやった事あるだろ?」
(あ、またこっち向いた。)
「実に合理的だ。・・・爆豪お前、中学の時ソフトボール投げ何mだった?」
「67m。」
「んじゃ、個性ありで思いっきり投げてみろ。ほら。」
「んじゃあまぁ・・・。」

爆豪は肩のストレッチを行い『個性』をボールに乗せ。
「死ねぇ!!!」
その勢いのまま思いっきりぶん投げた。辺りに爆発音が響き、辺りは一瞬炎に包まれる。
少し間を開けて
「ん・・７０５ｍね。」
相澤が持っていた液晶に記録であろう数値が現れ同時に生徒の歓喜の声が上がる。
『すごい。』『面白い！』などが殆どで多くの感情が個性を使うという事に浮き出ているようだった。相澤はそんな少年少女を見てこう紡ぐ。
「・・面白そうね。よし決めた。このテストで最下位だったものはヒーローになる見込み無しとして除籍処分としよう。・・生徒をどうするかは教師次第・・ようこそ？これが雄英高校ヒーロー科だ。」
生徒にどよめきが走る。発言の取り消しを懇願するものもいたが知らぬ存ぜぬで一向に取り合おうとしない。
・・かくして、個性把握テストは緊迫した空気の中開幕した。

◊♦？
第１種目は５０ｍ走。
倉持の出席番号は９番、現在のトップは飯田の３．０４秒。
まだ前半の方ではあるが実の所彼にはこのテストにおいて一部制限がかけられていた。
『おい、倉持。お前アイツら召喚するの禁止な。』
『はぁ・・わかりました？』
『あくまでもこのテストはお前の実力を見る事が重要だ。』
『だから、精々俺に見込みがあるかどうか確かめさせてみろ。』
（うーん、まぁ正直なところ今彼らに力を借りても逆効果だしなぁ・・申し訳ないけどね。）
「じゃ、これで行きますか。」

彼が装備したのは黄金のガントレット。
『貪欲の王』から得られる『ＥＧＯ』
『黄金狂』である。
『ＥＧＯ』はその使用者が認めればその真の力を解放させるという性質を持っている。
では、『アブノーマリティ』にとことん愛されてる彼がそれを使えば？

「よーい。」

どん。

声が響き、その直後にゴールテープを彼が切った。
そう、このガントレット。『ワープ』が出来るのである。
「０．７８・・ね。」
結果０．７８秒

第２種目。
握力検査。

結果、測定器が『ＥＧＯ』により壊れた為測定不能。
葡萄頭の変態が本気でぶるっていた。

第３種目

立ち幅跳び。
別にここは通常通りにやろうと決心。
結果７ｍ５５ｃｍ。

第４種目

反復横跳び。
『赤い靴』に助力をお願いし、男性とは思えない程の軽快な動きで動いた。
結果１６８回。

第５種目
ソフトボール投げ
これもまだ『黄金狂』の力で月まで吹っ飛ばした。
結果∞ｍ。
因みにもう１人∞を出し驚かれた少女と個性の反動からか指がエゲツない骨折を起こしていた少年がいたそうだが、彼は次の種目の準備の為気付きもしなかった。

第６種目
長距離走５ｋｍ
これには自信があったので割と普通に走った。少なくともゲブラーの修行で走った距離はフルマラソン相当だったので全く疲れる事も無く上位に入れたのだが流石にエンジンやバイクには勝てなかった。
結果４位。

第７種目
長座体前屈
特に何もなし。ただ普通に行った。
結果５５ｃｍ

最終種目
上体起こし３０秒。
ジャージの中に『失楽園』を着てスピード勝負に出た。
結果６１回。

◇♦？

「はい、じゃあパパっと結果発表。トータルは単純に各種目の評点を合計した数だ。口頭で説明すんのは時間の無駄なので一括表示する。ちなみに除籍はウソな。君らの最大限を引き出す、合理的虚偽」

「「はぁーー!??」」

「あんなのウソに決まってるじゃない・・少し考えれば分かる事ですわ。」

「ま、そういうこった。んじゃ解散・・あ、倉持、お前は俺と一緒に来い。」

「？はい、わかりました。」

結果発表

1位：倉持管理。

2位：八百万百。

3位：轟焦凍、

◇♦？

「くぅ～すげえ倉持のやつ！あれが才能マンってやつなのかよ!?」

「グギギ・・イケメンしすべ・・っ!?」

「・・どうした峰田？そんなに震えて？」

「い、いや？な、何でもないよ？」

（命拾いしたわね・・その言葉を吐いてたら殺す所だったわ。）

（それにしても・・管理・・かっこいいわぁ・・）

この後全員で鑑賞会を開いた。

◇♦？

彼は相澤ともに再び職員室にいた。

「先生・・一つだけ質問をしても良いですか？」

「・・あぁ、構わない。」

「あの言葉、本気でしたよね？」
「そうだ。」
「・・やっぱりですか、ありがとうございます。」
「んじゃ、次はこっちの質問な。単刀直入に言うぞ『アレ』は一体なんだ？」
「武器です。」
「それは『赤ずきん』や『オオカミ』の他にもああいうのがいるってことか？」
「はい。」
「あれはどうやって作ってる？」
「あれは・・・」

◇◆？

「・・はぁ。倉持からは色んな事が聞けたな。だがこれで大体の事はわかった。後は校長に提出して・・!?」
「・・その情報を貴方が持つことは許可できません。規定により記憶処理を開始します。」
（なんだ・・何処から現れて・・っ！くそ、意識が・・・）
「ふぅ、監視カメラの掌握そして偽造って結構大変なの。出来れば２度とやりたくないわ。」
「さてと、これを当たり障りの無いものの文書に偽造してっと。」
「管理、貴方は安心して学校生活を送ればいいわ。貴方に迫る全ての脅威は私が責任を持って排除するからね。」

・・絶対に・・・ね？

雄英高校生活1日目終了。

雄英での授業。そして戦闘訓練。

さて、波乱の初日を超え2日目。
昨日のようないきなり落としにくる事も無く、唯の普通の授業が始まる。
といっても教師は全員プロヒーローで更にヒーロー科限定のヒーロー基礎学
一般から専門学科まで様々なカリキュラムが組まれているこの高校は流石倍率３００倍というべきだろう。
さて、現在はプレゼントマイクによる英語が行われているのだが・・
(んー。ここの部分マルクトお姉ちゃんとやったなぁ・・。)
元々試験勉強と言っておきながら、各々の過剰な溺愛による教育の末彼にとってこの高校の授業は難しい事でも何でも無い。唯、教えている人のテンションがかなり高いだけの単純なものとしか認識されていないのだ。
まぁ、マルクトを始めとするセフィラ頭脳派達のテンションも表面に出さないだけで内面はリオのカーニバル並に高いのだが。
(暇だなぁ・・)
彼の席は諸事情の結果窓際の1番後ろ。
更に言えば彼は2日目に入ってクラスメイトの2名としかいまだに会話していない。
つまり・・
今の彼は完全なボッチだった。

◊♦?

午前の授業が終わり、昼休みが始まる。
多くの人が学食に向かって歩いていくが彼の場合
オールマイトと自身の分のお弁当を自作している。しかも重箱で。
そんな訳で、彼は席から動く事も無くただ黙々と食べている。
但し・・・
「んー!やっぱ美味しいわね!」

「はい、主の作ってくれた手作り弁当・・大変美味です。」
「ふふ・・ええ、とても。」
如何にも魔法少女!と言わんばかりの姿の『憎しみの女王』
まるで深海の様なドレスに身を包んだ『絶望の騎士』
黄金のドレスを纏いそして琥珀に輝く水晶の中にいながら掃除機の様に彼の弁当を吸い込んでいる『強欲の王』
所謂、『魔法少女』達と共に食べている事を除けば。
因みに他2人は彼の弁当を食べているのに対し、『強欲の王』は1人で重箱を消し去っていく。
王様はいつだって空腹なのだ。
そんな光景に残っていた男子の中でも非モテに分類される者は彼の状況に妬みを込めて血涙を流し。
今が年頃の女子はそんな王様を見て
・・・どこにあんなのが入るんだろう。
と少し引いていた。

◊♦?
昼休みが終わり、ヒーロー科の最大の特徴であるヒーロー基礎学の時間。
その教師は・・・
「わーたーしーがー!普通に扉から来た!!」
1人だけ世界観違くない?といわんばかりアメリカンな雰囲気を持つNo.1ヒーロー。
倉持の養父でもあるオールマイトである。
「すげー!本当にオールマイトが先生やってる!」
という、1人の男子の声を皮切りに生徒のテンションも上がる。
オールマイトは教壇に立ち『BATTLE』と書かれてあるプレートを力強く置く。
「早速だが、今日はコレ!戦闘訓練!!そしてそれに伴って・・こちら!入学前に送ってもらった『個性届け』と要望に沿って作られた『戦闘服(コスチューム)』!!」

教室の壁がせり出し、ロッカーが現れる。そこには名札が貼られた箱がありそれぞれの戦闘服が支給される事がわかる。
生徒のテンションは最高潮。喜びのあまり飛び跳ねる人もいる。
「じゃあ、着替えたらグラウンドβに集まるんだ！」
「「はーい！」」
そう言い、生徒達が更衣室へと去っていく。
「ん？倉持少年は・・そうだったね。では私は先にグラウンドで待っているぞ！」
そう言い、オールマイトは一足先にグラウンドβへと向かっていった。
（戦闘か・・油断せずに『失楽園』着て行こ。）
油断も慢心もヒーローにとっては致命的だと理解している彼は早々に最強のカードの1枚をあっさりときり、誰よりも先にグラウンドβへ着いたのだった。

◊♦？
さて、オールマイトの戦闘訓練というのは『ヒーロー側』と『ヴィラン側』の2対2で『ヴィランが建物の中に核兵器を隠し持っている』というコレまたアメリカンな内容の下敷きの元で行われるものだった。
ヒーロー側の勝利条件はヴィランを捕まえるまたは核兵器を回収する事。
ヴィラン側はヒーローを捕まえる或いは制限時間まで核兵器を守り抜く事。
但し双方が捕まえる際には捕縛用のテープを巻き付けるのが条件であるそうだ。
チームはくじ引きによって決められ、倉持は『I』を引き葉隠透（はがくれとおる）という透明少女と一緒のチームとなった。
因みに21人という奇数のためあぶれた青山は誰かのチームに入りそこだけ特例の3人となっていた。

◊♦？
先ずは第1戦。
緑谷出久・麗日お茶子ｖｓ爆豪勝己・飯田天哉
思いっきりやっても良いというオールマイトの言葉が発火線となり本気で殺しにかかっているのではないかといわんばかりの怒涛の攻めを緑谷に行う爆豪。
対する緑谷は防戦一方になりつつも麗日との連携を組み、核兵器の回収に成功。建物の一部分を破壊、緑谷が複雑骨折するという惨状を生み出しつつも
ヒーロー側である緑谷・麗日ペアが辛くも勝利を収めた。
そして・・第2戦。
轟焦凍・障子目蔵ｖｓ倉持管理・葉隠透
・・勝負の幕が上がった。

◊♦？
「・・お前が首席の？」
「・・うん。」
「そうか・・今回は俺が勝たせてもらう。」
「・・負けるつもりは無いよ。」
「そうか。」
たったそれだけの言葉を交わし倉持は建物の中に入っていく。
すると、ペアの葉隠が話しかけてきた。
「えっと・・よろしくね？」
「うん、宜しく。じゃあ早速だけど作戦会議しようか。」
ヴィラン側の作戦時間は5分悠長に話をしている時間は無い。その時間の中でペアの人柄、個性を把握した上で作戦を練らなければならない。ここは5階建の建造物、既に1階と4階に『彼女ら』を配置したとはいえ仮に浮遊系の個性では無意味になる。
故に万全を期さなければならないのだ。
「うん！戦闘訓練頑張ろう！じゃあ先ずは自己紹介と個性の説明ね！

私は葉隠透！個性は見ての通り『透明化』だよ！」
「僕は倉持管理。個性は『Ｌｏｂｏｔｏｍｙ　Ｃｏｒｐｏｒａｔｉｏｎ』。」
「ろぼとみー？」
「簡単に言っちゃえば召喚系の個性って事だよ。」
「ああ！あのオオカミさん！」
「う、うん。そのオオカミさんも僕の個性の１人だね。」
「なるほどー！私は前衛系じゃなくてこう・・キュッと不意打ちするタイプだから相性は良いかもしれないね！」
「そうかも・・ちょっと待って？まさかとは思うけど・・服どうするの？」
「・・脱ぐよ？」
「・・どうして光学迷彩とかにしなかったの？」
「・・成る程ー！その手があったかー！うんうん、ありがとね！後で開発科に相談してみるよ！」
「・・じゃあ続けるよ。一先ず、葉隠さんは４階に降りて僕の仲間と合流して。彼女は前衛だし応用が効く人だ。一応君のお願いにも答えてくれるように頼んでおいたから・・」
「りょーかい！倉持くんは？」
「僕は核の部屋で防衛戦。体力テストとかで見たと思うけど一応戦えない事も無いからね。」
「おっけー！じゃあ次はヒーロー側の対策だね！」
「先ず、１人は確実に封殺できる。そういう人を置いたからね。」
「それってどっち？」
「轟・・だっけ？そっちの方。」
「ああ！エンデヴァーの！」
「え、エンデ？まぁそれは良いや。見たところ轟の個性は氷雪系。しかもパワーも高そうだ。多分あれぐらい強かったらこの建物ぐらい一瞬で凍りつくと思う。」
「え!?それってやばいじゃん!?どうするの!?」
「安心して、僕にとって彼は正直大した敵でもない。むしろ僕は彼の

天敵だ。」
「つまり、何か策があるって事だね？」
「うん、とびっきりのがね。じゃ次は障子？くんの方だけど・・」
「障子くんは腕をいっぱい増やす個性だね！握力検査でいっぱい増やして握ってたからね。」
「じゃあ・・こういうでどうだろう？」

◊♦？

「・・・時間だな、行こうぜ轟。・・轟？」
「・・いや必要ねぇ。」
彼は右手を建物に当たる。
瞬間、建物はみるみる内に氷結し、数秒後には完全に凍りついた。
「これで後は・・・」

障子が先に建物に入り次に轟が建物内に入った瞬間。

・・氷柱が落ちてきた。
「っ!?轟!!」
「なんだ・・!?」
氷柱は轟ともう1人が戦えるスペースのみを残して建物を完全に封鎖した。それはもう外には出られないという事。
狭まった視界の中の突然吹雪が吹く。そして、轟が再び目を開けると・・

『貴様が私の勇者が言っていたトドロキね。貴方に・・決闘を申し込むわ。』
透明な首に雪の様なドレスそしてその灰色の手に青い宝石の嵌まった灰色の柄とライトブルーの刀身の剣を逆さに掴んだ。
『雪の女王』がそこに立っていた。

◊♦？

「ひぃ・・冷たいよぉ～えっと・・４階のあ！あの人かな！」
部屋が凍結された際、倉持がおんぶしてくれたお陰で足が凍結するという事態を防いだ葉隠。
現在は４階階段付近に待っていると言われていた女性を探していた。
そして、彼女が見つけたのは1人の長身の女性とその側で羽ばたく一羽の美しい鳥だった。
「あ、あの、すみません！」
『・・・おや、貴女ですか？彼が言っていたペアは？』
「はい！葉隠透です！」
（ふわぁ～綺麗な人・・ってあれ？）
「もしかして、お昼ご飯の時に・・」
『はい、その認識で間違いないかと。』
「貴女も彼の個性の1人・・何ですか？」
『ええ。私は・・そうですね騎士、とでも。』
「で・・そちらの綺麗な鳥さんは・・？とってもあったかいのですけど・・。」
『貴女も御伽噺か何かで聞いた事があるでしょう。火の鳥と呼ばれているものです。』
「ふわぁ・・綺麗ですねぇ・・」
『む、どうやらもう1人が来た様です。葉隠さん、準備を。』
「は、はい！」

「・・俺1人にあれだけ注ぎ込むのか・・倉持の個性の正体は？・・・にしても綺麗な人と鳥だ。」

◇♦？
「ぐっ！」
『どうしました？その程度なのですか？それなら・・興醒めですが。』
「くそっ！」

始めのうちは互いに似た能力だけあってほぼ互角の闘いを見せていた轟と雪の女王だったが、そもそも体力や能力の相性から攻撃を加えればその分雪の女王は強くなり、轟はパワーダウンする一方。
故にもう勝負は見えていた。
彼女は彼の左手を指差し告げる。
『何故そちらの手を使わないのです？情けのつもりでも？』
「こっちの個性は・・死んでも使うつもりはねぇ。」
『・・そうですか。では貴方には少し眠って貰いましょう。』
その言葉に僅かな失望を覚えた雪の女王はその大きな剣を振りかぶり彼に振り下ろす。
咄嗟に氷の壁を貼るが容易く破られる。しかし避ける時間稼ぎにはなり横に前転し回避した。
しかし。
『甘いです。』
その隙を狙って回転途中の彼をヒールで蹴っ飛ばす。
「ごほっ！ごほっ！」
腹を蹴られた事で鋭い痛みが走り轟はその場に膝をつく。
その隙を彼女が見逃すはずがなく。
『ふぅーー。』
「がっ・・ぐっ・・。」
その吐息を持って彼を凍らせる。
『安心なさい。殺しはしないわ。ただ確保はさせてもらうけど。』
そういって彼女は彼の意識を刈り取った。
轟は薄れゆく意識の中
（ちくしょう・・・。）
と悔恨の念を最後まで手放す事は無かった。
勝者、雪の女王。

◇◆？

「・・・くっ!!!」
その頃障子は絶賛逃亡中だった。
『逃がしません!』
だが、すかさず絶望の騎士が逃走ルートの全てを剣の射出によって妨害する。
「・・・・な!?」
『今です!』
「はい、確保ー!」
彼が驚いた隙を突き、火の鳥の背中に乗った葉隠が上空から彼に向かって落下。即座に抑え込む。そして確保シールで両手を塞ぐ。
「いえーい!!」
「・・・くそっ!」
『しゅーりょー!!3人とも戻ってきたまえ!轟少年は私が運ぼう!』
オールマイトのそんな声が響き、彼らの戦闘訓練はここに幕を閉じた。

勝者ヴィランチーム。

「・・・ふう、どうやら作戦成功だね。」

◇◆?

「今戦のベストは当然倉持少年だ!作戦の立案や個性での振り分け。葉隠少女のサポート!終始圧倒したその姿は圧巻の一言だ!」
「ありがとうございます。」
「葉隠少女はもう少し自分の意見も伝えてみるといい。その個性の使い道は他ならぬ君が持つ光で自分しか解らない事もある!それを伝えればもっと良い結果が生まれるだろう!!」
「はい!了解です!」
「あ、葉隠さん。これ服ね。」

「・・・ありがと。」
「障子少年や今眠っている轟少年はもう少し確認作業を行うことだ！倉持少年の様な多数の者を呼び出せる人は稀だが・・それでも伏兵の可能性を考慮するとしないとでは救出の任務では大きな差となる！今日をしっかりと糧にするように！」
「はい！」
「じゃあ次にいってみよう!!」

その後、第3、4、5試合は全てヒーロー側が勝利。個性だけではなく戦略性やチームワークの重要性が垣間見える結果となった。
「お疲れ様だ諸君！緑谷少年以外は大きな怪我も無し！しかし真摯に取り組んだ！初めての訓練にしちゃ皆上出来だったぜ！それじゃあ私は緑谷少年に講評を聞かせねば。皆は着替えて教室へゴーだ！」
と一瞬爆豪の方を向き急いで戻るオールマイト。
そんなこんなでヒーロー科初めてのヒーロー基礎学は終了したのだった。

◇◆？
そして下校時間。
「なあ！放課後は皆で反省会しねえか？」
「あ、いいねぇやろう！」
「俺も参加しよう。」
切島が反省会の開催を企画すると芦戸がそれにのっかり、それに乗じる形で他の生徒達も参加した。
「皆参加か～？爆豪は・・って居ねえし。轟はどうする？」
「すまない、俺も用事があるんだ。帰らせてくれ。」
「おー、わかった！じゃまた明日な！」

そんな中こっそり帰ろうとする人間が1人。
だが。
「ちょっとー！なんで帰ろうとするのー！」

「・・あ。」
そう、倉持である。他人との付き合いは苦手な彼。作戦をあんなにもハキハキ伝えられたのは、その前に驚きがあったため。普段はこんなもんである。
「待てぇ、お前だけは逃さん・・なんだあの美人さんは!!後お前!・あ、あんなうらやま・・んん!けしからん事してオイラから逃げられると思うなよ!」
倉持は唯一の知り合いともいえる葉隠に助けを求めた。
「・・駄目?」
「駄目!」
「・・はい。」

そんなこんなで彼はなし崩しに巻き込まれて結果的に『絶望の騎士』を紹介する事で一先ず危機を脱したのであった。

◇◆?
「クソォ!!」
その頃爆豪はどうしようもなくイライラしていた。
デクに負けた事は勿論。
気付いてしまったあの首席との差である。
爆豪は決して頭は悪くなく直感も優れている。
それ故に気づく力の差、先程デクに言われた言葉も相まって彼の苛立ちは最高潮に達していた。
「ふざけやがって・・Ｎｏ．１ヒーローはデクでもなけりゃあのモヤシ野郎でもねぇ・・この俺だ!」
一匹狼は吠える。力を蓄え、あいつらの喉元を掻っ切る為に。

(負けた・・俺はあの女王に。)
轟は少なからずショックを受けていた。それもそのはず似たような個性に一方的にやられる結果になったのだ。自信が崩れるのも仕方がないことだ。

だが、その程度で折れるほど父への憎悪は小さくはない。
今は負けた。だが次がある。対策を練り、更なる修練を重ねて再び
あの女王の元に立とう。
（俺は・・右腕（母さん）の個性だけで必ずあいつに勝つ・・！）
英雄の子は燃やす。その左手にも劣らないその闘志を。

そして、その中心にいる彼は・・
（つ、疲れた・・・。）
クラスメイトからの質問責めと女王と騎士、そして火の鳥にお礼を
した弊害で
フラフラしながらも愛する我が家に帰るのだった。

嵐の前の日常。

翌日。
オールマイトが雄英高校の教師になった事が新聞社を始めとする報道陣の手に渡った事で校門前にはまるで蟻の巣に集まる蟻のように群がっていた。
中には生徒に強制インタビューをしている者もいてそういった人達が大分疲弊している様子を・・
(大変だなぁ)
と持ち前の影の薄さを生かし誰1人として会話しない男が1人窓際で悠然と眺めていた。
そう、倉持である。
この男、危機察知能力はゲブラー、ビナーのスパルタ特訓の末にその道のプロ並みには成長させられている。
そのおかげで今日の朝から彼はやな予感を直感する事ができ今に至る。
そんな様子を眺めている内に先生達の手によって報道陣は撤退していき
クラスメイト達も着々とクラスに入室してくるのだった。

◊♦?
さて、時間は進みＨＲ(ホームルーム)
入室してきた担任の相澤が初日に放っていた雰囲気と同じものであると瞬時に総員が感じ、周りはまた何かあるのかと緊張が走る。
「さて、次が本題なんだが・・・」
相澤の威圧感が別のものに変わり、皆は身構える。
「学級委員長を決めて貰う。」
「「「学校っぽい事きたぁーーー!!!」」」
テンションが上がるＡ組の一同。普通の高校ならこういった職務は面倒くさいなど理由で避けられるものではあるものだが、こと雄英というヒーローに特化した高校かつその最先端であるヒーロー科で

は集団を導くというトップヒーローの素地を鍛えられる絶好の機会と捉えるらしい。
「委員長！俺やりたいです！それ！」
「私もー！」
「僕の為にあるヤツ☆」
我先と志願する生徒一同。
そんな中倉持は特に反応する事も無く、また興味も微塵にも無かった為
大人しく空気に徹していた。
「静粛にしたまえ!!これはやりたい者がやれるモノではないだろう!!
他者を導く責任重大よ仕事！そして周囲からの信頼あって成立するもの!!民主主義に則り、真のリーダーを皆で決めるというのならこれは投票で決めるべき議案!!!」
「そびえ立ってるじゃねーか!!なんで提案したんだよ!!?」
真面目な飯田が提案しているがそもそも入学3日目にして信頼も何もあったものでは無い、故に自分が自分がとなるは当たり前の事だしだったら自分に投票するしか選択肢は無い。
だからこそ複数票を手に入れたものが自動的に委員長となる。
「どうでしょうか!?」
別に時間内に決めれば何でもいいよという相澤の言葉により急遽選挙が開幕した。
というわけで
「・・はい。紙と箱です。」
投票用紙と投票箱を即興で作り相澤に渡す倉持。
「んぉ・・準備が良いな。んじゃこれに入れてってくれ。」

そんな訳で投票が終了し、開票に移る。
結果は意外なものとなった。
投票が最も多かったのは緑谷の3票。
次いで八百万の2票だった。

「僕３票ーー!??」
「まぁ・・私が２票ですか。」

緑谷が焦って詳細を聞けば麗日、障子、飯田が入れたと分かった。
因みに倉持は八百万に入れた。理由はなんか真面目そうだから。
「お前自分に入れなかったのかよ・・え?何がしたかったんだよ。」
そんな訳で委員長は緑谷、副委員長は八百万となったのだった。
・・・のだが、昼休みが終わると委員長は飯田になっていた。
「・・・なんで?」

◊♦?
唯一接点がある葉隠に事情を聞いた所、食堂に玄関を突破して報道陣が突入してきたらしい。
その際、飯田が適切な指示で生徒を誘導。
その功績から話し合いにより飯田が委員長になる事が決まっていたそうだ。
・・まぁ、本人達が納得しているのなら別に何を言うわけでも無し、大した接点もない自分には関係の無い話であった。
「あーあ!私倉持くんに入れたのになー!」
「・・え?なんで?」
「んー?戦闘訓練の時すっごく頼りになったからね!」
「・・そっか、ありがとう。」
「ん!」

◊♦?
さて、昼休みが開けて午後。
現在はとある施設に向かってバスを走らせている。
今回のヒーロー基礎学は相澤先生とオールマイトともう一人の３人体制で見る水害災害なんでもござれの『ＲＥＳＣＵＥ』訓練。
昨日の先生の数と違うのはきっと昼休みのあの件で何かがあったのだろう。

きっと気にしなくても良い事だろうと倉持はぼんやりと窓から流れる景色を眺めながら
・・未だに警報を鳴らしている、自分の直感から目を背ける為に静かに意識を沈めていった。

♦？◇
・・都市部にある廃れた酒場。其処には今正にヒーローに敵対するヴィランのチームがある計画の最終調整に入っていた。
「・・・さて、準備はこんなもので良いでしょう。」
「あぁ・・『脳無』は念には念を入れて３体導入・・１体でも十分にオールマイトはぶっ殺せるんだろ・・？」
「ええ・・私もそう思いますがしかしこれは他ならぬ『先生』の指示なのです。」
「『先生』が？」

そうだとも。
「・・『先生』。聴いてたって訳か。」
『いや何、優秀な君の事だ。きっと僕の判断に疑問を覚える頃だと思ったからね。』
「・・っ!?あぁ、そうですか。答え合わせの時間って訳か？」
『ふふ、そう身構えなくて良いさ死柄木くん。何先ずはこの映像を見てもらいたい。』
そう言って彼が見せたのはとある研究施設の映像。
そう、倉持がかつて囚われていたあの施設。その崩壊の全容である。
其処には水色の髪の女性、赤い装甲の女性、全てが黒の女性がある少年を救出している場面、と言えば聞こえはいいが臓物が飛び散り、肉は彼方此方に飛んでいき、映像の最後には壁の全てが血の赤で染まっていた。
「これは・・」
『そう、昔僕がオールマイトに嫌がらせする為に作ったダミーの研究

所だ。それが随分と最近破壊されたと聞いたからなんとなしに監視カメラの記録を奪ってみたんだ。』
『この少年の名前は倉持管理。あそこでやっていた実験の唯一にして最高の生存者だ。』
「あの実験のっ・・・あり得ません!!アレの成功率は1%以下の筈!」
『そうだ。あの実験・・人間の手で個性を作る実験の為に生み出した通称『パンドラ』。僕も成功なんてする訳無いと思っていたけど・・どうやらあの少年は奇跡を産んだようだ。』
「そして・・あの水色の女は。」
『そう、今経済界で頭角を表している・・アンジェラだ。』
「・・・つまり、そのクラモチって奴を餌にしてアンジェラとやらを捕らえるって訳ですか?」
『おしいね。確かにそれも目標だが1番の目標は彼女と彼の・・』
ヴィラン(こちら)への勧誘だよ。

悪の手は密かにしかし確実に再びの少年の元へと伸びようとしていた。
・・・物語の歯車は僅かにしかし確実に狂い始めている事はまだ誰も知らない。

Ｒａｂｂｉｔ　Ｐｒｏｔｏｃｏｌ（ウサギチーム）

バス移動が終了したどり着いたのは様々な災害を再現したアトラクション施設
を模した訓練所。
「すっげー！ＵＳＪかよ!?」
「・・・ん?俺たち救助訓練しに来たんじゃ・・?」
テンションが上がり喜ぶ者。訓練所の全容に驚き困惑する者。
主に困惑するものが殆どだったがそれも仕方ないだろう。
訓練所にしてはあり得ない多種多様なアトラクションの数々。その他多数の施設など、全て見て回るだけでも1日は軽く使ってしまう程の広大さだ。
ある意味その反応は当然なのだろう。
さて、件の彼はというと・・・
(なんで?・・・・なんでさっきよりもやな予感がするんだろう?)
彼持ち前の直感が朝方の時より更に過剰になっている事に混乱していた。
何故だ?やな予感とはあのインタビュー地獄では無かったのか?まさかここで更に悪い事態が発生するというのか?仮にも雄英という超一流のヒーローの教師の目の前で?
そんな考えが巡る。
そして、最終的に彼は自分の直感を信じる事にした。
ならば何処から?どういう形の事態なのか?範囲は?
・・・待てよ。範囲?
その考えに到達した瞬間、彼は秘密裏にあるものを取り出していた。
「此処は水難事故、土砂災害、火事ｅｔｃ（エトセトラ）・・・。あらゆる状況、災害に対応した施設・・。」
『ウソ（Ｕ）の災害や事故（Ｓ）ルーム（Ｊ）!!』
ドヤ顔してるのに顔が見えないヒーロー。

確か名前は・・・13号。そんな名前だったはず。
災害に対するエキスパートであり紳士的なヒーローで有名だ・・多分。
「おい、オールマイトはどうした。」
「先輩は通勤時に制限ギリギリまで活動してたみたいで・・今仮眠室で休んでると思います。」
「不合理の極みだなおい。」
・・何をやっているんだ。あの父は。あのムキムキの姿に制限時間があるのは知っていたが（重箱なのはそれに気付いていないと思わせる為）それにしたって
こんな時にやらかしてしまうなんて・・
「えー、始まる前にお小言を2、3・・・いや4つ。」
多い・・。
初対面の人によくもまあそんなに小言があるものだ。
だが、救助という活動において指導は多くて損は無い。
・・ああすれば良かった、こうやっておけば良かった。
そんな後悔を、間に合うはずの人命を救えないという絶望を生徒に体験させない為なのだろう。
ならばこれでも先生にとっては少ない部類に入る筈だ。
超人社会は『個性』の使用を資格制にし、厳しく規制することで一見成り立っているように見える。だが現状はそれを無視する『悪』や彼の個性のような世界を崩壊しかねない『個性』が存在している。
故にオールマイトの対人戦闘訓練で人に向ける危うさを体験し、この時間は人命の為に『個性』をどう活用するのかを学んでいく授業。
この力は人を傷つける為ではなく、救ける為にある。
13号先生の口からはそんな事が語られた。
「心得て帰ってくださいな。以上ご静聴ありがとうございました」
話が終わると同時に拍手と喝采が起こる。
個性の使い方・・・か。

なんだか考えさせられるお話だった。
僕は彼らと上手くやっていけてるのだろうか？なにか不便を感じさせてはいないだろうか？
彼女達は決して道具ではない。大切な家族だ。それを絶対に忘れないようにしたい。
（そう考えてくれるだけでアタシ達は十分に満たされてるわ管理。）
そんな風に『憎しみの女王』は彼を励ます。彼女が言ってくれるなら安心が持てる。
彼女は愛と正義の元に悪と戦う魔法少女（ヒーローロー）なのだから。
◇♦？

「そんじゃあ、まずは・・。」
相澤先生が何かに気づいたようにＵＳＪの中央広場にある噴水付近に目を向けているのが見えた。
釣られて見ると黒い霧状のモヤ突然出現し、少しづつ大きくなり広がっているのが確認できた。
彼は『ソレ』こそがやな予感だと即座に判断。迎撃の準備と共に先程取り出したあるもの・・トランシーバーを準備する。
・・・そのモヤからは先ず掌で顔を覆っている人間が出てきた。
それに続き、脳が？き出しの大男、異形型の個性のような大勢の人間が出てくる。
「一塊になって動くな！１３号！生徒を守れ！」
ーー皮肉にも救助という時間に現れた彼ら。
生徒達にも相澤先生の焦り様が伝わり緊張が走る。
「全員気を緩めるなよ!!あれは・・」
悪（ヴィラン）だ!!

黒い霧状のモヤと人の手で顔が隠れている敵が残念そうにしかし確信を持って話している。
「おや、おかしいですねぇ・・先日頂戴した教師側のカリキュラムにはオールマイトがいるとの事でしたが・・・。」

「マジかよ・・折角こんなに引き連れて来たってのに・・でもいたな？」
「ええ、いました。」
ーー息子の方は。
「っ!?おい・・倉持。どうやら狙いはお前らしいな。」
相澤先生がこちらに近づき耳元で話しかけてくる。
「・・そうみたいですね相澤先生。」
「どうすんだ。」
「こうします。」
「・・おい、そのトランシーバーどこから・・まさか。」
ーーマオさん。お願いします。

はいはーーい!!マオさん達の出番だね！

使われてない放送機器から彼以外には見知らぬ女性の声が聞こえた。
「・・あ？」
「おや？他に先生がいるとは聞いてないのですが・・」

「お、おい誰だよ。この声？」
「さ、さぁ？」
両側に困惑がはしる。
「じゃあさっきの手筈の通りお願いします。」
そんな中彼はなんの疑惑を持たずに彼女に指示を出していく。
おっけー！管理のお願いならお姉さんなんでも聞いちゃう！
その言葉に反応する両側。
「え？これ倉持くんの個性？」
「おや、あれは件の彼の個性らしいですよ？」
「あん？そりゃあの女共じゃねえのか？」

のんのん!!私も彼の仲間なのさ！・・っとふざけるのも大概にしよう。

ねえそこの変人。そうそう、そこの顔に手首なんて付けてる君だよ。
「・・・あ?」
君さぁ・・・
誰に手、出すってイッタ??

彼女の言葉が一変して重圧を帯びる。先程のおちゃらけた様子からまるで憎き仇敵を眼前にしているような様子。
どうみたところで彼女は完全にキレていた。
「・・・は?」
「これは・・少し驚きました。」
その彼女の殺意に当てられるようにして現れたのは総数にして約５０のウサギの兵隊。
その誰もが今まで見た事も無い銃を携えていた。
更に、その軍隊はヴィランを囲むように編成。
一歩でも動けば即射殺されるだろう。
ーーさて、今大人しくこうべを垂れて許しを乞えば半殺しで許してあげるけど。どう?
ヴィランはそれに恐れおののく。中にはパニックになる人もいた。
但し、この２人と三体の人外を除けばだが。

「はっ・・上等。」
「少々予定外ですが、これもまた必要経費でしょう。」

あっそ、じゃ死ね。
「お前がな。やれ。脳無。」
ここにヒーロー陣営を置き去りにした人外を屠る軍隊と人工兵器の未曾有の戦いが開幕した。

乱戦。そして弱点。

５０の兵士に囲まれたヴィラン達、しかしその余裕の笑みを崩す事は無い。

何故か？

答えは単純対策があるからだ。

既に脳無の一体は奴らに向かわせた。じゃあ卵共やプロヒーローは？

更に最優先事項のオールマイト親子の対策は？

だからこそのヴィラン黒霧。だからこその３体の脳無なのだ。

「さて・・私は私の仕事をしますかねえ？」

そう言うと、倉持と相澤先生、そして残っている脳無二体以外の足元を大きなワープゲートで囲む。

「うわぁ！何だぁ!?」

恐怖と困惑が混合しパニック状態になってるヒーローの卵達にこの攻撃を防ぐ手段は無く、また

「ぐっ・・・我らも飲み込まれる!?・・坊ちゃんご無事でっ・・・!!」

５０の軍隊も脳無相手には気を取られるのかそのままワープゲートに飲み込まれていった。

◊♦？

「さてと、邪魔な奴らも居なくなってスッキリしたなぁ。」

そう告げる、ヴィランのトップだと思われる人物。

「さて、イレイザーヘッドには脳無一体を放り込むとして・・足りねぇな。」

そう感じた彼はとある命令を下す。

「脳無、隣のをやれ。」

その瞬間、脳無と呼ばれた生命体は・・・

別の脳無を真っ二つに切断した。

と同時にその切断面から分けられるようにして脳無が２体に増えた。
「なっ・・!?分裂の『個性』!?」
「これはあいつ用にわざわざ作った特注品の脳無だ。って訳でこれで対等だなぁ・・じゃあお前らはあっちのガキな。」
２体の脳無はその指示を聞くとゆっくりと倉持の元へと歩き出す。
もう１体は相澤先生へ、そして黒霧は１３号の元へとワープ。それぞれ行動を開始する。

「・・すまないが、俺は手助けできそうに無い。」
「・・僕もですね。」
「生き延びろよ。」
「了解です・・っ!!」

ここに各々の戦いが幕を開けた。

◊♦？

迫り来る２体の脳無。
それに対策を練ろうとする倉持。
分裂ができる以上、手段は限られる。
一瞬で粉々にするか、何処か全く違う場所に放り込むかだ。
ならば『強欲の王』か？嫌、彼女の食事は確かに即死級だがあの化け物が肉片からまた新たな化け物を生み出されたら追いつかなくなる可能性がある。
ならば。
「来て！『憎しみの女王』!!」
最大火力で塵に還せる彼女がこの場で最も最適だ。
「おっけー！あっちの１体は私に任せて！もう１体は頼むわよ!!」
「うん！」

自身は『白夜』の装備『失楽園』に武器は体力回復が出来る『何もない』の『ミミック』を以てあの化け物と対峙する。
片や彼女はいつも持っているステッキ1本。彼女にとってはそれだけで充分なのだ。

先ず最初に仕掛けたのは脳無。
大振りながらも一撃でも当たればこの装備であっても気絶は免れなさそうな程の衝撃を最小限に下へしゃがむ事で躱し『ミミック』で縦一線に斬りつける。
それと同時に彼女を抜かして別の脳無が彼に向かって殴りかかるが。
「手ぇ出させる訳・・ないじゃない!!」
女王の魔力弾が顔面にヒット。脳無の顔面を抉り仰け反らせる。
しかし。
「・・うっそ。再生してるわよアレ。」
そう、脳無の顔面の傷は痛ましい音と共に再生していく。
そして斬りつけられた脳無もまた再生が完了する。
まるで最初からそんな攻撃は無かったかの様に。
再生している間をついて再び集まる2人。

「本当だ・・女王ちゃん・・撃てる?」
「いけるけど・・アレ時間かかるわよ?管理、同時に相手できるの?」
「大丈夫。スピードもパワーもあるけど師匠の方が上だよ。時間稼ぎは任せて。」
「アイツと比べるのはちょっと違うと思うけど・・エネルギーは?」
「大丈夫。まだ余裕はあるよ。」
「おっけー!じゃあ詠唱に入るわ!任せたわよ管理!」
「了解!!」

そう言い彼は2体の脳無に突貫する。

”正義よりも碧き者よ、愛よりも紅き者よ”
”運命の飲み込まれし　その名の下に”
彼女の杖に強大な魔力が集まり始める。
脳無の拳を『ミミック』で受け流し、別の脳無にぶつける。
が、その攻撃でひるむ事は無い。その体制のまま蹴りを繰り出してくる。
「ちっ！仕方ないか!!」
その足を回避した後にその足を切断。これにより『ミミック』の効果で失った体力が回復する。
だが。
「まぁ・・増えるよね。」
その足から更なる脳無が出現。これで現状は3体1。圧倒的にこちらが不利となる。

”我、ここで光に誓う！”
”我が眼前に立ちはだかる　憎悪すべき存在達に”
魔力はハートの形へと変わり更に巨大になっていく。
3体に増えた脳無はすかさず攻撃を開始。
どうやら、先程の行動から戦法を変えてきたらしい。
先ずは右ストレート、これは拳から腕にかけて刃を通す事で避けていく。
次に別の脳無の腕払い。これは『ミミック』を盾にして衝撃に合わせて跳躍、
攻撃を無効化する。
だが、そこには隙が生じる。
その隙を見逃さず、更なる脳無が突進。倉持を吹き飛ばす。
「こんのっ!!」
しかしそこでやられる彼では無い。
吹き飛ばされる瞬間に『ミミック』から『星の音』に即座に変換、射出。
全ての脳無の頭部を吹き飛ばした。

駄目押しにもう一度突撃、今度は『笑顔』で3体纏めて吹っ飛ばし1纏めにする。
「今だよっ!!」
”我とそなたの力をもって、偉大な愛の力をみせしめん事を!”
「待たせたわね!管理!避けなさいよ!?」
”アルカナスレイブ!!”
ハートの形をした巨大な閃光が彼女の杖から発射され、倉持諸共その閃光は
その巨大なる魔力を以て飲み込まんとする。
『3月27日のシェルター』!!」
彼がそう叫んだ瞬間、彼の周りを部屋が囲む。
同時にアルカナスレイブがその部屋と脳無達を飲み込んでいく。
そして、閃光が晴れた先には彼を護る『シェルター』しか残っていなかった。

◇◆?
「ぐはっ・・」
一方その頃、また別の脳無と戦っていた相澤先生は満身創痍になっていた。
「おいおいおい!!あの脳無どもを消し飛ばすとかどんな化け物だよ!!?」
「はっ・・どうやら目論見が外れたようだな。ほら・・見てみろ。」
「あぁ・・・?」
「先生!!」

そこに居たのは、ウサギチームによって保護されていき、再びここに戻ってきた1—Aの生徒達。
どうやらもう1体の脳無はあのウサギ共によって殺されたらしい。
「死柄木（しがらき）　弔（とむら）。」
ここでは13号を相手していた黒霧が戻ってくる。
「あぁ、黒霧か・・13号はやったんだろうな？」
「はい、確かに13号は再起不能しましたが・・生徒1人に逃げられました。」
「・・は？・・はーーはぁ。」
「黒霧、お前、お前がワープゲートじゃ無かったら今ここで粉々にしたよ・・。」
首元を掻き毟り、どんどん怒りが込み上げている様子を見せる死柄木。
逃げた生徒はそのまま他のプロヒーローに救援を要請し、間も無く駆けつけてくるだろう。
脳無も既に1体だけ、現状こちらに交戦手段は存在しない。
故に、ゲームオーバーだと彼はそう言う。
「帰ろっか。」
ーーーいいや、未だ早いよ。死柄木君。
「え・・・？」
◇◆？
「後ろよっ!!管理っ!!」
・・・シェルターを解除した矢先、声が後ろから聞こえる。
その声に振り向けば。
『やぁ、初めまして。君が倉持管理くん・・で良いのかな？』

・・巨悪が降臨した。
そこに立っていたのは1人の男。
顔は髑髏のよう機械で覆われており、その姿からは異常な程の強烈なプレッシャーを放っている。
他の全てがその威圧感により動きを停止し、恐怖する。
そんな中彼は直感する。
コイツには勝てない。・・・と。
それでも彼は精一杯の虚勢を以てこう尋ねる。
「・・貴方は誰ですか？」
『あぁ、自己紹介が遅れたね。・・僕はオール・フォー・ワン。君が居た研究所の・・・』
やめて、それ以上言うのは。やめて、やめろ。やめろ!!
『建設者だ。』

◇◆？

「あ、あぁあ？」

『ふむ、やはり未だ青いねぇ。今日は君の力を見ておこうと思って来てみたんたんだが・・しょうがない。古今から壊れているモノを治すのはいつだって物理だ。僕もその例に倣うとしよう。』

彼の右腕が変形する。
右腕は本人の半身を超えるほどに肥大化し、何本もの腕であろう筋肉が見て取れる。発条化と槍骨によって、螺旋を描いた槍の様な骨がいくつも露わになっており、対象に当たるであろう拳表面部分には、重点的に金属の鋲が生成されていく。
『『筋骨発条化』＋『瞬発力×４』＋『膂力増強×３』＋『増殖』＋『肥大化』＋『鋲』＋『エアウォーク』＋『槍骨』・オールマイト用にとっておいたコレだが何、脳無の全力の攻撃を軽く防ぎきれる君なら耐え

られるだろう？　』
「っ!?”アルカナビート!!”
!!」
「っ!?撃てぇ!!」
　咄嗟に女王が放ったそれもウサギチームの銃弾ですら、その右腕によって防がれてしまう。
『正直、君達のその力も気になるところだが・・今はこちらだ。』
「やめなさい・・・やめてぇ!!」
『さて、目が醒める時間だよ!!』
　右腕が彼に向かっていき・・・
　即座に表れた巨大な剣と柱によって止められた。
「・・・おい。うちの愛弟子に何してやがる。ええ??」
「・・私の前でやるとは良い度胸だな。当然死ぬ覚悟はあるんだろうな？」
　そこに居たのは、『赤』と『黒』。
　倉持にとっては師匠である大きな存在。
『赤い霧』と『調律者』がそこに立っていた。
『・・・へえ？・・・そうか。君達か。』
「・・一応聞いておいてやる。貴様、何をしようとしていた？」
『見て分からないかい？勿論殴ろうとしたに決まっているだろう。』
「そうか・・」
「では、私からも。彼を苦しめていた研究所を作ったのは君か？」
『そうだが？』
「ふむ・・成る程。」

「殺す、殺してやる。貴様だけは生かして返さん。骨を砕き、肉を裂き二度とこの世に居られないまでに粉々にしてやる。」
「ならば、君には地獄の番人がやってくるだろうさ。誰かって？・・私達に決まっているだろう？」

余りにも重い紅の憎悪と何処までも深い黒の殺意がこの場に広がる。
それに生徒達は耐えきれず、嘔吐する者もいた。
ヴィラン側も気絶し失禁する者、呼吸さえ困難になる者。
そして・・
「・・嘘だろ？・・・先生が・・本気だ。」
それに相対するオール・フォー・ワンが更なる威圧感を放っている事に気付く者。

『・・ククッ。素晴らしいな。気が変わったよ。彼の前に君達の力を確かめるとしよう！』

「「死ね。」」

・・・『最強』と『最悪』が激突した。

『最強』対『最悪』

憎悪と殺意と純粋な『悪』が混ざり合う。
それらは互いに共鳴し合いついには天候までにも影響を及ぼす。
「さて・・先ずは私から行くが構わんな？」
「・・仕方ない。私は管理と・後はその他を処理してからにしよう。・・
まさかこの程度の相手に死ぬ事は無いだろう？」
「当然だ。」
「じゃあ、精々無様に舞わない事を願っているよ。」
そういうと『調律者』は瞬きもせずに管理ごと姿を消した。
同時に。
「邪魔だ。」
相澤先生を抑えていた脳無の近くに現れ唯の斬撃により片手間に消し飛ばす。

「・・・は？」
「おや、聞こえなかったかい？・・・君もだ。」
「っ・・。黒霧。この化け物を飲み込め。」
即座にワープゲートが開かれ調律者を飲み込まんとするが。
「・・ふむ、こんなものか。では、君にも退場願おうか。」
瞬時に破壊。
逆に黒霧の足元に黒い雲が漂い、程なくして黒き棘が黒霧の体を串刺す。
「ごふっ・・！」
「そら、次の手段は？無いならさっさとお家に帰ったらどうだ？」
「・・調子のんじゃねぇぞ。」
「乗る気は無いさ。ではさようなら。」
赤の石柱が死柄木の腹部に直撃、死柄木は声すら出せずＵＳＪ外まで吹っ飛んでいく。
それを確認した後、調律者は何も無いところに語り掛ける。
「マオ。いるんだろう？」

「あー。バレてたか。やっぱ規格外だわあんた。」
「管理の事は君に任せよう。」
「りょーかい。で、あちらのクラスメイトさんは？」
「君のチームにでも任せておけばいいだろう。私には一切関係が無い。」
「・・はいはい。」
「君もだ女王。」
「・・わかったわよ。」

そして、ここでの用事は全て終了したと判断した調律者は直ぐに戻ろうとするが。
「・・お前は？」
満身創痍の相澤先生が調律者に問いかける。お前は何者なのかと。こいつもまた倉持の個性の１人なのかと。
調律者はそれに応える事は無く・・・
緑の拳銃を彼に向かって発砲した。

◇◆？

『さて、話は終わったかい？』
「ふん、一応言っておこうか。私は容赦する気は無い。どれだけ切り、どれだけ壊しても肉片１つすら残さず消滅させる。」
『それはそれは・・楽しみだよ。』

「ところで・・そんな所にいていいのか？」
『何？』
その瞬間、赤い霧が黄金のポータルに消える。
そして、オール・フォー・ワンの真横から全力の一撃を叩き込む。
『ぐがっ・・・!?』
そこから武器を『黄昏』に変換。吹っ飛んでいった彼を『黄金狂』を

ぶん投げ常人では出せない速度で追跡する。
『今のは・・転移系の個性か？』
「考えている暇があるのか！随分と余裕だなぁ!!?」
　吹っ飛んでいく彼よりも先に落下地点に辿り着き黄昏を叩きつけんとする。
『っ！もう追い付いたのか。だがそれは悪手だよ！衝撃反転!!』
　だが、彼の数多にある個性の１つ。『衝撃反転』でダメージを反射する。
「・・・それで？」
　・・しかし、そんな事で彼女の憎悪が消える事は無い。常人なら耐えきれない腕がひしゃげ、肉を割いて折れた骨が突き出るというダメージ。
カーリーの時のトラウマが蘇ろうと今の彼女を止める手段は存在しない。
「・・・殺す。」
　自分に緑の拳銃を打ち込む。腕を即座に回復。一時的に後退する。
『おいおい、君だけ回復手段を持っているなんて・・狡いじゃないか。』
「言ってろ。・・地中の天国。」
『黄昏』から赤い槍である『天国』に変換。
「・・ふっ！」
　・・ありったけの憎悪をもって全力で投擲する。
『喰らえば・・ただではすまないな。ならば・・『空気を押し出す』＋『筋骨発条化』＋『瞬発力×４』＋『膂力増強×３』!!』
　それに対し、個性の複合によって作られる人間空気砲を使用し槍を逸らす。
　だが。
「何処を見ている？」
『何っ？』
　その隙をついて、既に『黄金狂』によって背後に飛んでいていた赤い霧の『黄昏』の横薙ぎが彼に直撃する。
『ぐぁっ・・!!衝撃緩和!!』

その即死級の攻撃を『衝撃緩和』によって約半分程のダメージに軽減する。
しかし、内部のダメージは半減出来ても精神に関するダメージは予想できるはずもない。
彼の脳裏にかつてオールマイトによって与えられた始めての『恐怖』が思い起こされる。
『・・・っ?!!こ・・れはっ！』
「ふん、随分と大口を叩いといてこの程度か？」
『・・ふふふ、はははは!!!素晴らしい!!予想外だよ！・そうだ！・君・・いや、倉持管理が有しているこの力があれば僕の望みもようやく叶う!!』
「・・・あの程度でイカれたか？」
『くくっ!!いや失礼。君の力が想定外でね。まさかオールマイト以上に僕を恐怖させる人が居るとは思わなかった。』
「そうか。で、どうする？・大人しく殺されるか？」
『いいや？・まだまだ死ぬ気は無いさ。だがこのままでは分が悪い。君に加えて彼女まで加えられたら僕に勝ちの目は無さそうだ。』

「・・それで？」
『・・君の教え子の中には面白い子がいるのがわかったんでね。』
「貴様・・まさか。」
『・・そのまさかさ。これで彼の力もわかり僕が苦労する事無く君を消耗出来る。』

『個性強制発動』『干渉』 そして『洗脳』

◇♦？

時は調律者が緑の拳銃を相澤先生に撃ち込んだ時に遡る。
当然生徒は驚愕に満ちる。中には怒りで調律者に突貫しようとし

た者もいたがその全てがウサギチームによって取り押さえられていた。
「な、にを？」
「よく見てみろ。今の君はどう見ても満身創痍、ならばこれを撃つのは当然だろう。」
「は？一体それはどういう・・待て。なぜ俺はこんな流暢に喋れる？」
彼は自分の体を確認する。
・・・頭の傷や体の傷が消えている事に気付く。
「これは・・!?」
「治療弾。ウチでは常識だ。」
「そうか・・感謝する。」
「では、改めてだが・・」
そう言おうとした時、マオが叫ぶ。
「ねぇ!!??ビナーッ!!?管理がっ!!」
見れば倉持の気絶している体が痙攣し、薄いヴィジョンであるがナニカが這い出そうになっている。
「・・なんだ？何をした？アイツはっ。」
「・・何が起こっている。」
「おい、アイザワ・・と言ったな。早く逃げた方がいいぞ。」
「いや、俺の個性で打ち消した方が合理的だ。」
「やめろ。それをすれば彼は永遠に目覚めなくなる。そうなれば私はお前を今度こそ殺す。」
「・・何故だ。」
「答える必要は無い。・・下がっているといい。」

『そうはさせないさ。』
そこに『転移』してきたオール・フォー・ワンが語りかける。
「・・・赤い霧はどうした？」
『何、生きているさ。・・本当に強いな彼女は。』
「では何をしに来た？負け犬。」
『・・何、次は君の実力を見ておこうと思ってね。』

「そうか。では私の力をみたら彼の個性の行使を停止しろ。」
『勿論。僕も君の品定めが終わったら大人しく帰るとも。』
「なっ・・!!オール・フォー・ワン・・だと!?」
『・・すまないが今の僕には君に対する興味は無いんだ。大人しく退場していてくれたまえ。オールマイトが来るまで時間もなさそうなのでね。』
『転移』

そう言うと相澤は生徒の所へと、赤い霧は調律者と入れ替える形で転移されていった。

◊♦?

ーーー最優先防衛対象、倉持管理への防壁のハッキングを確認。
ーーこれより、Ｃｏｄｅ『ＡＬＥＰＨ』を解禁します。
ーー解放対象。『笑う死体の山』
ーー彼に死体を２人与えた上で解放を提案。
ーー可決。
ーー解放まで３。
１　２

◊♦?

「あぁ・・この形態のこいつか。なら楽勝だ。」
赤い霧は呟く。
現れたのは人の顔が無数にある物体。嫌、生物。
多数の目に、染み付く悪臭。
そして、もっとも特徴的なのはその張り付いた『笑顔』
三身一体の『笑う死体の山』がここに降臨した。

そして。

「これは・・どう言う状況だい？レッドガール。」
ヒーロー達の希望の象徴。
オールマイトがこの混沌とした戦場にようやっと参上した。

◊♦？

『さあ君の実力を僕に見せてくれ!!』
「・・はぁ。仕方ない。君はここで沈み込んでおこう。」
『では、先ずは小手調べだ。『空気を押し出す』＋『筋骨発条化』＋『瞬発力×４』＋『膂力増強×３』＋『空気圧縮』!!』
先程の『天国』を退けたものとは違い今度は範囲を圧縮し、威力を増した。
指向性のある空気の弾丸を空中より無数に発射する。
「Ｍｅｌｔｄｏｗｎ　ｏｆ　Ｗａｖｅｓ。出てこい。そして暴れ出せ。」
調律者が片手を翳すと黒い波のような生物が頭上に出現。その全てを防ぐ。
『やはり、この程度は効かないか。』
「終わりか？では次は私の番だ。」
「Ｍｅｌｔｄｏｗｎ　ｏｆ　Ｐｉｌｌａｒｓ。集まり、発射。」
お返しとばかりに８本の柱が集結１方向にのみ発射される。
『対象反転・・なっ!?個性が暴走してっ・・!?』
「私の柱がただの柱だと思ったか？だとしたら失望も良いところだ。」
個性により反転させようした柱は逆に暴走した個性により逆に吸い寄せられる結果となり・・
『がガァア!!?』
ダメージは更に加速した。同時に再び『トラウマ』が再び思い起こされる。
「・・もういいか？正直、君は私にとって大した敵でも無い以上、私を越えられない君は結局は頭に踏み潰されるだけだろうからな。」

『・・はぁ・・はぁ。いけないねどうも。僕がここまで弱体化しているとは思ってもみなかった。オールマイトに復讐する前に知れて良かったよ。』
『ダメージも大きい・・名残惜しいが今日の所は引かせて貰おうかな。だが、僕は君達が〝此方側〟に来るのをいつでも歓迎しているよ。』
そう言い、オール・フォー・ワンは姿を消した。

「・・さて。あちらは？」

◊♦？

「あぁ～貴様は確か・・愛弟子の。」
「愛弟子とはそこに倒れている倉持少年でいいのかな？」
「そうだ。彼・・倉持管理は私の愛する弟子だ。」
「そうか！ならば君は敵では無いな!!」
「・・私が言うのもアレだが・・本当にそれでいいのか。平和の象徴とやら。」
「まぁね!!」

ＵＧＧｇａａＡＡ・・・。

「で、レッドガール。私はこの謎の生き物を倒せばいいのかな。」
「まぁ、そう言う事だ。別に下がっていても良いんだぞ。」
「いいや、下がらないさ。原因は分からないが・・養子（むすこ）の失敗をフォローするのは親の役割だからね！」
「・・そうか。じゃああんたには最後の一撃を頼む。と言っても直ぐに終わるがな。」
「オーケー!!」

大凡、その不安定な体格からは想像出来ないスピードでこちらへと迫ってくるソレ。

赤い霧は先ず右側を叩こうとする。
「ヴォエ!!」
危機を察知したソレは人の哀しみを嘔吐。人間の歯茎、目、臓物そして攻撃性のあるナニカを吐き出す。
「私がそれを予期していなかったとでも?」
だが、ことコイツのような化け物どもの殲滅のエキスパートである彼女。
先ず、『ジャスティティア』の飛ぶ斬撃でそれを吹き飛ばし、第2、3撃で右側を微塵切りにし。
体制が不安定になりふらつき、もう片方が油断した所をすかさず『黄昏』で叩き潰す。
そして。
「今だっ!!決めろっ!!」
「CAROLINA(カロライナ)…SMASH(スマッシュ)!!」
風圧すら引き起こす彼の正義の拳は・・・
k…n…r
最後の一体の中央を吹き飛ばした。
こうして、USJで起こった前代未聞の事件はこれにて幕と相成るのであった。

事後処理。

ＵＳＪでの戦闘が終了後、飯田の救援要請により多くのプロヒーローが集結したが、時既に遅し。

「・・ん？・・わかった。んじゃ、後は任せた平和の象徴。」

「事後処理は任せた。義父様。」

「え!?ちょ・・ちょっと待ってくれ!?」

襲来してきた主犯のヴィランも、その諸悪の根源たる『オール・フォー・ワン』も、後に生徒からの証言で判明した『赤い霧』『調律者』両名もまるで誰もいなかったように忽然と姿を消していたのであった。

「Ｏｈ・・。」

◊♦？

Ｌｏｂｏｔｏｍｙ　Ｃｏｒｐｏｒａｔｉｏｎ内部。

そこにはかつてのような収容室は無く、基本的『セフィラ』『アブノーマリティ』『試練』そして『マオチーム』といった具合に別れており、各々が自分の個室を持ち割と有意義に過ごしていた。

そして、そんな者達が一同に会するここ、『会議室』には今回出動した『憎しみの女王』、ゲブラーそしてビナーが。

「・・・すみませんでした。」

「・・は？」

大分サイズダウンした『笑う死体の山』を絶対零度の視線で見下ろしていた。

「いや、あの・・ほんとすんません。」

「ねぇ、いくら洗脳されたからといってあんな破茶滅茶に張り切って出てくる事ないわよねぇ？管理の体見たぁ!!?物凄い勢いで痙攣して

たわよ!?」
「・・そこに関しては仕方ないと言いたいが、しかし。堪え性が無いのかお前は。」
「・・・ふぅ。」
物凄い勢いで罵倒していく女王。冷えた目で見下ろすゲブラー。紅茶を優雅に嗜み我関せずと思いきや1番殺気を放っているビナー。
いくら、ＡＬＥＰＨであってもこれはキツイ。
性別が無くても人間の死体から出来ている以上感情はあるのだ。
故になんだかいたたまれない気持ちを放ちながら更に縮んでいく死体の山。
「うぅ・・」
しかも喋っているところが中央にあるお面の様な顔からである。本当なんだろうか。この状況。
そんな彼女らを上座で見つめる女性が1人。

「んで?奴はどうするつもりだ?アンジェラ。」
「無論、殺します・・が、ただ殺すのでは私達の怒りは収まらない。」
「・・そうだな。それは私も同感だ。」
ありったけの殺意を撒き散らす3人。
「相変わらず怖いわね・・あれ?私ってこういう人たちを倒すのが使命じゃ・・?」
「やめとけ。億が一、それをやったとしたら我等が主人が哀しむ。」
「じゃあやめる。」
「はや。」
それに恐れおののくアブノーマリティ。
立場が全く逆な気がするが気にしたら負け、というやつである。

「さて、話を戻しましょうか。彼の組織のアジトの居場所がわかりました。」
淡々と敵の核心地を明かしていくアンジェラ。
「・・どうせなら、彼の組織を粉々にしてから奴をこの世に産まれた事

を後悔させるぐらい絶望させた上で殺そうと思いまして・・『何もない』を監視兼連絡役として派遣しました。」
「・・大丈夫なのか？それ？」
「以前の奴ならいざ知らず・・彼とのふれあいで『人間』を学んだアレなら問題ないだろう。」
「・・そうか。」
「まぁ、『何もない』が失敗した時を想定してホクマーも派遣しましたから問題はありません。」
「・・なら安心か。これでネツァクとかケセドとかだったら目もあてられないだろうな。」
「そしてもう1つ。管理が大々的に貴女達を使った事で雄英に余計なちょっかいをかけられるかもしれません。・・よって軽度ではありますが認識改竄をかける事にします。異議は？」
「「無し。」」
そこに関してはアブノーマリティもセフィラも躊躇は無い。
あくまでも雄英は彼を安全に守る防波堤のようなものであり、そこに感情はない。
だからこそ、その為には手段を選ぶつもりは無いのである。
「では、私はここで。」
「あぁ。あんたは大変だな。『Ｌｉｂｒａｒｙ　ｏｆ　Ｒｕｉｎａ』の社長さんよ。」
「いいえ？管理の事を想えば他の有象無象が何を言おうとも大した事はありません。別にＸにやっていた事を他の社員にやるだけですからね。」
「・・羨ましいな、『自由』に移動できるというのは。」
ビナーはそう呟く、確かに彼女らセフィラは自由に彼の元にいけるがあくまでも護衛として。１人の女としては彼に会うことは基本的に自重している。
アブノーマリティは彼に呼ばれた時しか直に彼に逢う事は出来ない。
だが、アンジェラだけは別だ。

彼女は『Ｌｉｂｒａｒｙ　ｏｆ　Ｒｕｉｎａ』の社長としての肩書きはあるものの『門』のお陰で一切のリスクは無く。
唯１人だけ、ただの女として・・唯の『アンジェラ』として彼に逢う事が出来るのだ。
「・・・ふふっ。」
最後にアンジェラは勝ち誇った笑みを浮かべて『門』を開き去っていった。

「・・裁判所。開けておくか。」
「あたしも参加していいかしら。」
「これで何回目だ？まぁ残当だが。」
彼女達はやはり切れていた。
「人間喰ってる俺が言えた事じゃないが・・人間、こわい。」
この中で１番の常識人？はこの中ではＡＬＥＰＨである『笑う死体の山』だった。

「さて、貴様の折檻の続きだ。」
振り向いたゲブラーを見て、あ、余計な事言った。と死体の山が気付くのには
そう時間はかからなかったそうな。

ーーーレベル２の認識改竄。対象、雄英高校。
ーー開始時刻は授業開始に設定。
ーー３…２…１…０。設定完了。

ＩＦ．最悪の結末。

ーー何処かで箱が壊れる音がした。
それは1人の人間により、1人の人間が殺された音。
世界にとってはよくある光景だ。殺人は人間が元来持ち得る悪性の象徴。
偶然にせよ、必然にせよ。
いかなる理由があろうとも誰かを殺すというのはそれに関連する誰かの憎悪を請け負うという事。
今回の御話はその請負人が世界そのものだった。
ーー唯、それだけのお話。
さて、話を戻そう。
今回の発端は『消去』が『箱』を消したことから始まる。
それはやむを得ない状況だった上での判断だったのだろう。
何が原因なのかここでは明言しないでおくが、何らかの異常自体であった事は
間違いない。
唯、彼にとって誤算だったのはその行為自体が最悪の一手だったという事。
彼にとっては苦しむ生徒を合理的に救助する為の最適の一手。
しかし、その生徒にとっては自分を殺し得る最も最適な一手だった。
結果、彼は跡形も無く爆散。血漿や脳液、或いは臓器だったもののナニカを撒き散らし、その場にただひとつの種が地面に埋めこまれる事は誰1人として気づく事も無いまま死亡した。
厄介だったのはそれが『倉持管理』以外に人が居た事。
当然、この異常事態。人はパニックを起こし。当人は唖然とする。
ーーそして、空が『赤』と『蒼』に染まる。

まず最初に現れたのは『水色』の女性。
そして降臨したるは白い夜と蒼き星。

女性はその整えられた顔付きからは想像し得ない憎悪の表情を持って、とあるスイッチを押す。
ーー瞬間、彼の周りにあった全てが死滅した。
人だけでは無い。建物も植物も人間も全てが彼を残し死んだ。

その頃何処かに居た『最悪』の体が『白き神』により書き換えられていく。
彼は抵抗するがその感情はやがて『神』に満たされる幸福と変わり
機械だけの頭は赤い目と長い嘴。
体は白くなり手には赤き鎌を携えた姿に変わる。
ソレはやがて蹂躙を開始。
彼が大切に育てた彼も、何年も手塩にかけて育てた組織も何もかもをもその手で壊していく。残ったのは『使徒』とかした『最悪』とその彼を信奉した者たちだったモノが飛び散っていた室内だった。
それだけには止まらない。
何処かで実験を重ねていた者。
或いは世界各地に存在する許してはならない悪人の体、計１１名はその白き
『使徒』へと姿を変え、各地を『浄化』せんと行動を開始する。
その化け物達から逃げる人々が空を見れば蒼い星が目に入る。
『進化』から免れた巨大な悪党やギャングなどはそれに魅入られる。
そして彼らはやがてソレに吸い寄せられるように姿を消していく。
それだけでは無い。世界の有名国は大パニックに陥っていた。
世界を代表する都市は赤く目がいくつも存在するバケモノと『赤い霧』や桃色の全てを溶かす少女、大凡１００の人間の死体を捕食した巨大なバケモノ、言葉ですら表現が出来ないナニカ、『調律者』、白い指揮棒を持つマネキンの音楽隊、大きな爪を持つ人、大きな緑色の機械、大きな口を持ったバケモノ、大きな墓、『便利屋』に黒の軍隊。
そして黒き門より生誕した『終末』を告げる鳥。
特に鳥は数多のヒーロー、元来人が持ち得ない神の如き『個性』であっても

即座に再生し、その者を片っ端から喰いちぎっていった。
ー余談だが、南極、サハラ砂漠の中心、かつて沈んだとされる海底神殿の中にとある卵があったらしいが今となっては発見するすべも無い。
更に世界各地では時間の歪曲が多数目撃される。
その他にも助けを乞う声にノイズがはしったり、命令系統がバラバラになったり、身体能力が大幅に低下したり、回復系の『個性』が使えなくなったり、何処からともなく鎮魂歌が流れたり、彼らから受けるダメージが増大したりしていた。
その中心地とされる場所にはどこか常人とは違った雰囲気を持った人が静かに佇んでいたそうだ。

当然、他の国も例外では無い。
蛇、龍、顔のついた大きな口、数多の剣が突き刺さった女性。
蝶、蜘蛛、何処からともなく通過する列車、狂ったように嗤う少女。
マッチが刺さった黒色の少女、お腹に大きな口がついた胎児、刃がついた笑顔の機械、鋼鉄製の機械的な箱、肉が張り付いたトナカイ、氷の女王、花の姿をしたバケモノ、大きな狼にのる赤ずきん。
案山子、射手、少女の顔をもった黒色の白鳥、鮫、花を撒き散らす婦人のバケモノ、蜂、黒の貴婦人、胞子を纏ったバケモノ、林檎の女性、屈強な犬、腐った人間、屈折したノイズ、火の鳥、痩せこけたバケモノ、顔が金属の縛られた男性、子どもの書いた絵が映し出されたモノ、痩せ越せた老人、金属製の木こり、目玉が大量についた木そしてウサギ、サイ、トナカイを従えた女性。
その全てが全人類に対して殺戮を開始。
瞬く間に日本を除く世界の全人類・・否。
溶けたモノや腐った人間など『彼ら』の眷属となったモノ以外は全滅を迎え
その化け物達は・・ゆっくりと彼が眠っている場所へと侵攻を開始した。

そして、その日本では『水色』の女性が門を開く。
現れたのはかつて『墓』に入っていたヤツラ。
今世界で猛威を奮っている化け物以上の怪物達。
彼女はそれらに指示を出す。
”そこにいる男以外の全ての人を殺しなさい。”
怪物達は即座に行動を開始。まず始めに彼の親族を殺害。その後、彼の周りに居た繋がりの全てを滅ぼした後
最後の防波堤であった、『希望の象徴』へと一斉に侵攻。
三分にも及ぶ健闘を見せたが遂に怪物の波に呑まれる結果となった。
そして、次に残った人類への侵攻。
ヒーロー候補生だろうと、プロヒーローであろうと。
・・唯の一般人であろうと。
逃げられはしない。1人だって逃しはしない。
・・残るのは虐殺という名の蹂躙のみ。
そうして、世界にはこの状況を作った張本人以外、誰一人として『人間』は居なくなった。
『水色』の女性は銃を彼の脳天に押し付けて語る。
”貴方が悪いのです。貴方が愚かにも私たちの全てを奪った。・・・どうです？今の気持ちは？〃
・・・最期に見せた男の表情は彼女のみが知っているのだろう。

・・数年後。
彼、『倉持管理』の死体があった場所には世界を滅ぼしたアブノーマリティとその眷属、セフィラ、試練、チーム。そしてアンジェラがその日を迎えるのを心待ちにしていた。
彼女らの眼前に聳え立っているのは『光の木』。
その木から大きな『光り輝く果実』がポトリと落ちた。
その果実が2つに裂け、その中身を見て。
”お帰りなさい!!〃
と涙を浮かべて飛び込むのでした。

こうして彼らは、新たな文明を築き上げ。
地球には原初の輝きを蘇らせ。
その生命の中で幸せに・・本当に幸せに暮らすのでした。

めでたし。めでたし。

↓再挑戦シマスカ？

次のステップへ。

さて、ＵＳＪの事件から４日が経った現在。
１―Ａ組の生徒は再びＵＳＪへとその足を運んでいた。
ただ１人を除けば・・だが。
「さて、あんな事があったけど授業は授業。という訳で救助授業。張り切っていきましょう。」
「１３号先生・・大丈夫何ですか？」
「背中を少し捲れてしまっただけさ。大した怪我でも無いよ。」
治療を受けピンピンしている１３号先生、そして。
「時間は有限だぞ。準備を始めろ。」
ゲブラーが用意していた回復弾のお陰で傷が残ったものの包帯を巻く事なく後遺症も無い相澤先生。

またもやオールマイトがいないが先生方２人は平然としている。ＵＳＪの時に反省したのでは無いかと思うが、今回だけは完全な私用で一時的に離れている事が想像できる。
「・・あの。先生。」
「何だ。」
「倉持くんは・・まだ目覚めないんですか？」

そう、倉持管理の見舞いだ。
「あぁ。」
相澤先生はここに着く前、授業開始前にとある人物としていた会話を思い出す。

◊♦？

数刻前、学校が丁度昼休みになっていた頃。相澤は１人の女性。
ＵＳＪの事件において加勢してくれた雄英の臨時教師であり

彼の友人であり、倉持管理の『個性』を知るゲブラーと会議室で会話をしていた。
「・・で、何故貴様は私を呼んだ？」
「単刀直入に言う。倉持管理が目覚めない理由は何だ？」

その言葉に少しだけ目を開き、その後来客用のコーヒーを飲みほす。
そして、腕を組み直しこう告げた。
「エネルギー不足だ。」
「・・エネルギー不足？」
「そうだ。あの女王を始めとする通称アブノーマリティは彼の中にいるのは把握しているな？」
「ああ。」
「管理は奴らをその中から出し、使役するのにはエネルギーを消費する。」
「当然アイツの装備にもエネルギーを微量ながら消費するし、その残量にも限界はある。・・ウサギチームを呼んだ上女王を出し、駄目押しにアレだ。エネルギーは瞬時に溶ける。だからアイツは今は眠りにつく事でエネルギーを最大まで回復中という訳だ。」
彼女はそう淡々と告げた。

「・・いつ目覚める？」
「後3日もすれば目覚めるさ。」
「分かった。・・手間を掛けさせたな。」
「ふん・・次は私の手を煩わせてくれるなよ。」
そういうと彼女は『赤い霧』と共に姿を消そうとして・・・

「すまない!!ゲブラーくんはいるか!?」
そこに妙に焦った様子で扉を開けるオールマイトが現れた。
ゲブラーは霧の発生を中止し問いかける。
「・・なんだ。オールマイト。私はもう帰ろうと・・・。」

「済まないが君の力を貸して欲しいんだ!!」

「・・・は?」

◊♦?

時は戻ってＵＳＪ。

山岳ゾーンでは今まさに訓練の真っ最中であり、

登山客四名が谷底へ落ち、

二名は頭を激しく打ち付けて意識不明。

もう二名は足を骨折し、動けず救助要請という設定という１３号先生の指示を受け。

ヒーローの卵達は個人差はあれどプロを目指し授業に取り組んでいた。

現在は救助する側を八百万、常闇、轟、尾白が行い。

される側を緑谷、麗日、飯田、爆豪が行なっていた。

その救助される側はというと。

「皆!全力で怪我するぞ!!」

「怪我のふりだよ、ふり。」

「くっだらねぇ・・俺は寝るぞ。」

「かっちゃん!?」

「あ、じゃあ私もおやすみー。」

「麗日さんまで!?」

寝始める２人。

だが、意識不明というのを演出するには実はこれが一番早かったりする。

だが、ツッコミ役にまわっている緑谷はそれどころではなくとにかく苦労人だった。

結局。

「何をしているんだ!?爆豪君！麗日君！授業中に寝るのは良くないぞ！

・・いや、待てよ。

爆豪君と麗日君の役は意識不明の重傷者・・まさか寝ることで意識不明の状態を再現しているのか！」

という深読みし過ぎた飯田の一言を正直に捉えた緑谷は。

「・・すごいなぁ。」

と変な信頼を高めていった。

その後はというと飯田の迫真の演技により麗日の腹筋が崩壊したり。轟と八百万の間に一悶着あったり。峰田がそんな八百万の豊満な桃を涎を垂らしながら見ていたり。

なんやかんやあったものの、無事に山岳ゾーンの訓練は終了した。

◊♦？

山岳ゾーン訓練が終了し、次は倒壊ゾーンでの救助訓練。

救助訓練の1回目ということもあり今回は色々な状況を経験するようだ。

倒壊ゾーンでの救助訓練は

震災直後の都市部において被災者の数、またその位置が分からない状態でなるべく多くを助ける訓練。

8分の制限時間を設定し、また4人組での救助活動を行う。

残りの16名は各々好きな場所に隠れて救助を待つ。

ただし、その内の8名は声を出せない状況と仮定した上で行動する事がここにおいての設定だ。

救助チームは爆豪、麗日、峰田、緑谷。

「なんで俺がまたデクなんかと組んでやんなきゃなんねぇんだよ!?」

「しょうがないでしょ爆豪君。作者がそれ(原作)どうりにしか出来ないんだもん。」

「なんだそりゃぁ!?」

「麗日やめろって。メタいからそれ。」

そんなこんなで始まった救助訓練。
途中までは順調に進行していたそれも。
・・1つの爆音が全てをかき消した。

生徒達がその爆音地へ向かうと。
そこには地に伏している轟と。
：マスクをした筋骨隆々男とその姿を『赤い霧』が浮かぶフルフェイスの長い赤髪の女性らしき人が立っていた。

有精卵（ヒーロー）

「全員まとめて死にさらせぇ!!」
「・・皆殺しだ。憎きヒーロー共が。」
顔が見えない男女がＡ組の生徒達を襲う。
男の方が地面を踏みつければ地が裂け風圧が空気を揺らす。同時に砂埃が発生し女が鬱陶しいと言わんばかりにそれを一瞬で払う。
そうして晴れた先には瓦礫１つも残ってはいない。
つまり、男には踏み付けだけで風圧を起こし建物や瓦礫を吹き飛ばす程のパワーがあり。
女の方は力こそ男に劣るもの大量発生した砂埃を一瞬で散らす程にはパワーがあるということ。
男は片手に気絶しているであろう轟を持ち、女は身長の半分程の大きな剣を携えて双方とも巨大な威圧感を出して立っている

「誰１人として逃しはせんぞ!!」
出口を指差しそう宣言する男。
「・・・ふん。」
それに見向きもせず大剣を構える女。

「あわわ・・嘘でしょ!?皆、早く逃げて!!」
１３号先生が正面出口を指差し生徒達はそれに従い
避難を開始しようとするが。

「ウラァ!!!」

「はぁああ!!」

爆豪が飛び出し爆破で男を攻撃し、緑谷がそれに乗じる形で女に攻撃する。

「邪魔すんじゃねぇクソナード!!こいつらは俺が倒すんだよ!!」
「お喋りとは・・随分と余裕だな!!」
「なっ・・!!」
　爆風が晴れ無傷の男が出てくる。そして爆豪の腕を掴み。
「吹っ飛べぇ!!」
　その豪腕をもって投げ飛ばす。
「のわぁ!!?」
「かっちゃん!!」
「・・余所見か。いい度胸だな。」
　緑谷が驚いている隙をつき、女もまた緑谷の腕を掴み1回転した後その遠心力を利用し投げ飛ばす。
「ふっ！」
「うわぁ!!?」

「ちぃい!!」
　爆豪は爆破による爆風を生かし回転。
　そのまま着地し、再度攻撃に移る。
　ターボで加速し、右の蹴りを男にぶつける。
「舐めてんじゃねぇぞ!!」
　その勢いのままラッシュを開始。
「オラオラオラオラオラア!!」
　殴る、殴る、殴る。
　その勢いは拳を繰り出すごとに加速。
　しかし、その猛攻をも片手間に捌いていく男。
　爆豪とてこれが通じない事は百も承知。
　だが、左に抱えている轟が彼の広範囲の爆破攻撃を躊躇わせている。
　そして、男はその攻撃を捌きながら告げる。
「さっきよりは速いが・・ここにいるのは俺だけじゃねえんだぞ?」
「・・そういう事だ。」

「なっ!?」
その猛攻の合間を縫うようにして女の踵での蹴りが爆豪の腹にヒットする。
「ぐがぁ・・まだ・・まだぁ!!」
爆豪は体勢を立て直し、目標を女に定め加速。
手を爆破させ、女の顔面向かって突き出す。
「くたばれクソアマァ!!」
「甘い。」
だが、それが通じる女ではない。
腕からそれを受け流し、蹴りで彼を押し出す。
「づぅ!!」
その勢いのまま、後退させられる。
「くそがぁ・・」
2対1。
しかも、戦闘能力はあちらが圧倒的に上。
戦況はどんどん不利になっていく。

◊♦?

一方緑谷はというと何とか受身を取る事に成功。
ダメージを最小限に抑える。
「ぐうう!」
「緑谷くん!大丈夫!!?」
「う、うん。ありがとう・・。」
とはいえあの2人相手に戦う爆豪を放ってはおけない。
だが、あのパワーでは仮に馬鹿正直に『ワン・フォー・オール』を撃っても
どちらかに当たる前に反撃されてしまう。

考察するに男の方は強化型の『個性』だろう。
瓦礫や建物を破壊する程のパワーだ。
『個性』無しには不可能だろう。
だが女の方が分からない。
あの大剣を持っているからといって直感的に強化型の『個性』と断言する訳にもいかない。
何より、あの周りに漂う『赤い霧』だ。
あれは一体どんな能力なのか、どの様な効果を及ぼすのか。
対策を練れば消えていく。
完全に手詰まりだ。
そんな中・・
「づぅ!!」
爆豪が女によって飛ばされてくる。
「くそがぁ・・。」
「かっちゃん!大丈夫・・?」
「あぁ・・?テメェに心配される筋合いはねぇ。それよりも・・・」
爆豪は飯田の方を向く。
「てめぇ委員長だろうが!!なんでさっさと生徒に避難指示を出しておかねぇで棒立ちなんかしてんだよ!?モブの癖に自分の仕事サボってんじゃねえぞ!?アア!!?」
「・・どうして君はそう口が悪いんだ。だがそうだな。君の言う通りだ!」
口調は荒いどころか恐喝の域まで入っているが正しいことを言っている爆豪。
その言葉に生徒は13号先生の言葉を思い出す。
誰かが出来ない事を自分が、自分に出来ない事を誰かが。
一人一人がやれることを、出来る事をやる。
「おいおい、爆豪だけにカッコつけさせねぇぞ!!」
「私達1―A、21名!」
「全員ヒーロー志望なんですけど!!?」
切島、八百万、麗日に続いて雄英高校ヒーロー科の全員が集まる。

闘志をみなぎらせ、全員で一丸となって敵に立ち向かおうとしていた。
爆豪の特攻を眺め、先生の言葉を思い出した事で怯えが無くなり
戦うという意思をみなぎらせている。
「・・はっ。クソモブ共が・・。足引っ張んじゃねぇぞ。」

「随分と勇ましいな・・だが・・フン!!」
「・・・そら。避けてみろ。」
男が繰り出す風圧によって瓦礫が飛ばされ、その1部は女の大剣によって速度が増した状態で生徒に迫る。

「お任せ～☆」
青山は腹からネビルレーザーを射出し、
切島は体を硬化させた拳で、砂糖は筋力増強で降って来る岩を砕いて行く。
耳郎はイヤホンジャックで爆音で鳴り響かせて足止めし。
瀬呂は両肘からセロハンテープを出して敵を巻き付け、八百万は大砲で捕縛ネットを撃ちだして拘束を図る。
そのネットに男は捕まるが女は軽々と避けていく。
「くっ!!ですが、男性の方は!!」
「行くぞA組!!」
委員長と副委員長の声を合図に近接系の『個性』は男に迫り、その他は女を足止めすべく走る。
「予想外だが・・この程度ではこの俺は倒せん!!」
男は力づくで拘束を引き千切り、渾身の風圧をもってその行進を吹き飛ばす。
生徒は吹き飛ばされるが女はその風圧を大剣で防ぐ。
敵侵攻の時に見た、脳無よりも強いパワー。
本来なら打つ手は無いと考える緑谷。
だが、奇しくもその後現れた『オール・フォー・ワン』のお陰で冷静に作戦を考える事が出来た。

勝てないのなら動きを止める。
そうならばいくらでも方法はある。
「かっちゃん。」
「なんだクソナード。俺は今てめぇに構っている時間は・・んだぁその目は。」
「作戦があるんだ。」

◊♦？

再度、攻撃に移るＡ組。
爆豪がヒット＆ａｍｐ；アウェイでくらいつき、どうしても合間に生じる隙を硬化させた拳で殴る切島や電撃で敵を痺れさせる上鳴、芦戸の酸によって補う。
だが、その一切を物ともせず男はその全てを圧倒していく。
「連携は見事だな、流石にバテてきたな？・・・そろそろ限界か。」
一方で砂糖の強化した拳や尾白の尻尾。
八百万の創造したタレット。
更には飯田のエンジンによる加速による拳や青山のレーザーを女は余裕綽々といった様子で避けていく。
それどころかその攻撃を利用し最も危険性の高いタレットを粉砕していく。
「・・それで終わりか？ならばこちらの番だ。」

疲れが溜まってきたのか肩で息をしはじめる生徒達。
敵の言う通り、体力の限界が近づいてきたのである。
そんな中爆豪は獰猛な笑みを浮かべ強い言葉を吐く。
「ハッ！笑わせんな。こっからが本番だろうが!!オラァ!!」
爆豪が男に迫り蹴りによって男の右手を封じる。
「今だ！麗日さん!!」
「うん！」

瞬間緑谷は走り出し、麗日の手に触れて個性で体を軽くする。
「蛙吹さん!!」
「任せて。」
蛙吹の舌が伸びて軽くなった緑谷の胴体に巻き付き引っ張るように投げ飛ばす。
「オラァ!!」
足から手に攻撃を切り替えた爆豪の爆破で男の視界を防ぐと同時に緑谷は敵に一直線に突っ込む。
しかし、これは攻撃の為にではなく轟を救出する為の行動。
峰田の『個性』モギモギを一つ手に持ち轟に付ける。
「解除!!」
同じタイミングで麗日が手を合わせ個性を解除する。
轟を引っ張り、救出に成功。
男から離れていく緑谷。
「何!?」

その驚いた隙を突き、緑谷は中指に『個性』を集中。
「SMAAAASH(スマアアアアシュ)!!」
その一本を犠牲にする事で男を防御させ硬直させる。
「ぬうう!!」
防ぎきる男。だが本命は・・・。
「死ねえええ!!」
その下をつく形で両手による爆豪の本気の爆破。
これにより男はある瓦礫に向かって吹き飛んでいく。

「ぐがあああ!!」
男は瓦礫に激突。すぐに体勢を戻そうとするが戻らない。
それもそのはず、その瓦礫にはモギモギが大量に付いている。
こんなものは本来なら簡単に取れるもの、しかしその体勢故に取ることは不可能。
事実上の決着(チェックメイト)であった。

「トドメだぁ・・クソがぁ!!」

そう爆豪は勝利宣言を男に下す。

しかし。

「かっちゃん!!!!!」

「あぁ・・・?」

すぐ後ろに今まさに蹴りを放とうとしている女の姿。

全員が疲れているその一瞬を突き、包囲網を突破。

吹っ飛ばされる男を追いかける形で爆豪の後ろに回っていたのだ。

「油断・・だな。しね。」

緑谷はその光景を見れず目を瞑り、爆豪もまた咄嗟の防御が出来ず目を瞑る。

緑谷が抱えていた筈の轟が消えている事に気付かずに。

「なっ・・・。」

再び目を開けると、女の右半身が凍りついていた。

「・・終わりはそっちの方だ。」

轟が爆豪の目の前に立ち、『個性』を使っていたのだ。

「・・皆!!」

当然、そんな女を見た拘束が可能な生徒は総動員で女を確保。

「・・・遊びすぎたか。」

・・・決着。

勝者1年A組。ヒーロー科一同。

◇◆?

「はっはっは!!そう私が来てた!!」
「「オールマイト??!!」」
戦闘終了後、爆豪が男の仮面を外すとその正体が露見する。
そう、オールマイトだ。
生徒一同は怒りを隠す事なくオールマイトに迫る。
「いやぁ～～実はちょっとサプライズ的に敵が出た際の救助訓練をと思ってね～！ほら、前あんなこと起きたばかりだしね！しかし皆思いの外テキパキしてて流石雄英、
・・・なんか、すいませんでした。」

「「やり過ぎなんだよ!!あんたは!!」」

「うわぁぁ!!!」

まるで漫画のようにボコられるオールマイト。
本人にはダメージを受けている様子は全くないが精神的なものは負っているようで涙を浮かべて謝っている。

「え、じゃああの女の人は？」
そんな素朴な疑問が緑谷に浮かぶ。
「あ、そうだったね！おーい！女史！」
「・・なんだ、もういいのか？」
「うむ、大変助かったよありがとう！」
その言葉が女に伝わった瞬間。
「ふっ！」
氷を砕きネットもシールも全部纏めて引き千切りその被っていたもののを外す。
「紹介しよう！彼女が今回私のこの訓練に協力してくれた・・。」
「ゲブラーだ。一応はお前たちの臨時教師という立場にいる。今回は

オールマイトに頼まれここにいる。」

外した先にいたのは左頬と右目に傷がある女性。
先程まであった赤い霧は跡形もなく消え、呆れた様子でオールマイトを見ている。
「どういう事!!?」
驚愕に満ちる生徒一同。
話を聞けばオールマイトのサプライズだったらしい。
敵の襲撃、そして『オール・フォー・ワン』の襲来。
何億分の1に満たない事で生徒は偶然だと捉えている。
しかし、実際にはヒーローには絶えず危険が付きまとう。
そのことを自覚して欲しいと思い、オールマイトなりに考えた結果、ゲブラーを巻き込んでこの授業を敢行した。
相澤先生は承諾しなかった。下手をすればトラウマになりかねないと忠告もした。
けど、困難を乗り越える覚悟を学ばせ、壁を乗り越えるヒーローにするそれが教師の務めだとオールマイトは語った。

だとしても、過剰戦力にも程があると相澤は言ったが。

そこまで言われて生徒は思い返す。
あの時に見た絶望の象徴を。
また、こんなにも大きな音で戦闘しているにも関わらず轟が起きなかった事や
13号先生や相澤先生が唯、逃げるのを薦めていただけだった事。
その他にも色んな穴を思い出して。
「だとしてもやり過ぎだわ!!!」
また、オールマイトをボコった。
最後に飯田、麗日、芦戸の抗議、その他生徒の怒りを真っ向から受け、オールマイトが反省した事で授業は終了したのであった。

「やっぱり、先輩の言ったとおりになりましたか。」
「・・やはり向いてないな。教師は。」
「疲れた・・手加減とはこうも難しいものだったか・・？」
「こいつもだが。」
粗方予想通りの結果に呆れる教師陣。だが生徒全員が立ち向かう姿は予想していなかったようで、相澤先生はこの有精卵達を3年間大切に育てようと改めて決意を固めた。

そして、その頃。
「んん・・・。」
倉持管理（ホ）はスヤスヤと夢の中にいたとさ。

制限、そして会議。

某ヒーローのお騒がせ事件から少しして。
倉持が目を覚まし、ある程度の事後処理が終わった翌日の朝。
1―Aの扉が相澤先生によりいつも通りに開かれ今日という日が始まる・・
のだが、今日は少し違っていた。
相澤先生は事務連絡を済ませると少しだけ間を開け。
「ーー雄英体育祭が迫っている!!」
学生にとって最も重要といっても過言ではないイベントの予告をした。
「クソ学校っぽいのきたぁーーーー!!!」
歓喜に沸く生徒一同。それもそのはずだ。
ヒーローとして初の救助訓練では巨悪が襲来し、2回目は象徴が全力のお節介をかました。
要するに、生徒達は学校っぽい事に飢えていたのである。
クラス内のボルテージが上がるなか説明は続く。
曰く、敵(ヴィラン)ごときに中止にしていいものでは無く、寧ろ逆に開催することで雄英の危機管理体制が盤石だと示す事で更にヒーロー全体を盛り上げると。
警備は例年の5倍に強化し、ゲブラーもまた参加するそうである。
ゲブラーの強さを知っている生徒は固まりつく。倉持は首を傾げる。
また、雄英体育祭は『個性』の発生により形骸化したオリンピックに取って代わる祭事。
多くの人や全国のプロヒーロー達が卵たる君達を見に来る、つまりはこの雄英体育祭がプロに注目される絶好の機会であると。
通常卒業後は資格を修得し、
プロの事務所のヒーローのサイドキック(相棒)入りが常識とされる昨今。
当然名のあるヒーロー事務所に入った方が経験値も話題性も高くなり知名度も上がる。

無論簡単では無い。
だがプロに見込まれれば、その場で将来の華が開く事が確定する。
年に1回・・・つまり計3回だけのチャンスであり、ヒーロー・・いやプロヒーローを目指すには正に棚からぼた餅であり千載一遇の機会なのである。
雄英体育祭は基本的にラストチャンスに懸ける熱と経験値から成る戦略等。あるいは応用性から例年のメインたるは3年生のステージ。
しかし今年は敵の襲撃、しかも『オール・フォー・ワン』を退けたとされる1―Aこそが注目の的だ。
ニュースや新聞にも取り上げられ、前年を遙かに超えた盛り上がりが確定しているのである。
それを聞き、盛り上がりから一転。
闘志を燃やすA組。
敵はクラスメイトだけでは無く、他クラスも同様。
だが。
最大の壁たるはこの男。
（成る程・・つまりここで実力を示せば良いのか。がんばろ。）
多くの化け物を従え。制圧、殲滅、救助行為はお手の物。
雄英史上最も危険で有能な生徒（ヒーローの卵）と教師からの呼び声も高い『倉持管理』である。
各々が策を巡らし、対策を練る一方。
「あ、そうだ。倉持。もうHR（ホームルーム）も終わるから。今から職員室に来い。」
「はい。わかりました。」
ある取り決めが作られようとしていた。

◇♦？

「アブノーマリティの制限？」
「あぁ。」
「・・何故です？この祭事は『個性』込みでプロが我々を自らの手足た

るかを裁定する場なのでしょう？」
「言い方に含みはあるが確かにその通りだ。正直お前の『個性』がそれだけならばこんな事は言わん。」
「だが、雄英の内部ではお前のアブノーマリティ達の暴走を懸念する声があるのも事実だ。何しろ、情報源がアイツだけだからな。」
「・・そうですか。では『彼ら』から力を借りるのは・・。」
「1種目1人だ。それ以上は交渉出来なかった。」
「・・わかりました。では他は？」
「・・ウサギチームは禁止だ。後は自由にして構わないそうだ。」
「・・まぁ、そうでしょうね。わかりました。」
（えー!!私のキャロットケーキがぁぁ!!!?）
（今度作るから・・ね？）
（いえす！さっすが管理はウサギの躾がわかってるねー！）
「ああ・・これで連絡は以上だ。授業は遅れるだろうが予め連絡はつけてある。焦らずにむかえ。」
「わざわざありがとうございます。では失礼します。」
「・・言い忘れてたが、選手宣誓はお前だからな？」

「・・・・・・・・え？」

「成る程、まぁあれしか渡していないですからこれは妥当な選択でしょう。」
「さて・・と、先ずはビデオカメラの買い替えと、ＴＢのメモリーと・・あ、席も取っておかなきゃね。私だけの特等席を・・ね？」
「・・なんで、私がこんな事をしなきゃならないのだ？」
「仕方ないでしょう？臨時教師という立場に身を置いたのは貴女ですよ？ゲブラー。大人しく防衛に徹していなさい？」
「・・くそ。後で映像見せろよ？」

「ふっ、無様だな。」
「・・ふん。」
「後、アンジェラ。仕事に戻れ。」
「・・はいはい。」

◊♦?

『Ｌｏｂｏｔｏｍｙ　Ｃｏｒｐｏｒａｔｉｏｎ』内部会議室にて。
現在、深夜。
現実の身体は眠りにつき、精神は今アンジェラとある会議をしようとしていた。

「えっと、これから体育祭での懸念事項についてのお話なんだけど。」
「はい。」
「んと、アンジェラに聞きたいのは２つあるんだけど・・先ずは選手宣誓からだね。」
「『全員纏めてかかって来い。』・・ですかね？」
「・・なんか、恥ずかしい。というかもっと簡単なのは無いの？」
「・・そうですね。では、こういうのはどうでしょう？」

ーー宣誓。
私はクラスの差別なくまた見くびる事なく闘い、そして全ての敵を打ち倒し一位の栄光を受け取る事をここに宣誓します。

「・・良いね、これにしようかな。」
「ええ、楽しみにしてますね。」
（んーーー!!!?これは我が社の財力を総結集させて最高画質の物を用意しましょう！ええ、抜かりは無いわ。そして視聴室の大画面で楽しむのよアンジェラ!!）
「じゃあ・・というかこれが本題かな？」

「んん！はい。アブノーマリティの制限・・ですね？」
「うん。僕としては心苦しいけど・・多分これは自分の限界を知る良い機会だと思うんだ。」
「という事は・・。」
「うん、もしかしたら使うかも。」
「そう・・ですか。でしたら私が言える事は1つだけ。どうか、無茶だけはしないように。貴方の命は私達の全てです。それだけはどうか忘れないで下さいね？」
「・・ふふ。僕はしあわせものだねぇ・・。うん、頑張るよ！」
「ええ。私も客席から応援していますね。」
「ほんと!!?うん！応援してね！」

（あっ。良い！良いですよこれ!!このふにゃっとした顔！間違いなく今年のベストセラー入りですよ!!）

「うみゅ？」
「・・おや。もうあちらは朝の様です。今日も学校でしょう？管理。」
「うん！いってきます!!」
そう言って、彼の体が透けていく。
そして、彼は目覚めるべくその姿を消した。

「・・いってらっしゃい。」

朝が来る。
来たる祭事に向け、生徒達の特訓が始まる。

特訓、そして決断。

雄英体育祭まで
後一週間が迫ろうとしている休日のとある施設。
そこは昔、ホテルがあったが都市の発展につれ場所を移しリフォームしようという話になり、取り潰した土地をアンジェラが買い占め作り上げた特製の訓練施設である。

そんな場所では今、1人の少年が来たる祭典に向け特訓をしている最中だった。

「ほら、いくわよ！もう一本!!」
「うん！」
「では、いきます！」
「うふふ・・油断してると食べちゃうわよ？」

闘技場を想起するような場所の中央には3人の『魔法少女』とその使役者である倉持が立ち、現在15セット目に突入するありとあらゆる状況に反撃及び自分からの攻撃なしで対応する為制限時間5分の訓練が行われていた。
彼の勝利条件は5分間逃げ切れる事。
彼女達の勝利条件は素手で彼の体の何処かに触れる事である。
因みにこの訓練の前には『雪の女王』と『火の鳥』による2時間耐久訓練だった。
「それ!!」
『憎しみの女王』が彼に向かって魔力弾を放つ。数にして20。
それの隙間を直ぐに探し当てつつ回避。
次の『絶望の騎士』の攻撃に備える。
「はぁ!!」
「ふっ!!」
騎士が常人の数倍の速度で斬りつける剣を回避、そしてつけている

『黄金狂』で騎士の体勢を崩す。
「流石です！ですが・・。」
「これならどうよ!!アルカナビート！」
今度は更に騎士の背後に配置してある剣と女王のアルカナビートのコンボ。
総数は先程の倍。
「うわわわ!!」
魔力弾は避けて、剣は弾いていたが流石にこの弾幕には対応しきれず咄嗟にワープゲートを開き退避。
しかし。

「うふふ、はい。タッチ♪これで貴方はぱっくんよ？」
転移した真正面には『強欲の王』がにこやかに立ち、彼の肩に触れる。
「あーー!!またやっちゃった!!」
「うふふ。それは元々私があげたものなんだから転移先も何となくわかっちゃうのよ？だから今のは悪くないってこれで何回目だったかしら？」
彼女は彼の『ＥＧＯ』を指差してにこやかに笑いかける。
そこには怒りは無く、寧ろ大変にこやかに楽しそうに語る。
「あー！またご褒美は先輩なの!?ずるいわよ!!」
魔力弾と剣が発生させた砂煙が晴れた先で女王が地団駄を踏んでいる。
どうやら特訓で彼が捕まった場合に
何でも言う事を１つ聞くという約束を立てていたようだ。
「うふふ、ごめんね？また私がとっちゃった♪」
これで『貪欲の王』の１２勝目。
その下を女王、騎士、管理が横並びになっている。
「じゃあ、お菓子。宜しくね？」
「はーい。」
そう言って彼は大人しく別ブースにある食堂に向かっていく。

そう、彼女のご褒美はホールケーキや団子といった手作りのお菓子を作ってもらう事。
しかも、普通の大きさでは無い。
例えるならばウェディングケーキ並みの大きさ。或いは米国の都市で作られた『お菓子の家』並み。
どう考えても時間がかかるがそれこそが彼女の策略と食欲の結果である。

「ええ・・これで先輩って何キロカロリー食べるのかしら？」
「・・さぁ？」

余談だが現在時刻はまだ１４時であり、お菓子の制作時間は約１時間。
どう考えても料理の時間の方が多いのである。

◊♦？
翌日。
今日は久々に帰ってきたゲブラーとの訓練。
こちらは武器ありの模擬戦。先に武器を弾いた方の勝ちである。
当然装備は万全に装備。
彼は『失楽園』を装備し、彼女は『赤い霧』の状態で行っている。
現在、既に戦闘を開始。
闘技場の周りは地震でも起きた様にボロボロだ。
「そらぁ!!!」
彼女が『ミミック』を振り下ろし、彼が同じもので受け止める。
同時に彼が立っている地面がその圧により割れていく。
「っ・・!!はぁ!!」
「はぁ・・はぁ・・。あれ？」
何とか、彼女の大剣を弾き体勢を立て直すため、前を向く。

だが、彼女は既に前方にはその姿は無く。
「こちらだ!!」
横から黄金が見えたと思えばそこにはゲブラーがおり、彼の顔面を掴み
地面へと叩きつける。
「ぐっ!!」
「余所見をそして油断をするな!!それをするのは私よりも強くなってからだ!!」
「はい!」
彼女が欠点を指摘、叱責し。
彼がそれを受け止め学ぶ。
彼らの訓練はこの後管理が疲れにより気絶するまで延々と続いた。

◊♦?
その日の夜。
オールマイトが帰ってきたのを確認し夕食を作る。
当然、彼の秘密については承知済みなのでなるべく健康重視で吸収が早いものを作り上げる。
「おお!ありがとう息子よ!では!頂きます!」
「頂きます。あ、それもう解いても大丈夫だよ。」
「おお!忘れていた!では・・。」
オールマイトはマッスルファームを解除し、本来の痩せ細ったトゥルーフォームへと戻る。
「そっちはどう?」
「あぁ。今の所は大丈夫だよ。けどぶっちゃけ私がヒーローとしてやっていける時間も刻々と短くなっているのが現状かな。」
「・・そっか。」
「でも大丈夫!まだ3時間は耐えられるよ!本当だったら2時間が限度だったんだが、この前『リカバリーガール』にそう診断を受けてね。まだまだ私もやっていけるみたいだ。」
「そっか。じゃあ僕ももっと頑張んなきゃ。

『Ｐｌｕｓ（更に）　Ｕｌｔｒａ（向こうへ）』・・でしょ？父さん。」
「そうだとも！君はまだまだ上を目指せる！父として応援しているぞ息子よ！」
「うん。だから応援しててね？」
「ああ、勿論！」

◇◆？

深夜、寝室にて。彼は想起する。
『管理、貴方は私たちの全てです。』
『父として応援しているぞ息子よ！』
『化け物め・・。』

（僕はこのお祭りでどうしたいんだろうか？）

彼はそう考えながら、深い眠りにつく。
明日にはきっと答えは決まっているだろうと思いながら。

宣戦布告。

某日。
雄英高校は大きな熱狂に包まれていた。
その中でも最も観客やプロヒーローの視線を集めるのは1年生が競技を行うスタジアム。
『レディースアーンドジェントルメーーーン!!!今年もやってきたぞ雄英体育祭ぃぃぃぃ!!!実況はこの俺!!プレゼントマイク!そしてぇ…!!』
『解説のイレイザーヘッドだ。よろしく。』
実況席に座っているのはヒーローコスチュームを着たこの2人。
会場は更に熱気に包まれる。
『さてさてぇ!!今年の雄英体育祭は一段と盛り上がってるねぇ!!』
『まぁな。ニュースでも取り上げられてたが雄英がヴィラン達を撃退したのが話題になってる。』
(特にアイツとかはな。)
『確かになぁ!!そういうことで今期の1年生は大きな期待が掛けられてる!!その期待を存分に上回って欲しいぜぇ!!』
『さぁ!そろそろ1年生の入場だぁ!!』

◇♦?
その頃、控え室では。
「皆!準備はできてるか!?もうじき入場だ!!」
(…大丈夫。今回は思いっきりやるって決めたんだ。アンジェラと父さんの期待に応えるために!!)
「…倉持。」
「…何?」
「はっきり言おう。俺とお前とでは正直お前の方が強い。」
「…それで?」
「だが、これだけは言わせて貰う。」

ーーお前には負けない。
「…こちらこそ。今回は思いっきりやるからね。」
「あぁ。」

「そして、緑谷。お前にも…オールマイトに目ぇかけられてるお前にも負けるつもりは無い。」
「…僕も負ける気は無いよ。僕も…本気で取りにいく…！」
「…あぁ。」

「んじゃ。俺も言わせて貰うぞもやし野郎。」
「…もやしって僕？」
「そうだ。俺はテメェもデクも半分野郎も全部追い抜いて一番になる。…俺がナンバーワンだ。」
「…そう。」

◇◆？
『お待たせしたぜぇ!!オーウディエンスアーンド！マスメェーイディア!!!』
『1年生の～入場だぁ!!!』

先ず入場するのは今回の目玉である。
1―Aの入場。
緑谷を先頭にして続々とA組が入場する。

『どうせあれだろ!!?こいつらを待ってたんだろぉ??ヴィランの襲撃を鋼の精神力で退けた希望の新星!!A組だぁ!!!』

「ひ、人がお、多いなぁ。」
「大勢の人の前で最大のパフォーマンスを発揮する…これもまたヒーローへの第一歩！」

「うっわぁ…こんなに持ち上げられると緊張するなぁ？」
「しねぇよ、むしろアガるわ…!!」
（…勝利には貪欲に。そして、優勝には全力に…!!）
『続いてぇ!!話題性にゃ劣るがこちらも実力者揃い!!ヒーロー科!!B組の入場だぁ!!』

続いて入場するはB組。
後に続く形で普通科、サポート科、経営科が入場する。

「俺らってA組の引き立て役だよなぁ・・」
「萎えるわぁ・・」

「・・・」
◇◆？
選手宣誓を司会するのは18禁ヒーローミッドナイト。
峯田をはじめとする助平な男子達はその悩殺的なコスチュームにメロメロになり叱責される。
「選手宣誓！代表、倉持管理!!」
「はい。」
彼が出てくると、他クラスの動揺が走る。
というのも、クラス視察（宣戦布告してきた者もいたが）に行った際にあんな生徒は見なかったからだ。
後、爆豪の挑発から彼がトップだと勘違いしていた人もいたらしい。
所々から
（お前じゃないんかい…）
という視線が爆豪に届いていた。
まぁ原因は彼の影の薄さと他クラスが集まった際には窓から帰っていたからというのが該当するのだろう。

倉持が壇上に立つ。そして。
「宣誓。僕が一番になります。」
堂々と優勝宣言をかました。
「「……はぁあ!!!??」」
動揺。そして彼に対する大ブーイングが始まる。
調子に乗るなやら、てめえ何様だなどなど。
特にA組は彼がこんな言葉を吐くとは思わず唖然としている。
…轟、爆豪は上等だと言わんばかりの好戦的な笑みを浮かべていたが。
ブーイングは会場全てに広がりどんどんエスカレート。
…だが。
「黙って。」

その一言で、全ての人が停止した。
台本がある訳でも無し。
それなのになぜ人が停止したのか。
…それはたった1人の圧に圧倒されたからに他ならない。
「今、ブーイングした人達。なんで君達はそんな言葉が吐けるの？君達は自分達は踏み台だのなんだのって言ってた癖に。」
その言葉に一部が顔を背ける。
「…まぁ、良いや。僕がこんなビックマウスな言葉を吐いたのは慢心でも何でもない。確信だ。弱気な君達なんかに負ける訳ないと思ったからだ。」
「…悔しいでしょ？こんな奴にどうこう言われたくないでしょ？」
「なら、立ち上がりなよ。君達だって踏み台じゃない。れっきとした僕のライバルだ。僕はそんなライバル達を乗り越えた先が真のヒーローだと思ってる。」
…彼等の目に僅かな火が灯る。
「だから、言おう。」

「君達もそして僕達もヒーローだ。そこに区別はない。」
「ヒーロー科がなんだ？普通科、サポート科、経営科？関係ない。僕は平等に全てを乗り越えて一番になる!!」
そう叫ぶと彼はいつのまにか持っていた白黒の勾玉のペンダントを上に投げる。
そしてペンダントが発光。中から白い鯉と黒い鯉が現れ。
２匹の鯉はそのままゆっくりと互いに近づき一つの玉のようになり。

…白黒の巨大な龍が現れる。

会場の上空を埋め尽くすほどの大きさ。背中には巨大なヒレ、目は緑に輝いている。
ソレは倉持の近くに顔を寄せるとそのまま獰猛な笑みを浮かべる。
倉持はその龍の顔を撫で柔らかな笑みでこう告げる。
今、驚愕に満ちている全生徒と戦い、倒す覚悟を決めたから。
…愛しき家族に己の勇姿と感謝を伝える為に。

「…かかってこい。これが僕の宣戦布告だ。」

第一種目。

驚天動地の宣戦布告から数分。
会場内では様々な思惑が蔓延っていた。
1年生の中においては闘志に燃える者。対策を必死に考える者。
或いは直感的に感じた圧倒的な龍の強大さに心が沈んでいる者などだ。
因みに最も近くにいたミッドナイトは腰を抜かしていた。
観客内でもまた最も注目していた脳無を倒した生徒
が想像以上に大混乱を与えることに興奮する者。
個性の考察を始める者。或いは掲示板に先程のを投稿し実況にはしるもの。
…テレビカメラを取りながら泣いている女性。
またヒーロー内ではこの降って湧いた優秀な人材を必死に裁定していた。
但しオールマイトだけは
(緑谷少年……ファイトだ!!)
と汗を流しながら愛弟子の活躍を祈っていた。

さて、何故こんなにも会場内が混沌としているのか。
それは先程の陰陽龍の能力にある。
龍の能力は『感情の暴走』
対象の最も大きい感情を爆発的に上昇させるのが龍のチカラ。
しかし、龍は他ならぬ『主』の命を受け顕現した身。
余計な事はしないでおこうとそのチカラを最低限とした。
結果。
感受性が高い者のみがその効果をもろに食らい。
それ以外には少々感情的になるのみで終わった。
よって、多少の遅れはあったものの大きな問題は無く生徒達は第一種目へとその足を向けるのだった。

◇◆？

「んん!!さて諸君。落ち着いたかしら？」

いち早く復帰したミッドナイトが生徒達に確認を取る。

倉持(原因)はさっさと舞台から降りて準備運動をしていた。

「おーけー!!さて先ずはここで多くの者がティアドリンク!!今年の第一種目は…」

ミッドナイトの背後に出現した巨大な映像に映されたルーレットが回り始め。

「これっ!!」

障害物競走を映した状態でストップ。

同時にミッドナイトが叫ぶ。

「障害物競走!!」

緊張する生徒達は唾を飲み込む。

「この競技は全クラス全員参加のレースよ!!」

「コースはこのスタジアムの外周約４キロ!!」

「我が校は自由さが売り文句!!コースさえ守ればナニをしたって構わないわ!!」

舌舐めずりをしながらルール無用を堂々と宣言。

会場から歓声が湧く。

同時に出発ゲートのランプが点火する。

「さあさあ!!位置につきまくりなさい!!」

◇◆？

全員が位置についたのを確認し今か今かとランプが消えていくのを待つ。

ここで倉持は隣にいる緑谷に小声で話しかける。

「…ねえ、オールマイトの後継者。」

「っ!?な、何のことかな?」
「誤魔化さなくていい、父の事はもう父から聞いてある。だから安心して。」
(そうだ、確かヴィラン襲撃の時に…)
『ーー息子の方は』
(じゃあ倉持くんがオールマイトが話していた…なら、わかっていても不思議じゃない。)
「…わかった。それで、どうしたの?」
「唐突だけど、君と僕。どっちが兄かな?」
「…ええ!?ど、どうしてそんな事に?」
「…?僕は彼の息子で父は君を息子の様だと話していた。つまり僕たちは兄弟。違う?」
(オールマイトが…僕を?う、嬉しいな。)
「き、君はどっちだと思うの?」
「…多分僕が弟。」
「そ、そっか。」
「だから、弟として忠告。…最初に気をつけて。」

◇◆?

ランプが減っていく。
3、2、1。
「スタート!!」
そのミッドナイトの宣言で生徒達は走り出す。が。
『さぁ順次実況していくぜぇ!!解説アーユーレディ!!?イレイザー!?』
『…あぁ。』
『早速だがイレイザー!!今の見所は!!』
『…まぁ、最初のスタートだろうな。』
そう。第一障害物までのゲートは…狭い。
その上、総勢100を優に超える人がそのゲートに密集する。
当然、1人の余裕もなくギッチギチ。

ゲート内では怒号が飛び交っていた。
さて、そんな中倉持はというと。
（なんで、皆正直に走ってるんだろう？）
この男、ゲートの側面の壁を蹴りながら進んでいる。
下がダメなら上から当たり前の常套手段を個性を使わずに悠々と1位へ躍りでて、ゲートを通過。
元赤い配管工もびっくりの技である。
（最初のふるいから奴に離されるわけにいかないな…！）
その後ろ、倉持に気付いた轟が右を使い後方を冷却。
多くの生徒が足を止めざるを得なくなるが。
「まちやがれぇ!!半分野郎にモヤシ野郎が!!」
「甘いわ轟さん!!」
「ふぅーーー!!」

空中への浮遊を可能とする爆豪、八百万、青山が先んじ、その後ろを緑谷。
他のA組が通過していく。

（思ったより速い。少しギアを上げよう。…ん？）
独走状態の倉持が目にしたもの。
『ターゲット…補足!!』
それは入学試験に目にした仮想ヴィランの軍隊。
『さぁーー!!現在1位が見ているのは手始めの第一関門！ロボ・インフェルノ!!今回は入試より強えぞ!!』
実況のプレゼント・マイクが倉持が遭遇したと同時に高々に公開する。
（…多いな。ちょっと早いけど使う。準備よろしく。）
そう彼は内部のある人物に話しかける。
（承知。我ら爪《・》の力存分にお使いあれ。我が契約者よ。）

◇♦？

『おおっと!!ここで一位の倉持に変化だぁ!!』
『なんだあれは…爪?』

「…なんだあれは。」

実況のプレゼント・マイクはその姿に驚嘆を覚え。
解説のイレイザー、彼の姿が視認できる様になった轟はその拳についている
爪と顔についている仮面に目を向ける。

その頭、腕には緑、青、橙の薬品が付いており腕には異形の鉤爪が付いている。
倉持と思われるソレは肩に触れる。
すると橙の液体が彼に注入されていき、それと同時に少し痙攣。
その後クラウチングスタートの体勢を取る。
急に停止した事に轟は少々驚くが好機を逃さんとロボットを凍らせようとして

「よーい…どん。」

その後ろにいた爆豪や八百万と共に前方から、つまり倉持から発生したソニックブームに吹っ飛ばされた。
同時に会場を映していたカメラロボットもその風圧に吹っ飛ばされ一時競技が見れなくなる。
『な、なんだぁーー!!?倉持の姿が消えたぞ!!?どういう事ダァ解説!?』
『恐らくだがあの武装の力で脚力を極限に上昇し…マッハのスピードでかけていったのだろう。』
『マッハァ!!?こいつはシヴィーー!!?』

「くっ!!」
「うぉあ!!?」
「きゃあ!!」
（出鱈目め…!!だが！）
少々吹っ飛ばれされ差を無くされた轟。
だが、そこで焦る轟では無い。
吹っ飛ばされている間に迫り来る他の生徒、少し背後にいる2人を一瞬視認。
即座に体勢を立て直し先程、行おうした行為に妨害を加えた上で
「悪りぃが…こんなとこで立ち待ってる訳にはいかねぇんだ。…クソ親父が見てるからな。」
一体のロボをあえて中途半端な体勢にして凍結。
そのまま、妨害へ繋げ
1位たる倉持を追わんとする。

その背後では。
「だりゃーー!!!」
「A組のヤツらムカつく奴ばかりだなぁーー!!」

「「俺じゃ無かったら死んでたぞ!!」」
轟の妨害によって潰されていた切島、そして鉄哲が『個性』によって脱出。
そのまま前に走り出し。
「先ぃいかれてたまるかよ!!」
爆豪が上からロボットを回避。
「爆豪！お前、正面突破しそうな顔してそんな事するなんてな!!」
「便乗させて貰うぞ!!」
それに乗っかる形で瀬呂、常闇が爆豪の後ろにつく。
その背後では、ＵＳＪの経験を経て成長したＡ組が一歩先を行く形で追尾していく。

『おおーー!!倉持、轟を皮切りに次々と突破していくＡ組!!』
『やはり、ＵＳＪでの体験が生きているな。上の世界を肌で感じ取った事で恐怖を克服できている。その点ではこの競技はＡ組が有利だろう。』
『さてさて!!現在１位をブッチギリの倉持ボーイはぁ!!?』

◇◆?

「次はこれ?関係ないね。」
もう既に第二関門の手前に位置している倉持。
その目前にあるのは深い谷にまばらに設置された足場。
普通の人間なら立ち止まっていくのだろう。
だが、今の彼は違う。
『おいおいおい!!?まさかあいつ!!?』
『そのまま落ちる気か…!!』
容赦無く、その崖下に飛び込んでいく。
そして。
「…白夜。」
(汝の願い。しかと聞き届けたぞ我が盟友(とも)よ。)
『ぶっははは!!に、似合わねぇー!!!だがそんなんありか!!?空を…』
爪の装備の背中から白き両翼が生え、空中を飛ぶ。
速度は若干落ちるものの、そのままコースを無視してクリアする。
そのまま翼を解除、着地する。

『飛びやがったぁーー!!そのまま最終コーナーへ着地だぁーー!!圧倒的!!やはりビックマウスは伊達じゃねぇーー!!』
『やはり、底が知れんな奴の個性は。』
『最終関門!!Ｄａｎｇｅｒ　Ｚｏｎｅに突入!!待ち受けるは無数の地雷原!!威力はそこそこだがぁ?音と見た目は派手だからぁ?失禁必至だぜぇぇぇぇ!!』
『人によるだろう。だが、翼を解除したのは何故だ?何か策があるの

か？』

「地雷…やっぱり僕には関係ない。それじゃ、最後の手札。頼むよ。」

倉持はある要請を出し今度は武装を解除。

軽快なリズムで地雷を悠々と回避しながらゴールに迫る。

そして、その真上で。

『おおっとぉ!!ありゃなんだぁーー!!!?』

◇◆？

（くそっ、あいつはもうそこまでいったのか。だがまだチャンスはある!!）

「逃すかぁーー!!!」

（スロースターターか。追いつくのがさっきよりも早い！）

『二位を轟と爆豪が争う!!両者横並びだぁ!!これはアチィィィィ!!』

その頃、第二関門の中間にいる轟、そして爆豪。

「どけぇ!!半分野郎!!俺はあのモヤシをぶっ潰す!!」

「抜かせるかよ…!!」

轟が爆豪の飛行を冷却で妨害。

爆豪はそれを爆破で迎撃。

そうして、彼らは最終関門に到達する。

『ここでぇ!!1位からの妨害だぁあ!!なんだあの鳥はぁ!!?』

彼らが目にしたものは無数の地雷原を潜り抜け今正にゴールゲートを潜ろうとする倉持。

地面の無数の地雷原。

そして、上空に浮かび燃え盛る『火の鳥』。

「焼き鳥がぁ!!邪魔すんじゃねぇ!!」

爆豪は爆速ターボで低空を加速。

しかし。

『ーーー!!!』

その爆豪の前方の地雷を火の鳥が突っ込む。

そして誘爆。
「ちぃいい!!」
片や慎重にしかし堅実に潜り抜ける轟。
火の鳥が誘爆した先をつき爆豪との差をつけようとするが
「なぁめんなぁ!!!!」
その爆風をそのまま利用する形で爆豪が更に加速。
差は完全に縮まり、再びの硬直戦。
火の鳥はその2人に興味を無くし後方の遊び相手に視線を向ける。
だが、その底を緑の鉄板が突っ切った。

◊♦?
その頃。
『さぁ!!ここでゴールに入ったのはぁ!!圧倒的に他の追随を許さない!!ビックマウスの超新星!!倉持ぃいいい!!管理だぁぁぁ!!』
「ふぅ…!!ごほっ!ごふっ!!」
(やっぱり薬の副作用は怖いな。次は控えよう。)
ゴールした倉持は橙の薬の弊害に陥っていた。
体は急速に痛みを訴え内臓機能も若干イかれている。
だが、手にした一位はそれを差し引いても余りある成績だ。
息を整え、第2位の人を待つ。
(さぁ、火の鳥の遊びを潜り抜けてくるのは一体誰なんだろう?…ん?)
「倉持か…どう売り出していけると思う?」
「そうだな…あの鳥といい、翼にあの武具!!売り出せる要素も多い。」
「個性もまだまだ隠しているものもありそうだ。次も期待せねば。」
「うんうん。」
(…いい事思いついた。ねぇ女王ちゃん。)
(なぁに?あ!かっこよかったわよ管理!!)
(…ありがとう。でね、アイドル…やってみない?)
(…へ?)

◇◆？

「うぉりやぁぁぁ!!」

『おっとぉ!!A組緑谷!!あの鳥の隙をついて地雷の爆風で加速!!なんとぉ!!2位に一気にエントリーだぁ!!!』

「…俺の前に立つんじゃねぇよ!!クソデクがぁ!!!」

更に怒りで爆豪も加速。

轟も後ろに続く形で地面を氷結。後を追う。

(後続に道作っちまうが…今は仕方ねぇ!!)

その道も火の鳥が全て解凍していく上に地雷を誘爆するので更なる混乱が起きている事を轟は気づかない。

少しの間、2位を奪った緑屋だったが徐々に失速。

それを見逃さず、爆豪、轟が追いつく。

(…まだだ!!抜けないなら…)

「抜かれなきゃいいんだぁぁぁぁ!!!」

そのロボの破片を地雷に向かって叩きつけ、緑谷はその爆風で更に前へと前進。ゴールへと近づく。

爆豪、轟は爆風をもろに食らったものの即座に緑谷の後を追う。

そして。

『白熱した2位争いここに決着ぅ!!制したのは意外も意外!!緑谷出久だぁぁぁ!!!』

程なくして轟、爆豪がゴールを潜り抜け。

続々とゴールするものが現れ、ここに第一種目は幕となった。

「それじゃあ結果をご覧なさい!!」

1位、倉持　管理
2位、緑谷　出久
3位、轟　焦凍
4位、爆豪　勝己
5位、塩崎　茨

次の舞台の幕が上がる。

第二種目、結託。

第二種目は騎馬戦。
ルールは単純かつ簡単。
４人１組でチームもとい騎馬を組み、騎手の鉢巻を奪い合う。

但し、既存の騎馬戦と違うのは騎馬が崩れようとも鉢巻を取られようとも競技の続行が可能な点だ。
騎馬は崩れても１０秒の猶予が与えられる。
だがその時間を超過すれば失格となる。
鉢巻は取られても取り返したり、他の人の鉢巻を取る事でポイントが獲得できる。
勿論、終了した時点で鉢巻が１枚もない場合は０ポイント。
決勝に進出する可能性は最早ないに等しいだろう。
そして１位の倉持に与えられるポイントは
…１０，０００，０００ポイント。正に破格の数字となっている。

下位の生徒にとっては正に千載一遇のチャンス。
緑谷を始めとする上位勢もまた周りと差をつける為に狙いをつける価値が十分にあるポイントだ。
その上位勢の中の１人爆豪勝己は現在、人生の岐路といわんばかりに悩んでいた。
（くそがぁ…俺はこんなもんじゃねぇだろうが爆豪勝己!!もやしにも半分にも……デクにも!!!負けてんじゃねぇぞ!!クソッタレが!!!）
（だが、どうする。…このまんまじゃ頂点なんざ口が裂けても言えやしねぇ。それどころか決勝にすら進出も難しくなってくるかもしれねぇ。）
（そして、この体育祭で最大の壁が…あのもやしだ。）
（あいつを超えなきゃ俺は１番にはなれねぇ。）
爆豪は自分でも驚く程に冷静に自分の現状を考察する。
自分への怒り。改めて感じた倉持との差。そして今まで自分が優

位だと思っていた
…護るべき幼馴染(デク)にすら越されてしまった自分自身への失望とその幼馴染が自分よりも先にいっているという怒り。
あらゆる感情、考えが混ざり合い偶然かつ奇跡的な確率で爆豪は今までにない冷静さを獲得していた。
そして、何よりも勝利への貪欲なる渇望は彼自身の予想すら超えたある結論を生み出した。

(…俺は1番にならなきゃならねぇ、俺こそが最強だとこの場で証明しなきゃならねぇ。だが、もやしを超えるには情報が必要だ。…なら、くそっ!!今回だけだ!!決勝であいつに勝ちゃあいいんだ!!)
…感情的な面が強調されやすいが彼の本質は何処までも成長する天才性にある。
勝利の為にはあらゆるものを即座に取り込める器を持ち、直ぐに実践に移せる行動性を持っている。
そんな彼が下した結論は。

「…もやし野郎。俺と組みやがれ。」
「…いいよ。」

「…え?」

…倉持(クソもやし)との共闘だった。

◊♦?
この言葉を聞いたA組は正に驚天動地。
特に緑谷の驚愕は計り知れない。
唯我独尊を体現している爆豪が他人と手を組む、という事自体が有り得ない話。
その爆豪が組む。
そこに何かしらの作戦がある事は確かだろうと察知するのは幼馴

染の感というべきか。
緑谷は組んでくれた麗日と再び作戦を練り直す。
そして問題の倉持の騎馬のメンバーといえば。
「…瀬呂くん。組んでくれないかな？」
「へ？俺でいいのか？」
「うん、お願いしてもいいかな。」
「…おっけー！よろしくな！」
「じゃあ後は……」
「そこの1位のあなた!!私と組みましょう!!そうしましょう!!」
「…なんで？」
「おっと！自己紹介が遅れました！私サポート科の発目です！以後お見知り置きを！」
「…いや、そうじゃないよ。聞きたいのはなんで僕と組みたいか。いっておくけど、僕本気で勝ちにいってるからね。相応の理由が欲しいかな。」
「はっきり言いましょう！私！貴方を利用したいのです！1番の貴方の立場を踏み台に私のドッ可愛いベイビー達を出来るだけ大きな企業に宣伝したいのです!!」
「……そっか。因みにそのベイビー？はどんなの？」
「…おい、もやし。俺は1番になる為にてめぇと組んでるってこと忘れてねぇだろうな？」
「わかってる。でもこの子の上昇思考はある意味で使える。後は彼女の発明品で決めるよ。」
「……ちっ。」

「おっ！見たいですかぁ～？では私と組むという事で？」
「…瀬戸くん。いいかな？」
「俺は倉持の判断に従うぜ！リーダーはお前だからな！」
「…爆豪くん。」
「…好きにしろ。」

「うん。ようこそ発目さん。僕は君を歓迎するよ。」
「流石！1位様はお目が高い！是非利用させて頂きますね！では、サポートアイテムはこちら!!」
「うん。じゃあ…作戦は…。」

◇◆？

「15分経ったわ。それじゃあいよいよスタートよ！」
『さぁ上げてけ鬨の声!!雄叫びあげなきゃつまらねぇ!!血で血を洗う雄英の合戦がいよいよ始まるぜぇ!!　お前ら組み終わったな!?準備がまだでも待たねぇぞ!!?
いくぜ!!残虐バトルロワイヤル、カウントダウン!!レディ!!』

主審のミッドナイトが時間切れを知らせ、それを聞いたプレゼント・マイクが開始の狼煙を上げる。
『へぇ……考えたな。』
そして、イレイザーヘッドは何かに気づき感嘆の声を上げる。

観客の声でカウントが始まる。
果たして、1位のポイントは誰にその首を垂れるのか。
はたまた再び、倉持が圧倒的な力で捩じ伏せるのか。
いよいよ、第二種目。
様々な思惑が交差する中、生徒の命運を分けた騎馬戦が始まる。

「3！」

「2！」

「1!!」

ーースタート!!

第二種目、決戦。

競技開始と同時に倉持チームが動く。
「うらぁ!!」
爆豪が地面を爆破。その地面から莫大な砂埃が発生し倉持チームの姿は見えなくなる。
「さぁー!行きますよー!私のドッ可愛いベイビー!!」
「……それじゃ、よろしくね。」
「おう!」

さて、彼らのそんな声が僅かに聞こえた後。
砂埃が晴れた先には倉持はおらず、代わりに騎馬の前方には大きなブリキがあり、騎馬のメンバーには妙な装備があった。
爆豪、瀬呂には腕に、発目にはほぼ全身と言っていいほどの重装備。
『おおっとぉ!!?倉持ボーイの姿がきえたぞぉ!??一体どこに行ってしまったんだぁ!?』

突然の1位のポイント失踪に驚く生徒達ではあったが先ずはその他を優先する事に決めたようだ。
轟チームもまた一時他のチームのポイントを稼ごうと動かんとする。
だが。
『見てみろ。』
「ふっ……!!」
突然、轟の真横に黄金のゲートが出現。
そこから純白の翼を生やした倉持が強襲する。
「なっ……くっ!!」
咄嗟に氷の壁を展開し、倉持の手を防ぐ。
「っ。」
「そこだっ……!!」
手を凍らされかけ倉持が怯んだ一瞬をつき轟は鉢巻を取らんと手

を伸ばす。
「撤退。」
しかし、倉持は首を曲げて軽々と回避。先ほどのゲートからさっさと逃走する。
そのついでに乱戦状態のチームからこっそりと鉢巻を盗むのを忘れず、自身の騎馬へとゲートを開いて戻っていった。

『オイオイ!!いつの間にそこにいたんだぁ!?轟チームへと奇襲してから……何したんだ!?』
『簡単だ、まず、奴の右腕につけているのはワープゲートを開ける特殊な武器。そんでもって砂埃を爆豪が起こしてた瞬間にそのゲートを真横に開いて奇襲。だが、それはさっき見た通り失敗。即座に退避して他のチームのポイントを奪って帰ってきたって訳だな。』
『ヒュー!1000万に飽き足らずいきなり他のポイントを奪いにいく!貪欲すぎるぜ倉持ボーイ!!』
『だが、下手したら1000万を一気に失う行為だったぞ。』
『ってか、騎馬から離れてたよなぁ!?あれってありなのかぁ!?』

「テクニカルだからアリ!!地面に足がついた瞬間にアウトだったけどね。」

倉持の攻めの姿勢に驚愕する実況席。改めて先程の行動が違反だったかを審判のミッドナイトに聞くが反則判定は無し。
当然、攻撃すればアウトだったが特にそのような行動も無し。
競技は変わらず進行する。

「おい、きっちり取ってきたのかもやし野郎。」
「別の人のなら。……ここからは防衛戦。自由に妨害していって。」
「上等、全員ぶっ飛ばしてやるよ……!!」
「発目さん、設置は?」
「おっけーです!」

「瀬呂くん。」
「おう！作戦通りだな！」
「お願い。木こりさん。」
『……。』

頷く木こり。
それを確認した倉持は翼を解除し、騎馬の上で指示を出す。
爆豪、そして『暖かい心の木こり』が迎撃。
発目はサポート発明で多数の罠、そして迎撃役の援護。
瀬呂は鉢巻を取りに来た大将の捕縛。
現在、前方には木こりが仁王立ちし、騎馬が見えなくなっており正に鉄壁の守りを固めていた。
当然１位の鉢巻を取ろうとする他のチームは木こりの防衛していない裏側に攻めいろうとするが。
「うわぁ!?!!なんだぁ!?!!爆発したぞ!?!!」
「足がネバネバして……取れねぇ!!」
「ふふふＦＦＦ……!!!!かかりましたね！これが私のドッ可愛いベイビーですよ!!」
「じゃあ、鉢巻貰ってくね。」

後方の地面には発目が設置した踏むと爆発し粘着する物体が足を固定する地雷があり身動きが取れなくなる。
そうなるチームは大将がガラ空きになり倉持が奪っていく。
かといって前方の木こりは硬い守りで他の侵入を許さず、その剛腕による風圧で騎馬を崩していく。
だが、木こり自体はスピードが遅く複数には対応しきれない。
そこを補うのが火力のある爆豪。
爆風によって騎馬を崩し、また発目の特殊ローラーによって爆風での騎馬操作が可能とする彼、そして敵の拘束が可能な瀬呂がテープによって敵大将の攻撃を拘束する。

倉持は指令に徹し、敵の進行方向や攻撃から次の行動を予測し爆豪以外の人員に指示を出していく。
勿論、ちょくちょくワープで騎馬から消えては。
「ふっ……!!」
「うわぁ!?!!」
「デクくん!!」
「……あれ。」

2位の緑谷や。

「はぁ……!」
「くっ!!」
「轟くん!!」
「そこですわ!!」
「……むぅ。」
3位の轟に対して突発的に攻め込んでいった。
10分経過、状況は倉持チームが場を支配。ここまでで1番無傷でこの戦場を切り抜けている。
ここで、轟チームが勝負に出る。
「このまま、あいつに翻弄され続けるのは俺たちにとって悪手だ。攻めに行くぞ。」
「けどよぉ!あのでっけぇブリキはどうすんだよ!?」
「私の創造でもあの大きさを押さえつけるネットは今は作れませんわ……。」
「いや、僕に策がある!」
「飯田……?」
「見た限り、あのブリキは速度が遅い!!ならそこに勝機はある!!」
「……何かあるんだな?」
「あぁ。轟君…君が倉持君に勝ちたいように僕も勝ちたい人がいる。だからこそ、僕は君とチームを組んだんだ。気持ちは君と同じだ!負けなくは無い!だからこそトップを獲る!!だがこの技を使えば僕は

使い物にならなくなる。だから獲ってくれよ、１０００万!!」
「　おい、何を……!?」
倉持チームの１０００万を奪取するために、
飯田は自らの奥の手を出す。
自らのチームを勝利へと導く為に。
「しっかりと捕まっていろ!!――――トルクオーバー…」

脹脛のエンジンが爆発するように動き出す。
「――――『レシプロバースト』!!」
トルクの回転数を無理やり上げて、爆発的な加速を生む。
しかし、反動でしばらくの間エンストしてしまう実質的な彼の最後の手段でありクラスメイトには教えていない飯田の裏技。
この場にいる人の目では追えないほどの速さをもって倉持チームに迫る。
轟は最初こそその速度に体が追いつかなかったがそこは流石の天才性。
すぐに対応し、倉持の頭に手を伸ばす。
木こりはそれに気づくがその鈍重さ故に掴む事が出来ず、爆豪は目では追う事ができても体の反応が遅れる。
つまりは実質的な王手のはずだった。
……倉持という男が普通であったなら。

「よいしょ。」

彼の動体視力は、ゲブラーの全方面対応の高速訓練によって普通の人間よりも格段に鍛え上がっている。
といっても飯田のスピードもまた倉持をしてほんの一瞬だけ対応が遅れた。
だが、一瞬だけだ。
すぐに速度と到達時間を把握。
体を最低限に動かして回避し、轟の鉢巻を取ろうとするが流石にそ

こまでは出来ず、失敗したと判断した轟が咄嗟に繰り出した氷壁に手を阻まれて終わったのである。
「轟くん！……１０００万は!?」
「わりぃ、失敗した。」
「そんな！あの速度に対応したというのか!?倉持くん!!」
「申し訳ないけど……師匠よりは遅いよ。」
『おいおい!!あの速さに対応したって!?こいつはマジでシヴィーーー!!』
『あの時にも感じたが……やはりあいつは他と一線を画しているな。』
『残り時間も僅か!!このまま１０００万はあのままかぁ!?』
『……いや。そうでもねぇらしい。』
残り時間は１分。
だが、ここで倉持達に最大の窮地が訪れる。
「……氷壁で退路を塞がれた。爆豪くん、爆破よろしく。」
「……いや、そんな暇はねぇみてぇだぞ。」
「えーー!?!!なんでこんなにたくさんの人たちがこっちに向かってるんですか!!?ベイビー達でも抑えきれませんよ!?」
「木こりさん……でも難しいか。」
「どうする倉持!!テープでこの数は無理だぞ!!?」
倉持達が陣取っていたのは丁度フィールドの中央。
後方に氷壁、前方にはＡ．Ｂ組のチームが続々と鉢巻を取らんと進撃してくる。
仮に木こりが抑えても別方向から攻められては意味がない。
正に八方塞がり。しかも取れる手段を完全に縛られた。
『おおっと!!?轟の氷壁で退路を断たれた隙をついて好機と言わんばかりにＡ、Ｂのチームが一斉に攻め入ってるぞ!!?残り時間も少なくなって一斉に勝負に出たのかぁ!!?』
『しかも、丁度囲むように回ったか。実に合理的だ。だとすればあい

つが取れる行動はひとつ。』

「……誘われた。爆豪くんもう一回煙幕。」

「……わかってんのか？」

「当然。」

「……ちっ。負けんじゃねぇぞ。うおらぁ!!食らえやモブども!!」

爆豪が再び煙幕をはる。

と同時に倉持は翼を展開しゲートに入り上空に逃走する。

そして。

「それは……」

「読んでいたよ!!」

ここに来て、麗日と常闇によって飛んできた緑谷と八百万の大砲によって飛んできた轟が強襲。

ここで初めて倉持の額に汗が落ちる。

想定内とはいえ、２人同時に相手するのは空中では部が悪い。

更に倉持は嫌な予感が体を貫いた。

「はぁあああ!!!」

先ずは緑谷。彼はそのまま飛ばされた勢いのまま手を出す。

これは翼によって衝撃を全てそこに持っていき、横へと回避する。

だがここで問題が生じる。

「うわぁぁぁ!!!」

「っ。まずい。」

落下していく緑谷。それを見た倉持は翼を広げて救援と向かう。

しかし。

「届け……!!!」

ここで嫌な予感が的中。

轟の手が偶然右の翼を凍結する。そしてそのまま翼を掴んで倉持へと迫る。

「……まずい。」
当然、片翼が凍結した事で倉持も轟また自由落下を始める。
仕方ないので翼を解除。
防衛は二の次とし高速で落下して緑谷を先ず確保し、彼の騎馬の座標を把握。
「持ってて…!!」
「え？うわぁああ!!」
そのままゲートで彼の騎馬の真上に転送するようにして黄金狂をぶん投げる。
無事、騎馬に受け止められたようだ。
「次……!!」
再び翼を展開。今度は轟を抱きかかえる形で捕まえる。
両腕が捕まった上、離せば死を招きかねない状況のため轟も特に抵抗はしなかった。
「……今離したら死ぬからね。」
「……そうだな。」
そのまま、轟を騎馬まで運び、自分もまた騎馬へ着地しここで試合終了。
順位はというと。
1位は倉持チーム。
2位は轟チーム。
3位は緑谷チーム。
4位は以外にも心操チーム。
どうやら、あの時彼のチームはこちらに攻めいらずその裏で得点を稼いでいたようだ。
ともあれ、この4チームのメンバー達が最終種目へと進出。
いよいよ、雄英体育祭もフィナーレへと近づくのだった。
決戦が始まる。

束の間の馬鹿騒ぎ。

騎馬戦が終わり、次の決勝の準備の為昼休憩となる。
その後は応援合戦があってからいよいよ決勝だ。
既に決勝内容は決まっており、今現在『セメントス』がその会場の設営を行なっている。
そんな中、一時的な共闘を終えた倉持はというと。
決勝進出祝いという事でチーム同士で昼食を取ろうという瀬呂からの誘いに乗って食べていたのだが。

「なんで俺がこいつと食わなきゃいけねぇんだよ!!?」
「はむはむ……ん、おいし。」
「てめぇもてめぇで呑気に食ってんじゃねぇ!!」
「まぁまぁ……落ち着けって爆豪。このチームで決勝まで行けたんだからさ、仲良くしようぜ!!」
「うるせぇ、テープ野郎!!」
「ん、そこおかしいかも。」
「んん!!?本当ですね！これで私のドッ可愛いベイビー達が一層華々しくなりますよーー!!」
「うるせぇ!!静かに食いやがれメカ女!!」
「あ、後ここはどうです？」
「ここは……先ず素材から変えた方が良いかも。後は……」
「なるほど！」
「無視してんじゃねぇ!!」
「……疲れるぜ。」
屈辱の共闘を味わった爆豪にとっては傷口に塩を塗られたのと同じ行為に等しい。
因みに爆豪はどうあがいても誘いには乗らなさそうだったので瀬呂が爆豪の食べている場所を聞き込みしそこにあらかじめ陣取っていたのである。
これはひどい。

が、蓋を開ければご覧の有様。
瀬呂はよくこんなチームで決勝行けたな……と1人哀愁を漂わせていたのであった。

◊♦？

さて、休憩が開ける前峰田(勇)と上鳴(者)がこんな事を言い出した。
曰く。
ーー応援合戦の間の女子の服装はチア固定らしいと。
倉持は思った。
ーーはて？そんなルールはあっただろうか。

そんな事を考えてしおりを開けばそんなルールは実在しない。
ならば服装は自由なのか。
ルール上には何も書いていない。
ならばと彼は思った。

ーーそうだ、彼女たちにバックダンサーになって貰おう。
彼は第一種目で考えてある計画を実行する事にした。
勝利に貪欲となっている彼はポイントも何も無い遊びにすら全力。
よって、彼は彼女を派遣する事にしたのだった。

◊♦？

場所は変わって、女子更衣室。
そんな彼らの言葉を疑わない、純粋な八百万は他の人が来る前までにとせっせと全員用のチア服を創造するのに勤しんでいた。
そんな中、大きな音を立てて更衣室の扉が開けられる!!
「踊るわよ!!」
「……はい？」
現れたのは八百万の記憶に新しい倉持の個性の1人。
名前は……女王とか言ったか。

そんな彼女が何故この場に?どんな経緯で今の言葉を?
頭脳明晰な八百万の脳内は活発に活動を始めるがそんな事を天真爛漫である女王が許すはずもない。
「さてと、まだ貴女だけかしら?」
「え、ええ。」
「じゃあ、管理からの情報よ。応援合戦のチアにしなければならないって言ってたのはミネダとカミナリ……だったかしら?まぁいいわ。彼らの言葉、あれ嘘よ。」
「そ、そんな?!!」
「ええ、でも安心なさい!私がもっと可愛い衣装を与えてあげる!」
「い、いえあの。そうでしたら私達は普通に……」
「?」
「普通に踊る……というのは駄目なのでしょうか?」

ドウシテ?

「ひっ。」
「……あぁ、ごめんなさい。つい感情が昂ぶっちゃって。」
「い、いえ!も、問題ありませんわ。」
「ですが、どうしてかぐらいの理由は教えてくれませんか?」
「あ!!ご、ごめんなさい!そこを伝えるのをすっかり忘れていたわ!!私ったら。」
「あのね。例えばの話よ。もしも何か大規模な事件があったと仮定して貴女達ヒーローが先ず始めに与えるものって何かしら?」
「安心、でしょうか?」
「それも正解。だけど私はね、『笑顔』だと思ってるの。」
「笑顔……ですか。」
「そう!!ヒトが安心しているのが明確にわかるのは笑顔。何かに救われた時に人が見せるのも笑顔。そして、人が1番輝く時が笑顔!」

「ヒーローになるんだったら先ずは観客ぐらい歓喜の笑顔にさせなきゃこの先大変よ？」
「そ、そうでしょうか？」
「そうよ？先輩からのアドバイスってやつね。」
「先輩？」
「ええ……遠い昔のお話だけどね。ま、そんな事はどうでも良いの！さぁ貴女も愛と正義の元に笑顔を届けるわよ！それー!!」
「え、ちょっ、ちょっと待って……い。」

いやぁーーーーー!!!

◇◆？

数分後。

八百万の悲鳴を聞きつけ、やってきた女子達も皆女王の手によってそれぞれに合った至高の衣装へとその姿を変えていた。

「はえー。皆きれー。」
「麗日ちゃんの語彙力が!!?」
「ケロケロ、可愛いわ皆。」

麗日がこうなるのも無理は無い。
女王が施した魔法の効果は個人の体、スタイルに最適かつ最高の衣装を瞬時に生み出しさらに加えてメイクも行う正に乙女には嬉しい魔法。
これにより個人の魅力を最大限に引き出し、そして増幅させる。
当然の事だが女王もまた毎回においてこの魔法を使用している。
ようはフィルターなのだ。唯の人間たちでも発狂しないように、彼の周りに迷惑をかけないように。
彼女はいつだって彼の役に立ちたいのだ。

……例え、このお願いが自分にとってほんの少し恥ずかしいもので

あっても。

「それじゃ行くわよ!!」

「「はい!!」」

…ほんの少し洗脳効果があるのは乙女の秘密。というやつだ。

さて、後はもう語るまでもないだろう。

この後、応援合戦のレクレーションでは圧倒的パフォーマンスを発揮して観客の熱気を最高潮にし。

峰田と上鳴は予定とは少し違ったものの、これはこれでありと鼻の下を伸ばした。

…最後に最も注目を浴びた謎の少女はある方向を向きながら最高の笑顔でいたそうな。

決勝戦、その1。

華々しいパフォーマンスも終わり、ついに決勝。
決勝の内容は最後という事もあり1対1の決闘である。
厳正なくじ引きの結果、そして4位の心操チームから辞退者が現れ、それを青臭い話が大好きなミッドナイトの琴線に引っかかり辞退が認められ5位のチームから2人選抜した事によりトーナメントが決定した。

倉持の第1回戦は第5試合目。対戦相手はというと。
(最初の相手は・・・芦戸さんか。)
「お、最初が倉持かーー!よろしく!負けないからね!」
「ん、よろしく。」
(酸・・うん、ごめん。)
はっきり言って、『溶ける愛』で溶解というのは体験済みな倉持にとってはありがたいと思う相手であった。

◇♦?
1試合目は緑谷対心操。
緑谷は初手の内から心操の『個性』である洗脳に掛けられるものの右人差し指を強引にへし折る事でこれを解除。
当然、これ以外の攻撃を出来ない心操はそのまま場外へ。
勝者、緑谷出久。

2試合目は轟対瀬呂。
始めに瀬呂がテープで轟を拘束しようと掛かるが。
「悪ぃな。詰みだ。」
そのテープからそのまま両腕を凍結。
何も出来なくなった瀬呂は降参を選択。
勝者、轟焦凍。

３試合目は塩崎対上鳴。
塩崎の『個性』であるツタが上鳴に大量に押し寄せ、それをがむしゃらに放電によって退け続ける。
だが、上鳴の『個性』の電気には脳限界がある。そして何度も放電を続けた
上鳴は…
「…これは私の勝ちですわね。」
「うぇ～い。」
脳がショートし、アホと化した。
これを見た審判は試合続行を不可とみなし、降参扱いとした。
勝者、塩崎茨。

４試合目は飯田対発目。
開始前から発目が仕掛ける。

「あのぉ～もし良ければこれをつけて頂けませんか？」
「…すまない。そういったものはヒーロー科では原則禁止でな。付ける場合は申請しなければならないのだ。」
「…そう、ですか。いえ!!私はそれでも貴方にコレをつけて頂きたいのです!!」
「……何故。」
「私はここまで勝ち上がってきた身、しかしそれはこの装備あってのもの…ですが！ここまで来たからには私たちは対等であるべきなのです!!」
「ですので、私の信念のためにも。お願いします。」
そういって深々と頭を下げる発目。
「ぐぅ……この覚悟を無下にしてはヒーローとは言えない！わかった！君のその覚悟に僕も答えよう！」
その礼に感化された飯田は装着を宣言。
…その礼の下には悪どい笑顔が貼りついているのに気付かなかったのは幸運だったかもしれない。

そして、その旨を伝えた飯田。
ミッドナイトは青臭いのを理由にそれを許可。
……そして、戦闘(宣伝)が始まった。
飯田のつけたサポーターの性能、捕縛銃や自身につけた装備の回避性能を存分に宣伝。
さらに肩に装着されたバランサーの宣伝。その他ｅｔｃ……
戦闘行為？そんな事より宣伝だ！と言わんばかりに兎に角自身の発明品を褒めて褒めて褒めちぎる。

そうやって、宣伝をし終わった１０分後。彼女は満足そうな顔で

「あ、降参します。」
そう宣言するのだった。
「だ、騙されたぁーーー!!!」

その後、そんな飯田の叫びが木霊していったとさ。
因みに。
「……成果はどうだった？」
「ええ。もう思い残す事はありません。ふふふふふふ。」
「……そっか、良かったね。」
「はい!!」
こんな会話があったそうな。

◇◆？
『さて!!気を取り直して第５試合目!!』
『ここまでトップ街道真っしぐら！お前は一体何なんだ！倉持管理ー!!』
「……。」
その台詞の後、倉持が入場。その背後にはただならぬ闘気が迸っている。

『ヴァーサス!!そのツノから何かでんの？出ないの??芦戸三奈ーー!!』
「良し!!本気で行くよーー！」
芦戸が入場。満遍の笑みで宣言するがその頬には多少の汗が落ちていた。
『さあ！早速いってみようかぁーー!!スタート!!』

その宣言の瞬間。
「ふっ!!」
一足で芦戸の手前に接近。そのまま掌底の構えを取る。
「っ!!やばっ!!」
咄嗟に酸を前方に放出。
自身の酸の危険性から回避を選択すると考えての行動だったが。
「っ。」
倉持は左手を差し出し、酸を防御。
左手の皮膚、筋肉が溶け出し、骨が露出する。
「…えっ。」
「……終わり。」
その手を見て動きが止まった芦戸をそのまま右手の掌底で顎を叩く。
「……うぁ。」
脳が揺れた事により、芦戸はそのまま気絶。
「ふぅ。いてて。」

「芦戸さん失神！し、勝者!!倉持管理!!」
『おいおい!!手が溶けてんじゃねえかぁ!!』
『……なるほど、あえてやったのか。合理的だがそれは危険が高い。今後控えさせた方が良いな。』

芦戸が担架で運ばれ倉持が退場後。
「……。」

倉持は左手に『回復弾』を発砲。
グジュグジュという音を立てながら皮膚と筋肉が元に戻って行く。
倉持はそれを確認した後さっさと1―Aが座っている場所へ戻っていった。

6試合目は八百万対常闇。
洞察力に優れる八百万ではあったが今回はそれが仇となる。
深読みや対策を練っている間に、常闇の黒影（ダークシャドウ）に創造した盾に集中攻撃され場内から弾き出され場外へ。
「そ、んな。何も、何も出来ずに……!!」
何もさせず、短期勝負を挑んだ常闇がこの勝負を制した。
勝者、常闇踏影。

第7試合は『個性』がだだ被りの2人である切島対鉄哲。
当然、硬化という性質上試合内容はご察しの通り。
「うおらぁ!!」
「ぐぅ……効いてねぇぞぉ!!」
「がぁ……こっちも効いてねぇぞぉ!!」
殴って、耐えて、殴って、耐える。
文字通りの殴り合い、同時に根性比べである。
個性が切れればその時点でどちらかの勝ち。
殴って殴って殴って。
そして。
「「負けるかぁーーー!!!」」
クロスカウンター。ダウン。
制したのは。

「うぉ…ら。ど、どうだぁ……こっちは同時じゃ、ねぇぞ。」
「鉄哲くんダウン!!勝者！切島くん!!」

勝者、切島鋭児郎。
その姿は多くのヒーローから絶賛を受けたという。
そして、第８試合。
麗日対爆豪。
互いの間合いに入ればその時点で勝利が確定するこの試合。
先に仕掛けるのは麗日。
狙いは最初に必ず爆豪が繰り出す右腕の大振り。
そこだけが、明確に攻撃手段がわかる唯一の手。そこを麗日は狙う。
狙いは正しい。普段から他人を見下している彼は己の一手を疑う筈も無い。
……麗日が見誤ったのは爆豪が普段の爆豪である、という点。
今の爆豪は成長している。倉持という大敵を前に慢心など以ての外、ましてやそんな奴が見ている前で自らの欠点など晒す筈も無い。
話を戻そう。
麗日の最初の一手は確かに最高の一手であったのは疑う筈も無い。
だが、それすらも爆豪は乗り越えた。
それだけの話である。
そう、爆豪が最初にだしたのは左手の小振り
しかも最短距離で麗日に攻撃を出させ、回避した上でだ。
「……え？」
「消し飛べや!!」
瞬間、爆発。
だが咄嗟の判断で後方に避けた為、爆風により軽度の火傷に抑える。
「づぅ!!まだ、まだぁ!!」
再び、突進。
「うらぁ!!」
爆破。

「まだ……まだぁ!!」
突進。
「遅ぇ!!」

再度、爆破。
だが。

「あぁ?」
爆破したのは麗日のジャージの上。
本人は爆風に紛れて別方向からの攻撃を行うが。
「見えてんだよ!!」
それすらも爆豪は見切り、爆破。
「まだぁ!!」
だが、麗日は諦めない。
自分も緑谷の様に最後まで立ち向かうと決めたから。
何度も何度も突進する。
何度も失敗して吹き飛ばされる。
けれど、諦めない。
後少し、後少しで完成するのだから。

けれど、それに気づけぬ愚者はどうしても存在する。

「おい!そんだけ実力差あるなら早く場外にでも放り出せよ!!」
「女の子痛ぶって遊んでんじゃねー!!」
「そうだ!そうだぁ!!」

ブーイング。しかもそれはプロと呼ばれるものから始まった。
波紋は広がり、観客もそれに感化されるように広がっていく。

それを見た倉持は言う。
「…馬鹿でしょ。あれがプロ?やめたら?」

それに被せる形でイレーザーヘッドが告げる。
『おい、今言ったのプロか？ならてめえらにこの試合を見る価値すらねえ。帰って転職サイトでも眺めてろ。』
『爆豪はな、ここまで上がってきた麗日の実力を認めてるから警戒してんだろ。本気で勝ちに行ってるからこそ油断も手加減も出来ねえんだろうが！』

爆豪は確かに見ている。
麗日の目は、まだ死んではいないという事を。
そして、策は出来上がる。

「…無能にも程がある。」

その策に気付くものは賞賛を覚える、倉持もその1人。
いかに観察眼が良くても戦闘の中ではあれに気づけるかどうかというのが不明だという事がわかるからこそ、それこそ、観客席に座って注意深く観察しなければわからないからこそ。
生徒や観客が気付かないのも無理はないが。
気付けないプロに怒りを覚えるのは当然である。

「どういう事？倉持くん。」
緑谷は聞く。その策の正体を。
倉持は答える、簡潔に。しかし確かに分かる成果を。
「上。」

上空に浮かぶのは無数の瓦礫。
ステージ全てを覆う程の密度の瓦礫が、彼女の今の全力が。

「ありがと……油断しないでくれて!!」
「……ちっ。」

「解ぁぁぁあいいい!!」

流星群となりて、落下する。
自らの被害も考えない。唯勝つのみ。
傷が痛むのも省みず、瓦礫が当たるのも省みずに最後の突進。

……それでもなお、彼には届かない。
腕から火花を散らし、掌へそして。

1発の爆破の炎が全てを真正面から焼き尽くす。

「……デクの野郎と組んでるからなぁ。何か練っているとは思ってたが。」

「……俺には通じねぇ。こんなもんじゃ今の俺は止められねぇ。」

（一撃で……私の出来る最大限…全く通じひんかった……!!!）

「それでも……それ、でも!!」

「良いぜ……こっからが本番だぜ！麗日ぁ!!」

（諦めたりなんて!!……デクくんなら!!!）

爆豪が両手を広げ、麗日へと突進する。
麗日もまた、迎撃せんと体を向ける。

だが。

（あきらめ……たり、な……）

精神は死なずとも麗日の体が限界を迎える。
そのまま倒れるようにしてダウン。

（からだ……うご…け。）
「……麗日さん、行動不能!!勝者爆豪くん!!」
麗日は爆豪に届なかったと敗北を抱いた。

「……いってぇ。」

けれど、確かに麗日は爆豪の喉に牙をたてていた。

勝者、爆豪勝己。

一回戦終了。
舞台は次のステージへ進む。

決勝戦、その２。

第一回戦が終了し、続いて第二回戦。
先ず第一試合に臨むのはオールマイトの後継者たる緑谷出久。
そして個性婚が生んだ最強のハイブリッドたる轟焦凍。
互いに言葉は無く、されどその目には確かな闘志が宿っていた。

『さぁ！試合だぁ!!』
その言葉と同時に先ずは緑谷が攻める。
「はぁぁぁ!!」
だが、その攻撃は轟の真正面。
「ふっ!!」
即座に右足で直線上を凍結。緑谷を凍らさんとかかる。
「そこだ！ＳＭＡＡＳＨ!!」
だが、緑谷は即座に急停止。
右手を丸めデコピンの構えを取り『個性』の風圧によってその氷を全て吹き飛ばす。
「っ！」
轟もまた咄嗟に前方と後方に氷の壁を展開、その風圧を壁を以って逸らしていく。
その風圧は寒さを帯び観客へと吹き荒ぶ。
「やっぱ、そう来るよな。」
（自損覚悟の打ち消しからの吹き飛ばし！）
そう、緑谷の最初の作戦は轟の迎撃を逆に利用。
視界が塞がるチャンスを逃さず自身の右中指を犠牲にして速攻勝負に出たのだ。
しかし、現実はそう甘くは無い。
轟の個性発動の速さはヒーロー界においても屈指の速さ、見てからの防御は実に容易いのだ。
「ずぅぅぅ……！」
そしてその代償は決して安くは無い。

元々個性の制御が不十分であり、なおかつ轟の攻撃は生半可では防げない。
故に。
その中指は赤黒く腫れ、恐らく複雑骨折は免れない。
それに最初に気づくのは師であるオールマイト。
（そうだよな、轟少年の攻撃を破るには１００％のぶっ放ししか今の緑谷少年が防ぐ方法は無い。だが……）

「……。」
続いて轟からの第二波。
再びの氷の波が緑谷を飲み込まんと迫る。
「はぁあ!!」
対する緑谷もまた右人差し指を犠牲にその攻撃を吹き飛ばす。
その二回の中で緑谷は思考をフル回転させていた。
（轟くんはいつも一瞬で勝負がついてるから情報は少ない!!ましてや演習の時も倉持くんのあの檻に囲まれてて見えなかった…やっぱり指で正解だった。１００％の腕ＳＭＡＳＨでも防がれる可能性は高かった！そして、あの後方の氷壁は風圧に吹き飛ばされないようにする為！見極めろ……見つけるんだ！後６回の間に…!!）

「……お前は。」
第三波。
右薬指での破壊。
これにより残り後５回。
だが、緑谷にはある作戦があった。
それは。
「……耐久戦か。直ぐに終わらせてやる…!!」
第四波。
次は右小指で。
これでもう右手は親指を残すのみとなる。

それを目視で確認した轟はここで勝負に出る。
第五波は前方に氷で坂道を作成。そのまま駆け上がっていく。
緑谷もまた左中指を犠牲にその坂道を破壊。
だが、それこそが轟の狙い。
落下する速度を利用し緑谷へ急接近、右手を地面へと叩く。
「くっ!!」
避ける緑谷、しかしその氷はどんどん伸びていき……緑谷の左足へと到達する。
(駄目だ!思った以上に氷のスピードが速い!!)
ここで緑谷は左薬指では無く左腕での全力の個性発動を咄嗟に選択。
全力で轟をその驚異的な風圧を以って吹き飛ばす。
「がぁぁぁぁあ!!!!」
その代償は左腕は誰が見ても痛々しい程に変色。
再使用は恐らく不可能となるのだろう。
しかし。
「……さっきより、随分と高威力だな。……近づくなってな。」
吹き飛ばされはしたものの最初の位置への帰還程の損害に抑えた轟がそこにはいた。
(個性だけじゃない!咄嗟の判断力、応用力も桁違いだ……!!)
その考察は正しく、プロの中にも今の轟の判断に面食らったものもいる程。
これで今の轟でも充分な程プロで通用する事が証明された。
だが、緑谷は見つけた。……見つけてしまった。
「なんだよ。守ったばかりなのにボロボロじゃねぇか。」
そういう轟の右腕は小さく痙攣し、僅かではあるが霜がついた場所も見受けられる。
(そうか……そういう事か!!ちくしょう!!)
「……ありがとな緑谷。お陰で糞親父の顔が少し曇った。後は……あいつに勝てば。」
そういう轟の視点は父であるエンデヴァー、そして観客席で死んだ

目で見つめる倉持にあった。
そう、轟は最初から緑谷を意識してなどいない。父であるエンデヴァー、そして目下最大の壁である倉持を見ていたのだ。
「その両腕じゃもう戦えねえだろ。……終わりにしよう。」
そして、留めを刺さんと轟は先程よりも大きく氷結を伸ばし決着をつけようとしたその時。

……ぷつんと緑谷の中でナニカが切れた。

（……どこ見てんだ!!）

◇◆？

…突風が走る。氷を突き破り、轟を飲み込んでその暴風は暴れ狂う。
轟はステージギリギリまで押されながらもなんとか停止。
緑谷を見て驚愕する。

「テメェ……。」
その先には赤を通り越して紫へと変色した緑谷の右人差し指。
最早粉砕骨折は避けられないだろう。
（既に壊れた指を使って……どうしてそこまで。）
「震えてるよ……轟くん。」
「……そりゃそうだよね、個性だって身体能力なんだ。君自身冷気に耐えられる限度があるんだろっ……！けど、それって左側を使えば解決できる問題じゃないのか…!!」
「っ！」
「半分だけの力だって？……皆全力なんだ、勝って！目標に到達する為に！1番になる為に！」
「まだ僕は君に傷一つつけられちゃ居ないぞ!!」
吠える。目の前の舐められている敵に自分がいる事を証明する為

に。

全力で掛かってこい!!!

「全力だと……糞親父に金でも握らされたか!?イラつくなぁ!!」

怒りと共に突撃する轟。

しかし、その動きは先程より格段に鈍足になっていた。

それを見て轟の弱点を看破したのは緑谷、爆豪、倉持の3人。

特に緑谷は眼前で見ているからか、動きに完全に対応する。

轟が右足を上げた瞬間懐に潜り込み。

「電子レンジの……ように!!」

「なっ…!!」

右脇腹にその拳が刺さる。

「がっ……!!」

だが、決定打は至らない。

即座に復帰し、氷を展開。

だが、先程よりは格段に弱く、遅い。

回避し、再び拳が入る。

「くそっ……!!なんで、そこまで!!」

轟の悲痛な叫びが響く。

それは自分が持っていたナニカを見つけたのか否か。

いずれにせよ、緑谷はその答えにこう返す。

「期待に……答えたいからだ!!」

瞬間、轟の脳裏に過去の記憶がフラッシュバックする。

それは母との記憶。

愛してくれた母が、時間が経つにつれ父に似る自分を恐れ。

ある時、精神に限界が訪れまだ幼子だった轟に沸騰したお湯をかけ。

それでもなお、愛す事をやめる事が出来なかった母のある言葉を。

『なりたい自分になっていいんだよ。』

……その目に、その腕に炎が灯る。

◊♦？

轟の左から大きな炎が吹き出す、今までの気持ちを焼き尽くすように。

なりたい自分になる為に。

「……俺だって!!ヒーローになりたい!!」

霜が溶け、体の震えは止まる。

先程の動きはもうあり得ることは無い。

それでも、緑谷の顔には笑みが浮かんでいた。

「この状況で敵に塩を送るなんて……イカレてんのはどっちだよ!」

轟の右足に凍てつく氷が左腕には焼け落ちるような炎が噴出する。

緑谷もまた、足に個性を込めて最後の一撃を繰り出そうとしていた。

その状況をみたセメントスとミッドナイトは緑谷の限界を判断止めようとするが。

それより先に今までで最高の氷が緑谷に迫る。

それを飛び越えて、最後の力を振り絞り全力を振り出す。

同時に炎を前に突き出し。

……阻まれたコンクリートと共に大爆発を起こした。

……晴れた先に立っていたのは。

勝者。轟焦凍。

◊♦？

第二試合は飯田対塩崎。

戦闘開始の瞬間荊を前方へと突き出す塩崎。

しかし、飯田の個性技である『レジプロバースト』によって背後に回られ

そのまま場外へ。

勝負は一瞬で決着した。

勝者。飯田天哉。

◊♦？

第三試合。

倉持対常闇。

「……勝つよ。」

「こちらも負けるつもりは無い……!!」

『試合開始ぃぃぃ!!』

「黒影（ダークシャドウ）!!」

開始直後に影を出し勝負に出る常闇。

それをただ黙して待つ倉持。

『ゲェヒャハハァ!!』

「3……2……1…0。」

黒影が迫った瞬間。

倉持が一瞬機械のようになったかと思えばその姿がブレて消失する。

「なっ……消えた!!?」

一瞬で倉持を見失った常闇は周囲を警戒する。

「ふっ!!」

だが、既に背後へと回り込んだ倉持の廻し蹴りが背中へと炸裂。

「がっ……!!」

背中への激しい衝撃を感じる暇も無く常闇は痛みによって気絶し吹っ飛ばされる。

そして倉持は彼の正面へとワープし彼を捕まえる。

「……終わりました。」

勝者。

倉持管理。

◇◆?

第四試合。

爆豪対切島。

こちらは初めは切島が攻め、爆豪が防戦していたが。

「そこだオラァ!!」

爆豪が切島の弱点の解析が終了した瞬間にカウンターを繰り出す。

「てめぇ、全身ガチガチに気張り続けたんだろ!!そんな状態で速攻かけてたらどっか綻びが出るわぁ!!」

その言葉を裏付けるように切島の体にダメージが蓄積し始める。

そしてその隙をつくように猛攻が始まる。

「オラオラオラオラオラ!!!」

爆豪が爆破し続けるのをひたすら切島が耐える。
どちらかの体力が尽きるまでのインファイト。
だが。

「トドメェだぁ!!死ねぇええ!!」

最後の大爆破に切島は耐えることが出来ずに気絶。

勝者。
爆豪勝己。
そしていよいよベスト4が出揃い、本当の闘いの幕が今下される。
準決勝、ここに開幕。

一握りの天才と人造りの天災。

残ったのは飯田、轟、倉持、爆豪の４人。
誰もが特級の『個性』を持ち、誰が優勝しても全く可笑しくもないメンバーが揃い踏みとなった。
ヒーロー『インゲニウム』を兄に持ち、当人もクラスの委員長としてメンバーを支えている超正統派ヒーロー候補。
ヒーロー科、飯田天哉。

個性、『半冷半燃』という破格の実質２つの個性を持ち、父にエンデヴァーを持つものの父への怨嗟、そして母への愛を胸に秘める『個性婚』が産んだ最強のハイブリッドであるヒーロー候補。
ヒーロー科、轟焦凍。

他の三人には個性『爆破』とインパクトは劣るものの頭の回転、個性への応用力、そして実戦での成長性は他の三人にも引けを取らない。
思考性には難ありの一握りの天才ヒーロー候補。
ヒーロー科、爆豪勝己。

そして。
人の『知識』を欲する欲望から産み出された最悪。
個性、身体能力、その人間性の全てが造られ、育てられたモノ。
人に愛されず、されど人ならざるモノに愛される怪物（ニンゲン）。
ヒーロー科首席、倉持管理。

今、この４人の中から全１年生の頂点が決まる。

◇◆？

準決勝第一試合。

飯田対轟。
開始直後に飯田が勝負に出る。
「『レシプロバースト!!』」
マフラーを限界まで酷使しトルクオーバーを引き起こすことで限界以上の加速を生み出す飯田の切り札。
しかしその限界時間は約１０秒。
つまり、１０秒以内に轟を場外或いは気絶までに追い込まなければ強制的に飯田の敗北が確定的になる。
つまりは超短期決戦。勝負の分け目もまた一瞬。

轟の前方に急加速、そのまま脳天に向けて右足での蹴り。
「っ!!」
動体視力では捉える事は出来ない速度での蹴りを咄嗟の直感で緊急回避。
そのまま前方に氷を展開。
「ぐむっ!!」
後ろにエンジンを吹かせ後方へと避難。
「ここだ……!」
その隙を突き、飯田の左右を氷で封鎖。
ここで、飯田は進行方向を完全に限定させられてしまった。
「これはっ……!!しかし!!」
だが、残り時間はもう少ない飯田に選択肢は一つしかない。
「うぉおお!!!」
真正面からの突撃。飯田に残されたのはその一つのみだ。
しかし、進行方向を限定させても飯田の速度は常人では捉えられない。
「くっ……!!」

一撃目の右足を咄嗟に頭を下げて回避。
だが、飯田はそのからぶった足のエンジンを更に加速。
体を回転させ、左足の踵を轟の後頭部へと叩き込む!!

「がっ……!!」
脳を揺らされ、轟の体から力が抜ける。
そして、その隙を飯田は逃さない。
服の後ろを掴み、一気に場外へと連れ出さんと加速する!!
（残り、５秒!!間に合えっ!!）

エンジンが、停止した。
「なっ……!?マフラーが…詰まって……!!」
「短期決戦に…頭ん中一杯でこんな小細工頭になかったろ……。」

轟の右腕が飯田の左腕を掴んでいた。
そして、そのまま凍結は全身へと及びそのまま頭のみを残して完全凍結。
「……レジプロ。警戒してたが……づぅ。やっぱり早えな……。」
多少ふらつきを覚えながらも飯田を完全に氷へと閉じ込めた。
「飯田くん、行動不能!!勝者！轟くん!!」
（これで……後は!!）
「……兄さんっ!!」

勝者、轟焦凍。

♦？◊
血が薄暗いコンクリートを濡らす。
血を流すのは、『ＩＮＧ』を肩に背負った男。
その目先には。
「……金ばかりだ!!今のヒーローはっ!!」

暗い路地裏に血濡れた刀が反射する。
姿は影になって見えないが声だけは彼の憎悪が伝わってくる。
「俺をやって良いのは……オールマイトだけだっ!!!」
名をヒーロー殺しのステイン。
彼との邂逅まであと少し。

◊♦?

続いて第二試合。
ここまで誰にも一位を譲る事なく独走で走り続けた今大会の台風の目。
一方は一度はその男と共闘したもののその闘志は更に燃え滾り、この時をずっと待ち続けた男。
倉持対爆豪。

「先に言っとく。テメェ手加減なんてすんじゃねぇぞ……!!」
「……そんなの、する必要も無いでしょ。」
「上等だ…!!テメェをぶっ倒して俺が一番をとる!!誰にも渡さねぇ!!」

『試合……開始ぃ!!!』

「うるぁあ!!!」
先に仕掛けたのは爆豪。
得意の右手の大振りで倉持への真正面から叩き込む。
「……ふっ!!」
その爆破を回避、そのまま右手首を掴んで自身の中央へと引っ張り蹴りをもって彼の腹を蹴っ飛ばさんとする。
だが、爆豪にとってその攻撃は2回目。

自由である左手を腹に持っていき蹴りのタイミングに合わせ。
「くたばれぇ!!!」
最大威力で爆破する。
爆風で会場が煙幕に包まれる。
その煙幕の中で爆豪は倉持を探す。
(……分析しろ。あいつのワープの先は!!)
「そこだろうがぁ!!!」
右手の最大爆破をもって後方を範囲なしで吹き飛ばす!!
「っ!!」
黄金狂で爆豪の背後をとっていた倉持ではあったが振り向きざまに放たれた爆破に対応出来ず巻き込まれていった。
「はぁ……はぁ。どうせ、これでもテメェは無傷なんだろうが!!出てきやがれぇ!!」

「3…2…1…0」

爆風が晴れた先には第一種目で見せたあの形態。
通称、【爪】と呼ばれたその姿が爆豪の眼前に現れ。
同時に。
「やっと……だしやがったか……なんだ?」
その後方には黒いナニカが徐々に大きくなるのが見えていた。
爆豪は直感的にその存在を理解する。
その黒が一体なんなのかを。
(アレはヤバイ!!アレが出てきちまう前にケリをつける!!)
その動揺を倉持が見逃す筈は無い。

……爆豪は殆ど偶然的に姿勢を低くし。
その上を倉持の蹴りが通過した。
「っ!!!??」
上に超強力な風圧が起こる事でようやく爆豪は自分が攻撃されたのだと感じ取れた。
「……外した。次は当てる。」
「させるかよ!!オラァ!!」
そこに動揺を感じる事は無い。
元々格上の存在だと爆豪は倉持を認識している。
故に爆豪の脳はフル回転し、必死にこの試合の勝ち筋を演算していた。
爆豪は思う。
（あっちに攻めに出られちゃ、ジリ貧も良いとこだっ!!なら!!）
「ぐっ……!!」
（あの突進後の僅かな隙を…!!）
「くたばりやがれぇ!!!!もやしがぁぁぁぁぁ!!」
ラッシュ、ラッシュ!!
攻撃の隙を突かれないように突進後に接近して爆破を繰り返し適切な距離で戦闘を展開する爆豪。
だが、その爆破も大したダメージにはならず。
「はぁ!!」
「しまっ…!!?うおおお!!!?」
ラッシュをほんの僅かな間に起きた隙を利用し下から回避され、そのままジャイアントスイングへ。

「……いけっ!!」

「まだまだぁ!!」

投げ飛ばされた勢いを後ろの爆風で相殺し、その場で停止。

しかし。

「……ここだっ!!」

距離が開いた一瞬、両手を使い無防備になったその瞬間に倉持はワープを以って爆豪の懐に入り、腹に掌底を叩き込む。

「ごっ……!!げほっげほっ!!」

堪らず咳き込む爆豪、だが猛攻は更に続く。

顎への黄金狂付きの掌底で顔を上へと上げさせその後にレシプロとほぼ同等の速度の回し蹴りを再び腹へと叩き込む!!

「がぁ…!!」

脳と内臓が揺らされ堪らずその場に膝をつく爆豪。

だが。

「まだまだぁ!!」

その目は未だに死ぬ事は無く。

留めを刺さんとする倉持の眼前に左手を突き出しそのまま爆破を行使する。

「うらぁぁぁ!!」

「視界がっ……。」

そして、左手での最大爆破を敢えて囮として使用し視界を塞ぎ、完全に叩き込める位置から。

「死ねぇぇぇぇ!!!」

右手の大振り、爆豪が持ち得る全ての力を持って前方にいる壁をぶっ壊す!!

「ぎぃ!!これで……どうだっ!!!」

爆豪の右手は痙攣し、ボロボロに。
恐らくこの試合ではもう右手は使えないだろう。
それほどの一撃。ただの人間では間違いなく即死する程の威力。

だが、その一撃をもってしても。
「……くそっ。」
倉持が有するシェルターには届かない。

「……2。」

「ぐっそがぁ!!」

だが、爆豪は諦めない。
自分が最強である為に。
そして、彼自身の誇りの為に。
向かう、挑むべき。倒すべき敵へと。
その左手を突き出し……。

「……僕の勝ちだ。」

…倉持の右ストレートが自身の頬へと刺さると同時に。
その最後の一撃は僅かに彼の仮面を欠けさせるに終わった。

「……ちくしょう。」

そう、呟き。
爆豪の意識は闇へと沈んでいった。

「……2……か。」

勝者、倉持管理。

ここに決勝のカードが定まった。

轟焦凍対倉持管理。

ここに最強のカードが激突する。

再戦（リベンジマッチ）

…轟焦凍は思考する。
あいつに勝つ為にはどうすれば良いのか。
自分には何があるのか、そして。
「俺は……どんなヒーローになりたいのか。」
緑谷との勝負以降、ずっと考え続けてきた事。
父を憎む心はあれど、それは自分を抑える理由では無い。
母を愛する心はあれど、それは自分を罰する事ではない。
母から受け継いだ恩義の右手。
父から与えられた怒りの左手。
考えろ、今あいつに勝つ為には何が最善なのか。
あいつが自分よりも強者ならば弱者である自分が何をすれば良いのか。
『なりたい自分になって良いのよ。』
『全力でかかってこい!!』
「……ふっ。そうだ、俺は勝ちたい。嫌、勝つ……!!」

ならば、ならば自分が行うのはただ一つ。
全力で倉持（最強）に挑むだけだ。

◇◆？

…倉持管理は黙して待つ。
自分は恩人である彼女に自分の成長を見せられただろうか。
誰かを救い、導く。
そんなヒーローへの道に自分は近づけているのだろうか。
今に辿り着くまでに自分は何度死にたくなったのだろう？
今を迎えた時、自分はどんなに助けられたのだろう？

……あの時の救いを、あの時の記憶を、あの時の想いを。
いつか、見知らぬ誰かに、愛しき皆に、…最愛の彼女に。
その心を分かち合う為にも。
「……勝つ。」
かくして、開幕（カーテンコール）の音は潔く鳴る。
互いに想いと信念を込めて、いよいよ最後の戦いの幕が上がる。

◊♦？

『いよいよラストバトル!!泣いても笑ってもこれで1年生の頂点が決まるぜぇ!!』
『先ずはこいつからだぁ!!ヒーロー科入試首席!!ここまで宣誓通りに一位街道真っしぐらのビッグドラゴン!!倉持管理だぁ!!』
左から倉持が入場。
その目は目の前の大敵を見つめていた。
『次にこいつ!!炎と氷のイリュージョン!!数々のライバルを退け挑むは最強のライバル!!轟焦凍だぁ!!』
右から轟が入場。
その目には大きな闘志が眠っているのが分かる。
そして、その表情はというと。

「焦凍が……笑っている？」

不敵な笑み。いや、歓喜の笑みというべきだろうか。
心からこの戦いを望んでいたかの様なそんな思いが伝わる笑み。
轟は今、この瞬間。
自分の最高値を更新した。

『今ぁ……スタート!!』

プレゼント・マイクによる開始のゴングが鳴る。
しかし。

「……。」

「……。」

『な、なんだぁ？どっちも動かねぇぞ？もう勝負は始まってんぞ？』

両者共に動かず。

「……頼みがある。」
先に口を開くのは轟。
「……何？」
「お前と戦う前に、どうしても戦いたい相手がいる。……構わねぇか？」

轟が最初に言ったのは『雪の女王』との再戦。
倉持と再び戦う時には絶対に挑むと決めていたこの一戦を今、この場で果たそうとしていた。

「……いいよ。それじゃあ。」

倉持が指をパチンと鳴らす。

そして。

轟の周りを再び氷柱が囲む。

氷柱はやがて外部からその中身は見えなくなり、中身には吹雪が起きる。

やがて、吹雪が止み

『久しぶり……というべきかしら。トドロキ、今度は貴方が私に挑むのね？』

「あぁ。今度こそ……お前に勝つ…!!」

『そう。ならば此度の決闘を始めましょうか！』

◇◆？

「ふっ……!!」

先に仕掛けるのは轟。

右の氷結を以って狙うは女王の心臓。

だが。

『……甘いわ！』

女王もまた氷の大剣でそれを防ぎ。

『前に学習したはずですが？貴方の氷は私にとっては……。』

「あぁ……知ってるさ。だからこれを待ってた！お前が防ぐのなぁ！」

右の氷結で氷の大剣へと密着。

そのまま左の炎によって女王の右手を溶かす。

そしてその炎の放出に流される形で再び地面へと着地した。

女王の左手は完全に溶け落ち、来ていた華美な服の一部も欠損した。

それでも、彼女はこう告げる。

『ごぅ!ふふふ……ようやく使いましたか、その左を。』

「……あぁ。」

『ですが……。』

女王の右手は瞬時に再生。

溶けた服もまた完全に修復した。

『まだ、使い方に慣れていない。この程度では私を完全に溶かす事など不可能です。』

「くっ……。」

『次は私の番ですね!』

氷の大剣を横薙ぎに払い、攻撃する女王。

その攻撃を一度、右手で氷の高い足場を作って回避し、そのまま大剣へと左手の炎を振り下ろす。

大剣は瞬く間に溶け落ち、柄のみが残る。

『そこ!!』

だが、それで攻撃は終わらない。

氷が急激に溶けた水蒸気を利用し、不可視の蹴り。

大剣が溶けた事で空中に放り出された轟は視界不良の中、半回転。

「ぐっ……!」

右手で足に張り付き、左手でその足を溶かす。

『きゃ……!!』

片足が無くなった事により、女王はそのまま蹴りの勢いを抑えられずに転倒。

「そこだ……!!」

すかさず、その隙をつき左手の炎で決着をつけに走る。

『くっ……まだです!』

そうはさせじと両手を厚い氷壁へと変えて、再生への時間稼ぎをす

るが。
「おおお!!」
左手の炎を最大出力。
一気にその氷壁を溶かす。
『っ!!フゥーー!!!』
足の再生は完了したが焦りの中両手を使った事が裏目に出た女王はその吐息を以って轟を凍らさんとする。
しかし。
「ふっ……!!」
右を前方に出してこれを防ぎきり、そして。
「これで……!!」
左を女王に向けて……。
『掛かりましたね。』
右足が凍った。
「なっ……!!」
見れば、溶かした筈の右手が彼の足を凍らせていた。そのまま首から上のみを残した全身が凍りつく。
「ぐっ……!!」
『確かに、貴方は私の両手を溶かしました。ですが私も馬鹿正直にあの壁を張ったわけではありません。』
『あの時に剣の柄を私の手へと変えトラップとして利用したのです。』
「つまり……あの焦りも無駄にでけぇあの壁も……。」

『これを気づかせない為の演技とダミーです。』
話している間にもどんどんと再生され、ついに全ての部分の再生が完了する。
『王手です、ショウト。認めましょう、貴方は確かに強かった。故にこのまま凍結させ決着としましょう。』
女王の頬が僅かに膨らみ、轟を凍らさんとして。
「雄英(ウチ)の『校訓』……知ってるか？」

その声に留められる。

『……知りませんが、それが何か？』
「〝Ｐｌｕｓ　Ｕｌｔｒａ〟……更に向こうへ…ってヤツだ。」
左の炎が氷の中で煌煌と燃え盛る。
「……俺はここでもう負ける訳にはいかねぇ。」
「……ここを超えて、先(アイツ)に勝たなきゃならねぇ。」
徐々に左の氷結が溶かされていく。
『なっ……氷が！ありえません！私の氷結は炎など…!!』

「だから……先へ行かせてもらう!!」
そして、炎は氷を完全に破壊した。
それにより起きた水蒸気が女王の視界を防ぐ。
『くっ……先程私がやった事を……!!ですがここは私の城!!貴方の場所など直ぐに……!!」
「だろうな。だから……こうさせてもらう!!」

轟の左が更に燃え盛り、周りの氷柱をどんどんと溶かしていく。
『……まさか。』
「そのまさかだ…!!お前の再生は必ずしも無限では無い…!!氷柱の氷を使い、城を崩しながら再生している。つまり、再生には限界があるって事だろ…!!」
「そして…!!全ての氷が無くなった今、もうお前は再生できねぇ！」
水蒸気が晴れた先、女王の目の前は既に轟の左手が迫っていた。
女王は悟る。
『……ふふ。今回は……私の……。』
「俺の……」
ーー負けです。／勝ちだ。
◇◆？
「はぁ……はぁ……。」
『同じ炎でも……こうも違うものなのですか。貴方の勝ちですショウト。』
「……礼をいう。あんたのお陰で俺は強くなれた。」
『ふふ……ですが、私の勇者は強いですよ？ですので……これを。』
女王は残された右手から光を出し、それは轟の胸に吸い込まれていく。
「……！体力が…!!」
『私を下した褒美です、これで勇者に思う存分挑んで来てくださいな。』
「……助かる。」
『それでは……いつかまた会う時まで。』

そう言い残し、雪の女王は溶けゆく雪のようにひっそりと消えていった。

勝者、轟焦凍。

そして。

「いくぞ。」

「……こい。」

倉持管理ｖｓ轟焦凍。

開始。

最後は本気で。

「いくぞ。」
「……こい。」
一言言葉を交わし、最後の戦いが始まる。
倉持は一瞬で【爪】へと姿を変えて真正面から突進する。
轟もまたそれを迎撃せんと右の最大出力をもって会場の殆どを氷で飲み込んだ。
「！」
その氷は倉持も飲み込んだが、直ぐにその氷は真っ二つに裂けそして次の瞬間には細切れにされていた。
「……やっぱ、こんなんじゃ止めれ…!!?」
一瞬倉持がブレたかと思えば、彼の右足が顔面の直ぐ近くにまで迫った。
「はぁ!!」
だが、氷が砕かれたの注意深く観察し、そして飯田のレシプロバーストを経験していたのが功を成したのか。
間一髪でこれを回避。
左の炎で彼を焼かんとするが。
「……効かない!!」
元より、防御性に優れ、彼自身も火の鳥との遊びで熱に耐性を持っていたのを利用しそのまま燃えている左手首を直で握る。
「ぐっ……離せ!!」
抵抗を意にも介する事なくその状態のまま片手で彼を持ち上げ、そのまま場外へとぶん投げる!!
「くっ！」
咄嗟に右手で氷に壁を作り滑るように衝撃を受け流す。
しかし。
「そこっ!!」
驚異的な頭脳により着地地点を即座に演算し、黄金狂によってそこ

に先回りした彼の拳によって壁を破壊される。
「……ここだっ!!」
だが、その破壊された壁を逆に利用し、熱の急激な膨張により発生する爆発で倉持の視界を封じ込める。
惜しむべくはその戦法は形こそ違えど、爆豪が既に戦法として使用した事。
特に焦る事も無く、倉持はあるチャンスを待つ。
確率は二分の一。
そして。
「うぉおお!!」
轟が左を使ったことにより倉持は賭けに勝利した。
轟は緑谷や飯田、そして女王との戦いをへて人間的にも個性的にも今までに類を見ない成長をした。
しかし、左手の扱いは早々変えられるものではない。
要は出力の調整が出来ないのだ。
出来るのは全て全力、長らく使っていない弊害もあり範囲指定と加減が出来なくなっていた。
そして、倉持が炎を極端に通じにくいという事を先程知った轟の左の戦法はただ一つに縛られてしまう。
近距離からの避けられない状況での全力放火。
その攻撃を既に最初に左を食らった時に把握していた倉持はあえて視界を塞ぐことで炎による攻撃を誘発する事に成功したのだ。
迫り来る左手を掴み、合気道でいう横面持ち四方投げによって轟を地面へと叩きつける!
「がっ……!!」
体の横を激しく打った事により多少ながら意識を飛ばすが咄嗟に舌を噛み意識を復活させたのもつかの間。
倉持はそのまま、片手で左手を抑えたまま留めの一撃を左手によって放とうとするが
「はぁ!!」
残った右手で倉持に触れて凍結させようと試みるが、直感で回避を

優先。
右手を地面に叩きつけ、氷の壁を作る事で彼と自分を分断。
勝負は再び振り出しに戻った。
だが。
「はぁ……はぁ……。」
慣れない炎の加減無しの放出に加え、氷結もまた生半可なものでは無く常に最高出力で繰り出さない訳にはいかない轟。
急激な体温の変化は徐々に体を蝕んでいた。
そして再び、氷は粉々に砕かれ。
右足が彼の顔面へと迫る。
それを何とか回避し、体力を少しでも回復しようと倉持の動きを観察していた轟。
そこである事に気づく。
「くっ……！ごほっ！」
高速の突撃をした後の倉持は何故か咳き込んでいた。
（なんだ……？いやまさか。だとすれば……。）
「ふっ!!」
「くっ!!」
そして、黄金狂でワープし攻撃する直後の彼の姿は。
（普段の奴だ……だったら!!）

◊♦？
ワープしてきた彼の攻撃を避け、再び巨大な氷壁を展開する轟。
そして再現といわんばかりに壁は一瞬に砕けてバラバラになる。
（……来る!!）
轟の予想通り壁の破片の間から僅かに影がブレ。
…彼の姿が消えた。
（なっ……何処に!?）
その答えは腹部の強烈な痛みによって痛烈に把握する。
「ぅぅ……!!」

（懐に潜り込んだのか……!!）
そう、倉持は蹴りでは無く、懐に入り込み掌底を彼の腹部へと叩き込む。
怯んだ隙に更にもう一撃。
その衝撃で後方に飛ばされる……筈だったが。
「……掴んだ!!」
「……しまった。」
意識も絶え絶えになりながらも一撃を加えられた瞬間。
無意識的に自身の右手で彼の左腕を掴んだのだ。
そして、一時的とはいえ加速を終えた倉持は。
「ごぷっ……。」
その反動で動きが止まる。
その最初で最後のチャンスを逃す筈も無く。
「凍れ…!!」
左腕の全てを一気に凍結。
これで左腕は一切使えなくなる。
「……っ!!」
そして、そのまま全身を凍らせようと力を振り絞ろうとするも。
彼が凍らせたのはのは既に倉持が引きちぎった左腕のみ。
「なっ……!?」
これには動揺を隠せない轟は反射的に前方を見る。
そこには左肩から夥しい程の血を流し、【爪】を解除した倉持がいた。
「……ふぅぅ。」
多少の脂汗を掻きながらも彼が取り出したのは緑の拳銃。
「っ……!!」
拳銃を取り出した事で僅かな意識を極限まで集中させて彼の次を観察する。
だが、彼がソレを発砲したのは自身の左肩。
撃たれた肩の肉が胎動し、そのまま骨、神経、肉、そして爪といっ

た順番で超速再生する。
そして、ものの数秒で彼の左はまるで何事も無かった様に完全に再生を完了した。
「……とことんまでにデタラメだな、お前は。」
「……よく言われるよ、そして君も凄い事が分かった。」
轟は多少目を開き、こう言う。
「……それは光栄だ。」
倉持はゆっくりと深呼吸しこう告げる。
正真正銘の決着をつける為に。
「だから……少し本気だ。」

◊♦?

彼の目が幾多の色へと変化を見せる。
赤、青、白、紫、そして黒。
体全体には白く文字が書かれており、その文面は距離の所為なのか読む事は出来ない。
そして、目が赤に染まった時。
轟の周りが急に暗くなった。
「……。」
上を見上げれば、そこには紅く染まった鬼の様な腕が今まさに迫らんととしていた。
「!!??」
咄嗟に氷壁で自らを滑らせ回避するも今度は氷壁に青い目が生える。
目はどんどんと自分の体力を奪いとるような感覚を覚えるのと同時にすぐさま
左の炎で氷壁を破壊。
ステージの中央、つまり倉持の目の前で着地。
「……。」

しかし、倉持は動く事は無い。
唯、目を白へと変えただけ。
轟もまた動けない。
何故ならば白色の触手が彼の動きを封じ込めているから。
「くっ……!!」
何とかもがこうとするものの既に体力も集中力も限界が迫っていた轟にとって
この触手は到底外す事の出来ないものだった。
右で凍結させようとしてもソレにはすり抜けるように手が届かない。
左で燃やそうとしても地面を焦がすのみで効果がなく逆に轟を更に拘束する。
事実の上の詰み。

それでも彼は諦めない。
残していた最低限の体力を全て使い、両手の個性を全開で使用する。
左から途轍も無い熱さの炎が。
右から空気すら凍りそうな冷気が。
これが正真正銘の最後の一撃。
「はぁあああ!!!!!」
右を地面に、左を前方の倉持に向けて放つ。
そして先程の氷壁が冷やされた空気が右で更に冷やされ、そして。
「……。」
左の炎がその全てを膨張させ、広範囲の爆発を引き起こした。
……爆風が晴れた先に立っていたのは……？

◇♦？

……目を覚ます。
ここはどこだろうか、俺は負けたのか。
辺りを囲む白はなんだか通いたくても目を背けたかったあの場所に似ている。

ーーー。

ふと、誰かの声がした。
意識が朦朧として、なんだか聞き取れない。

ガチャリ。

そんな音が聞こえ。

「焦凍!!!」
何度も会いたいと願った顔がそこにはいた。
「ごめん……ごめんねぇ……!!」
母の顔はやはり窶れていて、俺を抱きしめる姿にも何だか頼りない。
けれど、何故だろうか。
「ごめん…勝でながった……!!」
悔しくて、それなのに嬉しくて。
「良いのよ。……カッコよかったよ焦凍。」

ーーー涙が止まらない。

◇◆?

表彰式が終わり、自宅へと戻る。
アレの後の記憶は少し曖昧でやっぱり制御が難しいのだなと考える。
……最後に出したのは通称〝作れられた神〟。
僕の中にある彼らの中でも最も親和性が高い石盤だ。
但し、あちらは神、こちらは人。
あちら側が譲歩して力を貸してくれなければ僕は神に取り込まれていた。
それこそ人としてのカタチすら残らず。
……当然ながらアンジェラを始めとしたセフィラ達にはカンカンに叱られた。
本当に、愛してくれているのが伝わって少し泣いてしまったけれど。
けれど、僕は勝った。
これでようやく一歩目だ。
……明後日からはどんな光景が待っているのだろう。

ＩＦ２．絶望へのカウントダウン。

ーーＳＣＰ財団。
そこは世界に転々とする、常識を遥かに超えた超常現象、及び特殊生命体を管理、保護する団体。
各地に支部を持ち、その存在はＡクラスの記憶処理によってその存在を抹消している。
その財団の本部では現在激震が走っていた。
『博士！大変ですっ!!!』
『何事かな。私は今……。』
『それどころではありませんっ!!?直ぐに来てくださいっ!!』
『……なんだね。一体……。』

その感情、態度にただならない様子を見出した博士は女性職員の案内に従いながら向かっていた。
（確か……彼女は終結時計の担当をしていたはずだったが……あれは最近Ｅｕｃｌｉｄになっていたな……何かあったか？）

そして、終結時計の収容室に辿り着き。
……その針に記された文字に驚愕する。

『ば……ばかなっ!!こんなもの私に伝えてどうしろというんだぁぁぁ!!』

ーー貴方達の世界の終末。
…カウントダウンが始まる。

♦？◇

そして、ある収容室。
『チッ……うざってぇが……呼ばれちまったミテェだな。』
『なんの話だ。』
『ウルセェ、テメェなんぞに話す価値もネェよ。』

更に別の収容室。ある少女が目を覚ます。
『!!……そう、やっと貴方に会えるのね。お兄ちゃん。』
『っ!!ば、ばかなっ!!君が目を覚ます筈がっ!!』
少女は花が咲くような笑顔でどこかを見続ける。
『んー!よく寝たわ!!さぁおめかししなくっちゃ!!』

ある所では。
『フゥゥゥ!!さいっこうにゲイな奴が目覚めたぜぇぇぇぇ!!』
そして、この姉妹達も
『……あら、やっとお目覚めみたいね。』
『そうみたい……さてと、私も準備しなくてはね。』
『……そう。』
その日、収容所に収容されたＳＣＰを問わずに全てのＳＣＰがある方向を見た。
そして、誰もが形は違えど笑顔だった。
財団はＳＣＰ達の角度から見ているであろう座標と国を総力をかけて計算。
行き着いた先は……。

未だ支部を作成していない土地、日本であった。

◊♦？
日本のある研究所。
「は、ははっ……っ、ついにかんせいしたぞ!!」
「……？」
「これこそが新たな知識への扉っ!!今までの私の研究は無駄では無

かったのだ!!」
「……。」
「はははははははァ!!!!……んん！そうだなぁ君には名前をつけなくてはならんなぁ？」
「そうだなぁ……んん!!決めたっ!!君のは倉持管理だっ!!」
「……かんり？くりゃもち、かんり？」
「そうだ！そうだとも!!君の身体には無限の可能性が仕舞われている!!そして君はそれを管理する者!!んん!!!優秀だろう!?私は!!」
「くりゃもち……えへへ。」
「これで、誰も私を見下す事は出来んゾォ!!ひゃはははは!!」

♦？◊

それから数年後。
倉持はすくすくと成長し、博士が思い描いていた以上の成果を発揮した。
「んん!!?なんだねその穴は？んん!!?こ、これは全てのモノが死んでいる!!?ば、馬鹿者！すぐに締めるのだ!!」

「だ、誰だね？その女性は？」
『あら？貴方がこの子の親御さん？よろしくね？』
「な、何故だかわからんがこの女性からはただならぬ気配を感じる……むむ！興味深い!!」
『……変な人。』
「おとーさーん!!これみてぇーー!!」
「な、な、な、で、でかぁーーい!!!」
（ｚｚｚｚ……んん。）

そんなこんなで、親子は仲睦まじく幸せに暮らしていた。
……そんな日常も容易く崩れ去るのは一瞬だ。

♦？◊

「今すぐ、その子供を渡してもらいたい。」
「断る。貴様らに私の全てを渡すわけにはいかん!!こいつにはまだまだ可能性がある!!」
「……最後通牒です。今すぐにその少年を此方に譲渡しなさい。そうすれば貴方は見逃しますし、研究の更なる躍進もお約束いたします。ご決断を。」
一年後。
突如として親子の前に財団と名乗る者達が現れ、こう告げた。
ーー世界の平和の為にその子を渡していただきたい。
ーー渡したとして、どうするつもりだ？
ーー消去します。あの少年はいてはならない存在なのです。

そして、先程の会話へと戻る。

「くどい、私はこの子を渡すつもりは毛頭ない!!!」
「……ちっ、時間がないのに……!!射殺しなさい!!腕に抱えている少年ごと!!急いで!!」
そう、女性が告げると背後に立っていた男達が、銃を構え発砲する。
まだ、幼いながらも直感や頭脳には優れた倉持は直ぐに直感する。
これは自分を殺す道具だと。
故に叫ぶ、産まれる前にみたあの人達に届くように!!

ーー助けてぇえ!!!!!

0。

♦？◊

さて、この物語はここで途切れている。
何故かって？それは私が書いたものだからね。
あぁ！『財団の最終兵器』とやらは既に彼にご執心だ……やれやれ
彼の特異性には分かっているとはいえ……本当に面白いな。
ん？世界がどうなったかと？
それは滅んだとも。そして作り変えられた。

君たちだって知っている筈だろう？中国とやらで発見された光る少年を。
そして、君たちは私や財団を知っている。現に前にいる君もそうだろう？
ん？あぁ、心配せずとも彼等はあそこに甘んじているとも。
それはそうだ、なんてたって。

もう既に、世界は彼のものだからね。

勃発、女体化騒動!?

その日、雄英高校は未曾有の危機を迎えた。
突如、雄英1―Aの前に現れた謎のヴィラン。
当然、直ぐさまその場にいた教師陣によって捕らえられ、警備システムの見直しと共に何事も無く解決……すると思われた。
しかし、ヴィランのこの騒動はここからが始まりであったのを誰一人として気付く事は無かった。

そして、次の日。
「んん……よく寝……た?」
朝早くに起きた倉持、しかし胸部付近が僅かに重くなったいる事に気付き下を覗くと。
……そこには僅かではあるが膨らみがあり、咄嗟に下を調べればアルものが無かった。

「……なんで?」

倉持だけでは無い。
その変化は

「……ふえええ!!??」
「……なん…だと?」
「な、な、なんじゃこりゃあああああ!!!!」
「ば、ばかなっ!?」
「うえええぇい!?」
「……ぐへへへ。」

A組全ての男子に及んでいた。

……ほんと、どうしてこうなったのだ。

◊♦？

「……えーと、おーるまいとでいいんだよね。」

「……あぁ、私で間違い無いとも。」

ともかく、慌てて学校に遅れては元も子もないと考えた倉持は早速朝食の準備を済ませて、オールマイトが起きてくるの待っていた。

そして、降りてきたオールマイトを見てからの第一声がこれである。

トゥルーフォームでは身体的な変化は見分けづらいものの、男性にはある喉仏が消失しており、腰は僅かに丸みを帯びている。

対する倉持はというと膨らみは少ないが体は人体の黄金比であり、顔は元々女顔だった事もあり違和感はそんなに無い。

言ってしまうなら無表情系女子…というべきなのだろう。

そして、多少身長が縮んだお互いの姿を確認した両者は確信する。

間違い無い、どちらもやられている。

「……昨日の？」

「恐らく……いや確実にそうだろうな。……なんて個性なんだ……。」

「本当にね……。」

「倉持しょ……いや、今は倉持少女か。何か体に異変はないかい？」

「…まぁ、女性になっているという以外では特には。」

「……何故、あのヴィランは我々を狙ったのだろうな？」

「……さぁ？」

そう考えて、そういえば我々の服はどうしようとなり、オールマイトがマッスルフォームになった時に、そのコスチュームは今どうなのだろう？となり

なんとも気落ちした気持ちのまま、２人は雄英へと登校したのだった。

◊♦？

教室に入るなってから少しして、やはりというかなんというか他の

男子メンバー、そして担任である相澤先生もまた、女性へとその姿を変えていた。
しかし、女性陣の姿は男性では無く、いつも通りである。
やはりあのヴィランのターゲットは男性陣のみだったようだ。
「うええ!?で、デクくん!?デクくんなの!??」
「う、うん。」
「……やっぱり、昨日のヤツか。」
「んがぁあああ!!!なんなんだよこりゃぁ!!!」
「…どうなってるんですの？」
「…どうなってるのかなぁ？」
「……なんでだろう、女子がこんなにいて嬉しいはずなのに全然興奮しねぇ……。」
驚愕しながらも興味が勝るのか色々な事を尋ねていく女子一同。
困惑しながらも情報収集を優先し質問に答えつつ、的確に情報を集めていく元男子一同。
そして。
「……そろそろ、ホームルーム始めるぞ。」

髪はボサボサ、目は大きくクマを作りながらも一先ずはと進行しようとする相澤先生。
その一言で、生徒達は静まり席へと戻っていく。

「見ての通りだが、ヴィランの攻撃だ。動機はわからんが一先ずは害が無い事は確認されてる。」
「今、他の先生が奴から解除方法を聞き出してるが……奴が監獄にいる以上1日はその姿だと思っていてくれ。以上だ。」

♦？◊

ーーその姿を見た瞬間、俺の中で何かがハジケタんだよ。

「は？」

ーーついこの前体育祭がやってたじゃねぇか。

ーーその時によぉ、選手宣誓をやってたガキ……あいつを見たときに俺のナニカがハジケタんだよ。

ーーあぁ、こいつの恥ずかしがっている姿をミテェ、あの自信に満ちた顔を真っ赤にしてやりてぇ……ってな。

ーーあぁ、言っておくが別に俺は同性愛者でもねぇし

もっと言えば他の奴に興味はねぇしどうでも良い。

ーー重要なのはあのガキだよ、あいつの赤面を見せてくれれば『個性』を解除できる。俺の個性はちょいと特殊でなぁ、俺が定めた条件が達成されなきゃ解除されねぇんだよ。

ーーまぁ、そういう事だ。精々俺にみせてくれよ？赤面をよぉ!!

◊♦？

「……だ、そうだ。」

「……なんて言えばわかりません。」

「……俺もだ。」

授業も前半が終了し、男子一同は女子制服のなんとも言えない感覚に赤面しつつも昼食へと向かったその頃。

相澤によって聞かされた内容が上記の通り。

だが、倉持はある確信を得ていた。

恐らくは『陰陽龍』の影響がもろに出た結果なのだろう。

ここからは推論になるが体育祭のＴＶ中継を見ていた時に彼の影響をもろに喰らい奥深くにまで溜まっていた欲望の栓が抜かれてしまったのだろう。

同時にそれを晴らすための人物は目覚めた瞬間に宣言していた自分。

まぁ、そんなところだろうか。

……だとしてもどうすればいいのか。

元々、自分はあまり感情が表に出る性格では無い。

事情はあれど女子制服を着た時もそこまで恥ずかしい事でも無かった。

……それに、どうしろと？赤面とは一体どういう事なのだ？

「あー、まぁ取り敢えず強制はしない。だが、事態収束の為にもなるべく早くしてくれる事を願う。出来れば、早めに頼む。以上だ。」

◇◆？

さてさて、その頃彼の中いつもの部屋では。

「……由々しき事態よ。」

「……あぁ。」

「全くだ。」

「そうですねぇ……。」

「そうね。」

「そうだね。」

いつもならセフィラも多くても3名しか集まっていなかったこの会議室にも

今回は珍しく、外へ出ているゲブラー、そしてホクマー以外の全てのセフィラが揃いも揃って重い空気を曝け出していた。

何故ならば。

「……女の子の管理が可愛すぎる。」

総員、既に撃沈せり。

本来なら彼を害する全てを一片たりとも残さず消し去るがモッ

トーの彼女ら。
最初からかのヴィランの攻撃には気づいていた。
当然、対策も準備し解除方法をも別ルートで導き出した。
だが、そこに待ったをかけたのはついこの前、アイドルプロジェクトと称して割と恥ずかしい目にあった憎しみの女王。
ーーどうせなら、見てからにしましょうよ？
興味８割、仕返し２割で彼女はそう提案した。
多少興味もあり、更にそう害があるわけでも無い事も分かっていたセフィラ達はそれを承諾。
それでいいのか、高性能ＡＩ。
結果。
元々可愛げのあった顔は更に麗しくなり、肉体もまた鍛え抜かれた女性の黄金律と言わんばかりの肉体。
セフィラ達にもこれには堪らずダウン。
しかもプラスにドンで解除方法が平和的。
直ぐに解除するべきとの男性肯定派とまだまだ楽しみたいとする女性肯定派に分かれたセフィラとアブノーマリティ達は様々な議論を重ね
この手を利用する手は無いと判断したアンジェラは最終的にこう判断する。
「今日だけは思う存分楽しみましょう。異議は？」
「「なし。」」
結局、この後倉持は女性陣にゴスロリ、メイド、和服にドレス……ありとあらゆる衣装の着せ替え人形になった後。
アンジェラのキスによって一時停止し数秒後にボンッと紅くなって崩れ落ち、翌日には全ての男子生徒、男性教師は元に戻ったが。
その解除方法は相澤先生の決死の情報操作により事なきを得たと

さ。

そして、アンジェラはもう何回とも知れない裁判へと出頭命令が出されたとさ。

名付けそして、懇願。

雄英体育祭から少し、やはり一位というものは多くの注目を集めるようで

歩いた先々で…といっても通学路が通学路なので割と少ない人ではあるが声をかけられるようになった。

マスコミもまた、一位であり調査の結果あのオールマイトの養子という事が判明した事でなんとしても取材をと自宅へと押しかける者も多かったが元々が影が薄く、更に裏から。

「……。」

「ひっ……!」

……まぁ、御察しの通り。

アンジェラの働きかけもありテレビにはどちらかといえば轟、爆豪、そして緑谷の方が出ているという結果となった。

そして、一限目のヒーロー情報学にて。

『コードネーム』、ヒーロー名の考案だ。」

「『夢膨らむやつきたーーーー!!!!』」

そう、ヒーローとしての基礎、これから多くの人に知れ渡るであろうヒーロー名の考案。

体育祭の結果、そして活躍において期待された生徒はプロヒーローからの指名を受ける。

その中からたった一つを選び、そこへと職場体験を敢行する。

指名が無かった場合は予め用意した４０個のヒーロー事務所からの選択だ。

つまり、体育祭は目をつけられるためのいわば前座であり、ここからが本番。

プロからの信頼を得なければ未来は掴めやしない。

更に相澤先生が続けるには、プロからの興味を失えばその時点でア

ウト。
キャンセルもあり得るという。
「そんな訳で……指名はこんな感じとなった。」
相澤先生の手元にあったタブレットの操作により、各々の指名数が明らかになる。
（……４９００件。知らない所ばっかりだ……。）
生徒全員がそれを確認したのを把握した相澤先生はこう告げる。
「そんな訳で、これからヒーロー名を考えてもらう。査定は…。」
「私よ！」
１８禁ヒーローである、ミッドナイトが颯爽と扉を開け登場する。
相澤先生はというと既に半目で寝袋に包まっている。
「名は体を表す、だ。そのヒーロー名が今後のお前たちを形作ると思えよ。俺はそういう査定は下手だからミッドナイトにやってもらう。よく考えてヒーロー名を決めろよ。」
そう言い、白いボードを配ると再び寝袋に包まり眠りについた。
（……ヒーロー名。名は体を表す……じゃあこれかな。）
５分、１０分が経ち、大抵の人が書き上がったのを確認したミッドナイトはこう告げる。
「それじゃあ、出来た人から前に出て発表して頂戴！」
その言葉の周囲からどよめきが走る。
まさか全員の前で発表するとは思わなかったのだろう。
尻込みするものが多い中、我関せずと青山が真っ先に手を上げて教壇に立った。
「……いくよ。」
「輝き（キラキ）ヒーロー（ラ）、Ｉ ｃａｎ ｎｏｔ ｓｔｏｐ（が止め） ｔｗｉｎｋｌｉｎｇ（れない）!!（よ！）」

（（短文!!??））
（というか、英語かフランス語どっちかにしろよ！）
「あー、そこは主語をぬいてｃａｎ　ｎｏｔは略語でｃａｎ，ｔでいいわね。」
「ふふ、そうだね。ｍａｄｅｍｏｉｓｅｌｌｅ？」
（（いいの!!?））
　次に手を挙げたのは芦戸。
「んじゃ、次はアタシ！リドリーヒーロー、エイリアンクイーン!!」
「血が強酸性のアレを目指してるの!!?やめときなよ!!?」
「チェーー。」

（（最初がアレの所為で大喜利っぽい空気に!!））
（……？）
「それじゃあ次は私いいかしら？」
「はい！蛙吹ちゃん！」
「小学生の頃から決めてたのよ！梅雨入りヒーロー、フロッピー！」
「かわいいーー!!親しみやすくて良い名前ね！」
（空気が変わった!!ありがとうフロッピー!!）

　空気が変わったのを境に続々と発表を続ける。

「んじゃ！次は俺！剛健ヒーロー　、烈怒頼雄斗（レッド・ライオット）!!」
「これはあれね！男気ヒーロー、紅頼雄斗（クリムゾン・ライオット）のリスペクトね！」
「そ、そうっす！大分古いかもだけど俺の目指してるヒーローは今でもクリムゾンそのものなんす！」
「憧れの名前を背負うってからにはそれなりの重圧があるわよ？」
「……覚悟の上っす。」
「……ならばよし!!」

　そして、次は。
「……それじゃあ僕が。」

「うんうんどうぞ!!」
「異形ヒーロー、サルバシオン。」
「サルバシオン……確かスペイン語の救済……だったかしら？」
「ええ。」
「異形……はそうでしょうね。貴方の個性から見てきっと正しいでしょう。けど、救済……その道はかなり厳しいわよ。」
「わかっています。けど、これは僕の人生そのものです。」
「……そう。いいわ、頑張りなさいサルバシオン！」
「……はい。」

「んん!!それじゃあ次の人!!」

その後はイヤホン＝ジャックを始めとしたヒーロー名が続々と決定され
残りは飯田、緑谷、爆豪のみとなった。
緑谷はヒーロー名を『デク』と選択。
自らの過去という名の殻を破った。
爆豪は色々と候補したもののその全てを却下された。

飯田は、思い悩んだ末。結局決められずにいた。
だが、その目は倉持に向けられていたのだった。

◊♦？
授業終了間際、各々の指名紙が相澤先生より受け渡され週末までの提出を言い渡された上で授業は終了した。
そして昼休み。
自分達の紙を食い入るよう見ている中。
倉持はというと。
（……どうしようかな。）
ノーマル、プロ、そしてエンデヴァーを始めとする上位勢。
その殆どが彼の元へと指名した。

ある者はその強さへの畏怖、ある者は宣言の時の意思、あるいは個性の謎云々。
数多の理由が書かれた紙が山のように積み上がっていた。

そんな中、ある者が彼に話しかける。

「……すまない、少し来てもらえないか。」
「……いいよ。」
それは一限目に倉持を見ていた飯田からだった。

そして、人気が無いある場所にて
「……どうしたの？」
「……頼みがあるっ。どうか……どうか兄を救ってはくれないかっ……!!」
堪え切れない涙を流した男の心からの叫びを倉持は聞いたのだった。

再誕。

飯田が涙混じりに話したのを纏めると。
体育祭の裏で飯田の兄であるインゲニウムと昨今世間を騒がせているヒーロー殺しのステインが激突。
その結果、インゲニウムは意識不明の重体に陥り、現在は意識を取り戻してはいるもののもう二度とヒーローとしてはやっていけないとの診断が下された。
……だが、そこに光はあった。
それは倉持が持っていたあの緑色の拳銃。
インゲニウムの見舞いに行き、その事を告げられた時に咄嗟に口に出してしまったのだという。

確かに、神経の断裂や肉体欠損であろうとも回復弾で簡単に治す事は可能だろう。
しかし、あれは0から1を作り出すなんてものではなくあるべき姿、つまり肉体が記憶していたのをそのまま生やすという形だ。
撃てばインゲニウムは確かに回復するだろう。だが、リハビリに幾ら費やす？
……口頭でだけで判断しても約1年はかかる。
そもそも、倉持はある特殊な理由で例外であり、相澤先生の場合は筋断裂と粉砕骨折のみ。
あれぐらいならば、即座に復帰できるだろう。
だが、神経ともなれば話は別だ。繋げ直しても身体に違和感が生じて歩く事すら困難だろう。
最低でも1年、どんなに努力しても半年。
その間にも筋力は衰え、ヒーローとしての知名度も薄れていく。
どう転んでもヒーロー、インゲニウムは一幕の華を閉じざるを得ない。
……倉持はこう結論付けた。

だが、やるかやらないかと言われればやる。
何故なら、僕はサルバリオンだから。
回復弾だけでは無理でも他の方法なら幾らでもある。
一人で駄目でも皆がいる。
…ならば、やる意味は確かにあるのだ。
但し、荒療治にはなるが。

「……少し、君のお兄さんには厳しい闘いになるかもしれない。それでも良いなら。」
飯田は少し悩んだ、これは自分で決めるべきなのかと。
だが、今だけは理性よりも感情が勝った。
否、勝ってしまったのだ。

「……頼むっ!!」
今、賽は投げられた。

◊♦？
病院内、とある一室にて。
ベッドに寝たきりであるインゲニウムと今しがた飯田と共に足を運んだ倉持が話している。
既に飯田は席を外しており、そこには2人しかいなかった。
少し、気不味い空気が流れた後。
インゲニウムの方から倉持に話しかける。
「……君が天哉が言ってた……。」
「はい、倉持管理です。」
「……本当なのか？俺のこの感覚の無い足が……。」
「はい、治ります。任せてください。」
「……そうか……そうかぁ……任せてもいいか？」
「はい、ですが一つ確認を。これから僕は貴方をこれで撃ちます。」
そういうと倉持は回復弾を取り出す。
見た目は唯の拳銃であるが故にインゲニウム、本名飯田天晴は多少

驚く。
だが、彼もまたテレビで倉持の決勝戦を見ていた事からソレについては直ぐにわかった。
そして、うなづく。
「……あぁ。」
「そして、これを撃った瞬間貴方には想像もつかない程の激痛が走るでしょう。更に言ってしまえばこれだけでは貴方は現役復帰は叶いません。」
「……他にも何かするって……事か？」
「はい。ですがこれは僕の個性に関する事。できれば他言は……。」
「……わかった。それぐらいなら容易いもんさ。」
「……では、覚悟はよろしいでしょうか。」
いよいよ、治療が始まるとなり唾を飲み込む。
そして、彼は覚悟を決めた。
「あぁ。やってくれ。」
「……では、天国（彼の元へ）へいってらっしゃい。」
そして、倉持は彼に発砲した。
……その瞬間、部屋にはインゲニウムの絶叫が響きわたった。

◊♦？

痛い痛い痛いイタイタイタイタイタイタイタイ!!!!
脳が焼ききれそうな感覚と共に確かにナニカが繋がっているような感触がある。
折れた所、粉砕した所は聞くのも嫌になる程痛々しい音でももって元に戻っていく。
そして、足の感覚はマグマに使っているかのような熱さとともに確かに伝わりつつある。
一つだけならまだ耐えられたかもしれない。
だが、それらは全て同時に発生したもの。

脳は凄まじい勢いで痛みを訴え、身体はそれを拒む様に痙攣する。
５分いや１０分がまるで１年のような苦痛を受けながら彼は緩やかに意識を暗転させた。

……そして、傷は癒えた。
次の手順だ。

倉持は『貴方は幸せでなければならない。』を取り出し、彼をそこへ放り投げる。
行うのは『肉体の最適化』だ。
筋組織、神経回路、そして脳構造。
ありとあらゆるものが飯田天晴の肉体において最も優れたモノへと置き換えてられていく。
外見では彼は彼のままだろう。
だが、中身は既に彼では無い。いや、それどころか最早人間のそれでは無い。
肉体に関わらず精神構造もまた彼が幸せでなければならないように設定された。
だが、これでもまだ足りない。
肉体、精神は既に人間であって人間では無い。
それでも、彼は再び傷ついてしまうだろう。
体は出来ていても個性がそして技術が完成された肉体に追いつかなくなり
再び、彼は苦痛を受けるだろう。
……それはいけない。
彼はもう泣くべきでは無い、悪に挫けず、家族を守り、そして夢を叶えるべきだ。
だから。

『……其方に祝福を。其方に加護を。どうか其方が健やかにその生を全うできるよう。最後に其方が我が友の助けとなるよう。…我の其

方への贈り物だ。』

……かくして、飯田天晴は生まれ変わった。

彼は苦痛を受け、作り変えられ、そして祝福された。

目を覚ました彼は祈りを捧げる。

……我が身を救ったかの神とその友に感謝を。

あなたは使徒である。この岩の上に私と友の教会を建てよう、誰であろうとそれには打ち勝てない。

……何処かで鐘のなる音が確かに聞こえた。

再確認。

インゲニウムの謎の復帰がテレビで放映され、世間は大いに賑わっていた。

それもそうだろう、本来ならばヒーロー活動すら困難だった彼が一晩の内にまるで時が巻き戻ったかのようにプロ活動に勤しんでいる。

家族に聞いても知らない、医療関係者からはあり得ないの一言でありそれがまた世間に混乱を与えている。

また、テレビ内では考察班がああでも無いこうでも無いと議論を重ねている。

取材班は当の本人であるインゲニウムに取材を行った所。

ーーそうだな、俺はきっとまだ神に見捨てられてなかったって事でしょう。

ーーその幸運を生涯忘れずにこれからも沢山の人達を助けていきたいです。

とのコメントが発表された。

そんな映像が流れたからはや４日が経過した翌週の月曜日。

倉持は轟と共にＮｏ．２ヒーローであるエンデヴァーの事務所へと足を運んでいた。

双方の理由としては至極単純。

轟からすればオールマイトを除けば最も優れたヒーローは父であるエンデヴァーであり、未だ左の炎は制御が難しい。

ならば、多少の怨みはあれど彼に教えを請うのが最も倉持に追いつく為の近道だと考えたからである。

一方の倉持はというと、これまた単純。

彼自体は既に最低限学ぶ事は叩き込まれており、個性を含めた戦闘能力ならば最早トップ陣のプロに勝る。

しかし、ヒーローは一芸に秀でるだけでは勤まらない。

仮にも『救済』を掲げるのならば、救助や協力の実戦を積まなければならない。
ならば、最も勢力が大きい所で経験を積むのはある意味当然の選択といえよう。

そんな思惑を抱えた彼らは現在、一つのオフィスビルの目の前に建っていた。
轟は若干の苛立ちを、倉持はそんな彼の感情を読み取りはしたものの特に思う事は無くその中へと足を踏み入れた。

「お待ちしておりました。轟焦凍様並びに倉持管理様でお間違いないでしょうか？」
入って直ぐに受付であろう女性が彼らに近づき、本人確認をとってくる。
「あぁ。」
「はい。」
当然の事ながら、それに応答する彼ら。
それを聞いた女性はこう続ける。
「到着後直ぐにコスチュームに着替えて社長室に来るように、と社長（エンデヴァー）より申し付けられております。更衣室へとご案内しますので、こちらにお越し下さい。」
そう言うと早速彼女は彼らを案内しようとする。
轟はそれに着いていくが、倉持はコスチュームですら個性の一つである為に
「……御気遣いありがとうございます、しかし私は……。」
そう言いながら、彼は体を僅かに発光させ『失楽園』へとその衣を変える。
「これがコスチュームですので。」
女性は少々驚きはしたものの、そこはプロ。
直ぐに彼に対してこう告げる。
「では、轟様のお着替えが終わるまで席に座ってお待ち下さい。」

「わかりました。」
「改めまして、ご案内させていただきますね。」

◇◆？

「……よく来たな焦凍。そして倉持。歓迎するぞ。」
轟の着替えが終わり、女性に案内された部屋を開けると中央に座るエンデヴァーがまず始めに彼らを迎え入れた。
左右には３０は超えるであろうエンデヴァーのサイドキック達が一同に揃っており、この事から破格の対応だと彼等は察した。
「雄英高校一年、倉持管理です。よろしくお願いいたします。」
「……轟焦凍です。」
深々と礼をとる倉持。
最低限の礼を取ってやっている轟。
サイドキック達は、対照的な２人……と言っても轟の方をなんだか微笑ましい目で見つめていた。
例えるなら、反抗期の孫をみる祖父母のような目。
轟家の複雑な家庭事情を知らないが故の目なのだろう。
轟はなんだかむず痒い気分になった。

そんな中、まず始めにエンデヴァーからの要求が入る。
「早速だが、お前たちのヒーロー名を教えてもらおう。職場体験とはいえヒーローコスチュームを身につけた以上、お前たちは仮とはいえ一端のヒーローだ。これからその名とその姿を背負っていくのならば、これよりはヒーロー名で呼び合うことを心懸けろ。」
「……ショートだ。」
「ほう？……ほうほうほう。」
若干の苛立ちを隠そうともせず告げられたヒーロー名にエンデヴァーは表情こそ平常なものの声には喜びが若干乗り、炎は少し出力が上がっていた。
親としては名付けた名前をそのままヒーロー名にしてくれるのは嬉しいのだろう。

……実際には名付けを面倒に思った轟が本名をそのままヒーロー名にしたという背景は知られない方が良いのだろうが。
次は倉持の番。
「サルバシオンです。」
「……ほう。」
倉持が告げたヒーロー名にはエンデヴァーの何かに引っかかるものがあったのだろうか。
少し見定める様な目をし、その後興味深そうな目で彼を見ていた。
「良し、ではショートそしてサルバシオン。先ずは俺のサイドキック達を紹介しよう。全員のヒーロー名、そして個性を頭に叩き込んでおけ。メモを取っても構わん。いざという時に忘れていましたはヒーローとしては最悪という事を覚えておけ。
だが、お前達の個性は既に伝達済みだ。安心しろ。」

エンデヴァーの言葉に並んでいたサイドキック達が順々に自己紹介を始めた。唯強い個性だけで無く、便利な個性を持ったヒーローたちも揃っている。
やはり、プロＮｏ．２ともなればサイドキックの質も段違いという事なのだろう。
その全てを彼等は頭に叩き込んでいった。
「自己紹介は終わったな。では次に、お前たち２人のスケジュールを伝える。まず、今日は訓練に時間を割くことにする。そして明日は朝から移動、東京都の保須市に出張する。」
「保須市だと？」
「……それって、確か。」
保須市と言う言葉に彼等は反応する。
その市にはつい先日、インゲニウムを再起不能に追い込んだヒーロー殺し『ステイン』が現れた市だ。
ステインは今に至るまで１７名のプロヒーローを殺害しており、その実力は

折り紙つきなのは間違いないだろう。
全国各地に転々と現れながら複数のヒーローを負傷ないしは殺害している
凶悪なヴィランだ。
「そうだ、前例に則るなら奴はまだ保須市に潜んでいる確率が極めて高い。
これ以上被害を広げさせる前に必ずや我々の手で奴を、ヒーロー殺しを捕まえてみせる!!」
そう言いながら、その身に秘める正義の闘志を燃やすエンデヴァー。
その裏にあるだろう何かには倉持は気付かない事にした。
しかしながら、一つ気になる点が倉持にはあった。
飯田は確か保須市に居たはず。兄が無事とはいえ正義感の強い彼だ。
ステインを自らの手で……なんて事を考えなければいいのだが。
「しかしだ、お前達には奴と戦闘する一切を禁ずる。例え奴と遭遇したとしてもサイドキック達の指示の元、避難誘導や後方支援にあたれ。……何故かは聡明なお前達だ聞かなくても分かるだろう。良いな?」
その言葉に、彼等はあるルールを思い出す。
ヒーロー資格未拾得者は公に個性を使用する事は禁じられている。
ヒーローの卵である彼等だが、卵であってヒーローそのものでは無い。
よって、ヴィランであろうと個性を使用した戦闘行為はれっきとした犯罪、
暴行罪に該当してしまう。
唯一の例外といえば正当防衛。
個性を使用しなければどうにもならなくなった時、つまり『急迫不正の侵害に対して自己または他人の権利を防衛するため、やむを得ずした行為』
に当たれば良し。当たらなければその時点で逮捕物だ。

更にその行使にしても保護管理者、つまりはエンデヴァーの許可無しには使用ができないのだ。
加えるなら、ステインと戦闘してとしても倉持、そして轟の勝率は確かに存在する。
特に倉持は『個性(彼等)』さえ出してしまえば無力化も容易だろう。
しかしだ、それを踏まえても足りない物がある。
……経験不足。
唯の戦闘ならまだしも救助を前提とした戦闘行為に関しては素人に等しい彼等。
仮に人質など取られてしまえば、その時点で彼等の敗北は確定する。
相手は非道のヴィラン。しかも実力はトップヒーロー級。
当然の様に行う可能性は決して無いとは言い切れない。
今の彼等は例えるならば、爆破スイッチを持った赤子。
客観的に自分を見れる倉持、敗北を知って成長した轟は自らの危険性を理解している。
故に彼等は頷く。

「良し、ではショートは俺に付いてこい。炎熱個性用の訓練室に向かう。サルバシオンはまた別だ。少し話がある。他の者(サイドキック)達はいつも通りのチームを組みパトロールだ！どんな小さな犯罪も決して見逃すな！行けイ！」
「はっ!!!」
エンデヴァーがそう号令を下すと、一糸乱れぬ動きでサイドキック達は各自の行動へと動き出す。
といっても夜間通勤の人もいるため帰宅する者や仮眠室に向かう者もいるそうだが。
「ではショート、俺に続け！」
「……チッ！」

サイドキック達が全て出て行った後、轟親子もまた訓練室へと向かっていった。

◇◆？

「……さて、サルバシオン。お前を残したのは少し聞きたい事があったからだ。」

轟を訓練室へと案内し再び戻ってきたエンデヴァーは開口一番にこう伝えた。

「お前の個性のデータを見せてもらったが…いくつか、不可解な点があった。」

「……そうなんですか？」

「……まぁいい。そうだ、例えば決勝戦の時だ。アレはなんだ？あんなものはこの個性のデータにはどこにも無かった！」

「……。」

「そう疑いをかければ分かり辛くとも穴を見つけることが出来る。つまりだ、お前の情報は誰かが意図的に操作したものだ。それもお前に近しい誰かが。」

倉持はその犯人を直ぐに特定した。間違いなく……。

（……なにやってるの……アンジェラ。）

「その上で聞こう。」

ーーお前は一体何者だ？

ーーお前の救済とは一体なんだ？

Ｎｏ．２の目に灯る炎が、彼の内部（ナカ）に牙をたてた。

謀略。

「もしもし、あぁ私だ。やはりバレたぞ。」
「……そうか。ならば私が出る幕は無さそうだ。」
「やはり、お前は敵に回すと面倒だな。」
「ではな、そちらも精々収穫祭にならない事を祈っておくとも。」

◇♦？

「さて、聞かせてもらおうか。」
目を細めるエンデヴァー。
その目からは一言の欺瞞を許すまいとする意思が伝わってくる。
「……そうですね。エンデヴァー。貴方は僕の過去を知っているでしょうか。」
「……あぁ、一通りはな。貴様の生誕地には俺も足を運んでいる。」
「僕の個性の情報の穴は恐らくそれが原因かと。」
「何？」
「……もしかしたら、まだ生き残っている可能性がある。という事です。」
「……ふむ、続けろ。」
「僕は全ての情報を相澤先生に伝えました。それは間違いありません。ですが、その事を良く思わない人も確かに存在するのです。」
「……それが。」
「はい。」
「……成る程、嘘はついていないな。時間を取らせた。話は終了だ、次は俺と組手だ。ついてこい。」
「わかりました。」
そして、彼等は訓練室へと向かっていく。

倉持がほんの一瞬、耳に触れた。

◊♦？

それは何処かの社長室。

中央に座るのは、水色の髪を靡かせる女性。

彼女の耳には小型の機械がついており、そこからは倉持とエンデヴァーの会話が流れてくる。

そう、先程の話はアンジェラが倉持に話させるように指示した全くの嘘。

既に彼がいた研究所の生き残りは彼女らが子孫にあたるまで皆殺しにしたし

情報を改竄したのはそもそもアンジェラだ。

なのに、何故エンデヴァーはその嘘を見抜けなかったのか。

「……さて、これで後はウイルスが流れていくのを待つだけかしら。」

……さて、皆様は電脳ウイルスというのをご存知だろうか？

この個性が世の中を覆い尽くした現代において、インターネットというのもまたヴィランが個性を使いあらゆるデータベースに侵入するという行為は

少なくない。

同時にそれに特化したヒーローも知られていないだけで確かに存在するのだろう。

しかし、こと超上級ＡＩであり情報の隠蔽、偽装ならばこの世界に敵はいないのがこのアンジェラ。

そんな彼女が倉持という自身の最も愛する者の情報をおざなりにする筈も無い。

……アンジェラがそのデータに仕込んだのは、彼の声に反応してあらゆる事が疑えなくなる感染型のウィルス。

言ってしまえばＸに行なっていた記憶処理の応用の様なモノ。

これの質が悪い所は感染した事に気付けない事。更にデータを見た者は対象を問わずに感染する事だ。

人は勿論、動物、鳥、そして機械ですらデータを『見た』のなら感染する。

結果として、その情報を見たエンデヴァーは見事に感染。
倉持の嘘に全く疑問を持つ事は無かった。
「まぁ、管理の事でしょうからここから先は問題ないわね……これが成長、という奴なのかしら……かっこよかったわ。」
彼女は体育祭の彼を思い出し顔を赤める。
だが、直ぐに顔色を戻し目の前でソファに座っている存在に話しかける。
「……それで、何の用かしら？」

ーーオール・フォー・ワン。

「いや何、君と少し話がしたくてね。」

◇♦？

「ふん!!」
右腕が豪炎が吹き上がり、倉持は最小限の動きで回避する。
だが、右腕は回避行動を起こさせる為のフェイク。
「赫灼熱拳ジェットバーン!!」
本命の左腕が彼の腹へと熱拳が迫る。
倉持は敢えて、右腕で受け逆に左腕で彼の腕を掴んで放り投げる。
失楽園のお陰でダメージこそ無いので安心して受けられるのだ。
「ぐぬぅ!!」
投げられたエンデヴァーはその場で一回転。
地面との摩擦を起こしながらも無事に着地する。
「……ふむ。やはりか。」
「……どうしたんですか？」
エンデヴァーはこの一連の流れからある事を観ていた。
「貴様、自分の身のダメージを度外視しているな。」
「……はい。」
「確かに貴様の個性で作られたコスチュームは驚異的だ。同時に体育

祭で見せてもらったあの弾丸も個性社会では革命となり得るだろう。だが、それ故に貴様はダメージを度外視している。俺ならば再生も耐性も攻略出来る。
　何故ならば、俺は酸素濃度を支配できるからだ。この調子なら俺の他にも攻略する者も現れるだろうな。例えば再生する前に耐性以上の一撃を喰らわせられる奴とかな。」
「……ですが、僕には。」
「そうだ、お前にはあの奴らがいる。だが、そいつらを出す前にそれを喰らえば？」
「……気絶、無いしは死亡の可能性。」
「良し、流石は首席の事はある。頭の回転は速いようだな。ならばこれから俺が言わんとする事もわかるか？」
「はい。」
「良し、では個性を解除しろ。これから生身の状態で俺の攻撃を避け続けてもらう。安心しろ、本気は出さんからな。」
　個性を解除し、再び構えを取る。
「宜しく御願いします。」
　同時にエンデヴァーも豪炎を吐き出させ、高速で接近する。
「いくぞ!!」
　だが、その直後電話が鳴り出す。
「む？……少し待て。」
「あぁ、何？分かった。」
「今から向かう、ではな。」
　電話を切ると同時にエンデヴァーは炎を解除する。
「援護要請が入った、訓練は後は自由にしておけ。明日に響かせることは許さんぞ。」
　そうして、エンデヴァーは急いで訓練室から退室していく。
　取り残された倉持は。
（……。）
　何かを思い悩んだ、様子を見せるがそれも一瞬。
　個性でいつもの彼女らを呼び出し、再び訓練を再開していったので

あった。

……邂逅まで後2日。